

富山大学 教養教育院

令和6年度

FD研修会報告

Faculty Development Report

FD



Liberal Arts and Sciences at **University of Toyama**

目 次

1. 開催趣旨と総括	1
2. 第1回「新教養教育先行大学(弘前大学)に学ぶ教養改革 教養教育院FD2024 vol.1」 『弘前大学の全学必修導入科目「地域学ゼミナール」について』(令和6年8月28日開催)	
実施計画	6
FD研修会での説明スライド	7
講師への追加質問とその回答	36
参加状況・参加者アンケート	43
3. 第2回「新教養教育先行大学(宇都宮大学)に学ぶ教養改革 教養教育院FD2024 vol.2」 『宇都宮大学の新教養科目構成とルーブリックについて』(令和6年9月25日開催)	
実施計画	48
FD研修会での説明スライド	49
参加状況・参加者アンケート	84
4. 第3回「新教養教育先行大学(東北大学)に学ぶ教養改革 教養教育院FD2024 vol.3」 『東北大学の全学必修導入科目「学問論」について』(令和6年10月30日開催)	
実施計画	88
FD研修会での説明スライド	89
参加状況・参加者アンケート	105

開催趣旨と総括

近年、大学と大学生を取り巻く環境は、様々な規模で大きく変動しています。社会の変動としては世界中を巻き込んだコロナ禍やウクライナや中東での世界情勢の悪化があります。また、深刻さを増す気候変動や自然災害があります。実際、私たちは令和6年1月1日に能登半島地震を富山大学の近隣で体験することとなりました。また、経済環境や技術変化も急加速しており、特にAIに代表されるデジタル技術環境の進化スピードが激流のごとくである一方で、これら技術の適切な運用について、まだまだ人類は対応し切れていません。これらの様々な自然と社会の環境変化に対応出来る人材を輩出する場として、大学教育改革はますます重要となってきました。大学での専門教育はもちろん、特に教養教育は環境変化にともなった教育を若者に提供する改革を断行しなくては時流の波に溺れてしまう時代となっています。

このような背景の中で本学では再来年の令和8年を教養改革の大きな転換の一つとして位置づけ、大改革の準備を進めているところです。もちろん改革には大きなエネルギーが必要であり、現状、教員の皆さんは将来の変革に対して不安と期待が入り交じった状態で、ややもすると進むべき方向に確信を持たないままに準備を進めていらっしゃると思われることです。

そこで、視野を広げて全国の大学を見渡すと、すでに先行して新しい時代に即した教養教育改革をすすめるべく実践されている先例がいくつか見受けられます。私たちもこれら先行事例に学ぶべく、今年度は3回連続のFDとして、弘前大学、宇都宮大学、東北大学よりそれぞれ近年の教養改革に実際に主導された先生方に講師をお願いして、講演をして頂きました。

第1回のFD研修会は8月28日にMicrosoft Teams 会議によるオンライン配信によって開催しました(開催後FD動画配信あり)。講演は「弘前大学の全学必修導入科目「地域学

ゼミナール」について」という演題で講師は、弘前大学の教養教育開発実践センター長、城田 農先生、及び、同センターの副センター長である清水 稔先生にお願いしました。弘前大学は教養改革の先行例の代表です。この回で、私たちは弘前大学の必修導入教育の実例を具体例として参考とすることができました。弘前大学では「地域学ゼミナール」という科目を全学必修の導入科目として実践しており、全学的に行うための教員出動態勢とTAの指導と配置準備体制を十分な準備企画の元に実施されていました。この準備体制構築のための教員確保と養成、実施、評価体制の具体的にご苦勞についても話を聞くことが出来ました。また、この科目は地域に根ざした課題のグループワークという事で大学と地域の連携にも貢献していることから、地方大学の地域戦略として一面もお話しいただきました。この回のFD総参加人数は28名で、参加者コメントとしては導入教育の大人数を対象としたGWの実践例として学ぶことが多々あったとするものが多数でした。一方で若干の参加者から講演時間の短さなどFD企画についての指摘もあり、今後のFD改善を望む意見もありました。

第2回のFD研修会は9月25日に五福キャンパス共通教育棟D棟1階 D11 教室において対面開催をしました(オンライン併用と、開催後FD動画配信あり)。講演は、「宇都宮大学の教養科目構成とルーブリックについて」という演題で講師は、宇都宮大学の大学教育推進機構 基盤教育センター副センター長、石井 和也先生にお願いしました。宇都宮大学もまた、教養改革の先行例の代表です。この回で、私たちは宇都宮大学の教養基盤教育の構築と具体的な教養科目の学生評価についての先事例を参考とすることができました。近年、学生評価の明確化のため、ルーブリック評価についての研修もしばしば行われるようになりましたが、教養基盤教育に特に対応した具体的ルーブリックとそれに対する学生の反応と教員の反応、そして今後の改善点などを明快に講演していただきました。また、宇都宮大学の教養基準として特色のある「宇大スタンダード」と銘打った宇都宮大学として特色のある教育方針や宇大ラーニングサポーター制度など、教養教育の独自のサポートシステ

ムなどについても紹介していただきました。この回のFD総参加人数は22名で、やはり、高いレベルで作成された「ルーブリック」が参考になったという声が多数ありました。この回も質疑応答の時間が短いのが残念という声がありました。

第3回のFD研修会は10月30日に五福キャンパス共通教育棟D棟1階D11教室において対面開催をしました(オンライン併用と、開催後FD動画配信あり)。講演は、「東北大学の全学必修導入科目「学問論」について」という演題で講師は、東北大学 理事・副学長、高度教養教育・学生支援機構長、滝澤 博胤先生にお願いしました。東北大学は旧帝大の中でも教養改革を積極的に推進している大学の代表です。この回で、私たちは東北大学の必修導入教育の実例を具体的に参考とすることができました。東北大学では「東北大学ビジョン2030」という大改革をかかげており、東北大学の全学教育改革の一環として全学必修の導入科目を令和2年度より実践しています。令和4年度より全学教育新カリキュラムに移行してカリキュラムと科目数の総合的な再構築を敢行したとのことでした。ここでは学年を横断した「学問論」科目を展開しているようで、1年生からは「学問論・学問論演習」を、学部高学年から大学院では「展開学問論」という大学の入学から卒業にわたる科目展開の大構想中における位置づけをもって、1年生必修導入科目の「学問論」があるということからお話をいただきました。このような大きな構想の一部として教養教育を眺めるとするのは、なかなか斬新でありました。またこのような見地から見ると「全学必修導入科目「学問論」が理系・文系を問わず全ての学生の学教基盤として重要である事が認識させられました。そして教員とTA約40名で学生2400名に対してアクティブラーニングを展開する実例を紹介していただきました。富山大学で果たして同様のことが可能なのか？東北大学の実践状況をもっと毎年教えていただいで参考に来て実践できる部分から取り入れて行くことが重要ではないかと思われました。この回のFD総参加人数は25名で、やはり、「大きな大学」ならではの教養教育構想で私たちにはちょっとハードルの高い改革の紹介であったのではないかという声とそれでも具体的な導入科目の戦術として、導入科目を

1週ごとに対面とオンデマンドを組み合わせる点などが参考になったという声と、やはり講演時間が短かったという声がありました。

以上、令和6年度の教養改革先行3大学の実践例を講演していただき、富山大学教養改革が目指す大方針は概ね各大学と共通していることの少しの安心と各大学の教員が叡智を集積して実践している特色のある導入教育、評価ルーブリック、地域連携、専門連携の実態を多くの障壁を乗り越えつつ発展させてこられた直接の功労者である演者の方にお話いただいたことは、今回の富山大学FD参加者全員ひとりひとりにとって、様々な学びとなったことを確信します。今回のFDに参加された全ての方々に感謝いたします。

令和6年度教養教育院教育改善推進委員会委員長
片桐 達雄

第 1 回

「新教養教育先行大学(弘前大学)に学ぶ教養改革
教養教育院 F D 2024 vol. 1」

『弘前大学の全学必修導入科目「地域学ゼミナール」について』

(令和 6 年 8 月 28 日開催)

令和6年度第1回教養教育院FD 実施計画

テーマ「新教養教育先行大学(弘前大学)に学ぶ教養改革 教養教育院FD2024 vol.1」

1. 開催趣旨

温暖化に代表される地球環境の劇的変化、コロナ禍、デジタル技術の急速な進展など世界中で様々なレベルでの人類を取り巻く環境は急激に変化しています。このような時代の変動を見据えて、これらに対応しうる人材を育成するため大学教育は大きく変わりつつあります。

全国の大学を見渡すと、新しい時代に対応した教養教育改革を進め、魅力的な教養教育を実施している先例が見受けられます。本学では、二年後の令和8年度を教養改革の転換点と位置づけて大きな改革の準備を進めており、このような先行例を学ぶことで、私たちの改革をさらに実りあるものへ進めることが可能になると思われます。

今回のFDは、導入教育の先行事例として弘前大学の「地域学ゼミナール」についてお話いただき、本学の教養教育改革に資する教訓を得ることを目的として実施します。

2. 開催日時

令和6年8月28日(水) 13:30~14:30

3. 開催会場

Microsoft Teams 会議によるオンライン配信

4. 対象

本学教職員、非常勤講師

5. 次第

(1) 開会挨拶・趣旨説明

片桐 達雄 (教養教育院 教育改善推進委員長)

(2) 講演「弘前大学の全学必修導入科目「地域学ゼミナール」について」

講師：城田 農 氏

(弘前大学 教養教育開発実践センター長)

清水 稔 氏

(弘前大学 教養教育開発実践センター 副センター長)

(3) 質疑応答

(4) 閉会挨拶

武山 良三 (教養教育院長)



弘前大学全学必修導入科目「地域学ゼミナール」について

弘前大学教養教育開発実践センター
センター長・城田 農, 副センター長・清水 稔



発表内容

1. 第3期→第4期中期目標・中期計画における教養教育と地域志向科目
2. 「地域学ゼミナール」これまでの授業内容
3. 「地域学ゼミナール」これからの授業内容（案）

第3期→第4期中期目標・中期計画 における教養教育と地域志向科目

第3期中期目標・中期計画における教養教育と地域志向科目

新しい教養教育の目的

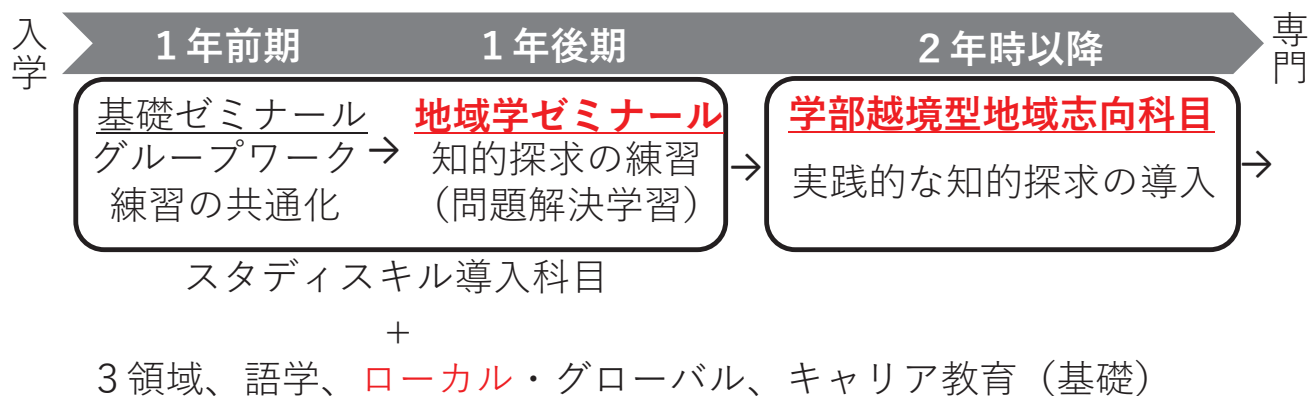
- 主体的・能動的学習への転換
- 文理融合教育による多元的な視点や思考法の獲得
- 国際共通語としての英語能力の獲得
- 地域志向性（地域が持つ強みや課題の理解、課題解決への意欲等）の涵養
- 国際性（異文化理解、多文化共生等）の涵養

弘前大学が育成する「地域志向型人財」

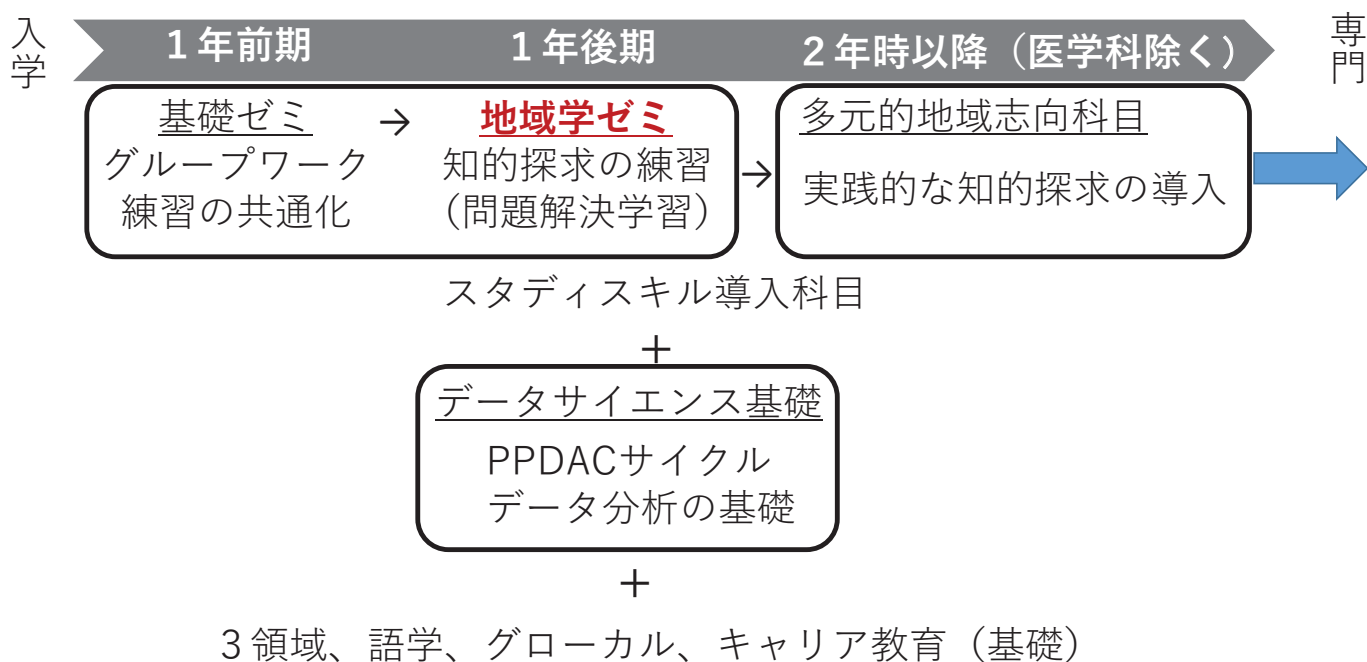
- ①グローバルマインドを持ち、地域に対する愛着、地域の創造を目指す意欲をもった人財
- ②複雑化する地域課題に文理の枠を越えて総合的にアプローチできる文理融合型の人財
- ③獲得した専門知を活用して地域の課題解決を主導できる人財

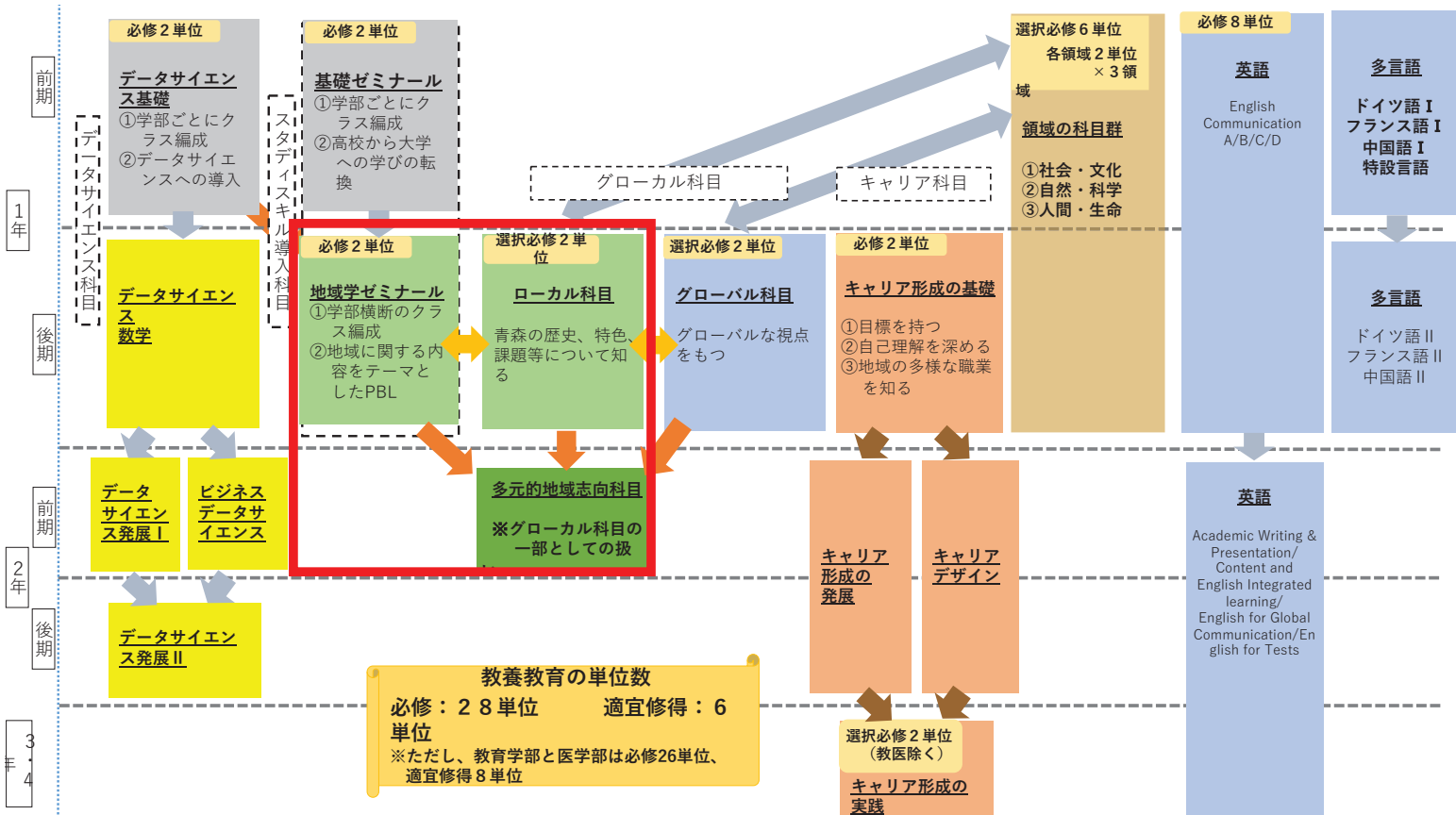
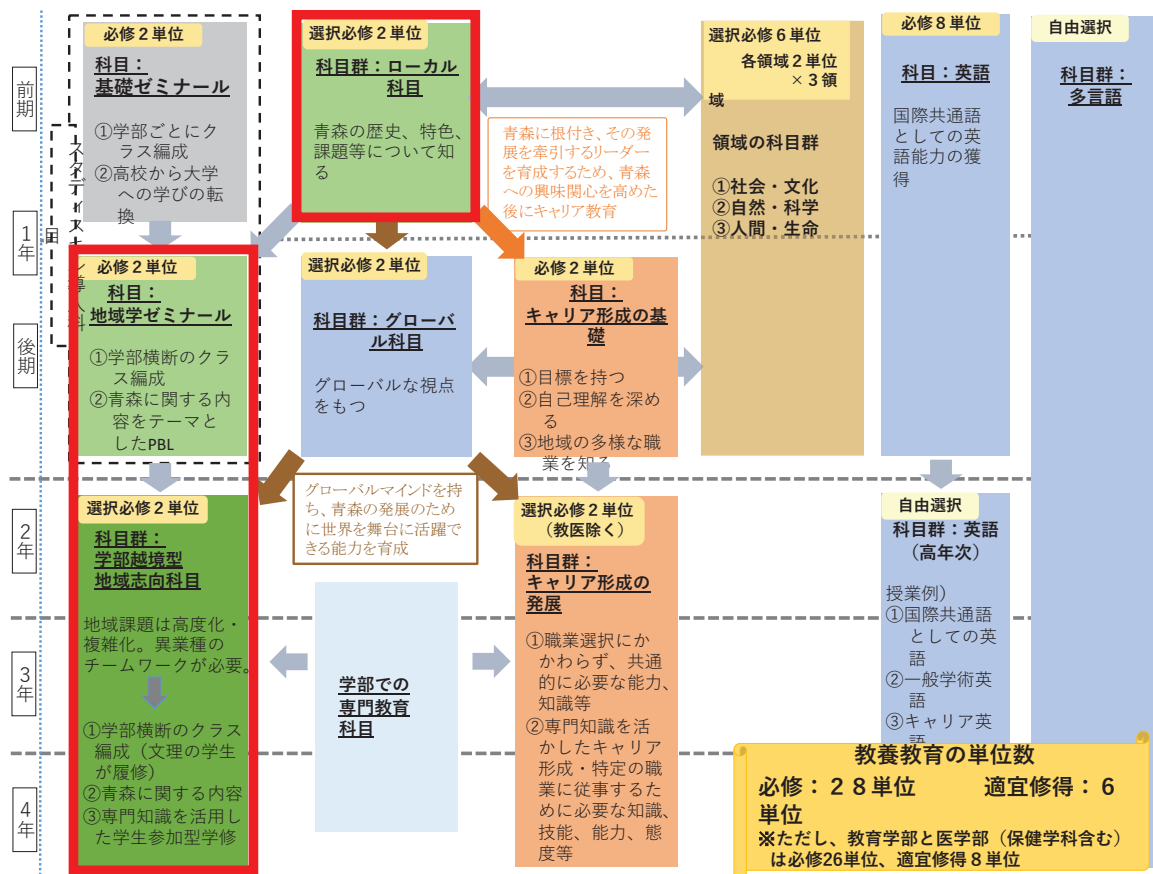
第3期中期目標・中期計画における教養教育と地域志向科目

2. スタディスキル導入科目と学部越境型地域志向科目の新設



第4期中期目標・中期計画における教養教育と地域志向科目





第4期中期目標・中期計画における地域志向科目の改訂

2. 地域学ゼミナールのカリキュラム改訂

スタディスキル＋地域志向＋データサイエンス

- ①学部横断チームの一員として自分の役割を認識し行動できること
(学び続ける力)
- ②学部横断チームの一員として他者の役割を判断し適切に働きかけることができること (解決していく力)
- ③地域の問題に関する資料(情報)の検索・収集・整理ができること
(解決していく力)
- ④発表会で適切な行動ができること (解決していく力)
- ⑤地域が有している課題を発見できること (解決していく力)
- ⑥地域の状況をデータに基づいて適切に把握し、それらの可視化や比較分析ができること (解決していく力)
- ⑦地域が有している課題に対し、エビデンスに基づいた解決策を提案できること (解決していく力)

第4期中期目標・中期計画における地域志向科目の改訂

3. 学部越境型地域志向科目の選択科目(多元的地域志向科目)化

学部横断型のクラス編成で、地域に関する内容について専門知識を活用して学んでいく、学生参加型学修(2年次前後期)

〈学部越境型地域志向科目〉

- ・青森の多様性と活性化
- ・青森の食と産業化
- ・市民参加と地域づくり
- ・青森エクスカージョン
- ・地域プロジェクト演習



〈多元的地域志向科目〉

- ・地域の多様性と活性化
- ・地域の食と産業化
- ・市民参加と地域づくり
- ・青森エクスカージョン
- ・地域プロジェクト演習

※コンセプトやカリキュラム内容は維持しつつ、必修科目から選択必修科目(グローバル科目群)に移行

「地域学ゼミナール」
これまでの授業内容

地域学ゼミナールFD

2023/09/25

次第

1. 地域学ゼミナールおよびスタディスキル導入科目の理念
2. 実施体制
3. 地域学ゼミナール概要
4. 昨年度の最終プレゼン紹介

13

1. 地域学ゼミナールの理念及び特色 (手引きご参照)

- (1) 探求力の基礎の育成
- (2) アクティブラーニング
- (3) パフォーマンス評価
- (4) 教員・TAの役割
- (5) 地域学ゼミナールにおける文理融合型の教育の特色

14

(1) 探求力の基礎 (5 頁)

弘前大学 学位授与の方針

弘前大学は、変化が激しく、将来予測が困難な時代においてこそ力を発揮できる主体的・能動的な探究者を育み、高い倫理観をもって知的探究に取り組むための三つの力を身につけた者に対して学位を授与します。

- 学際的な教養と高度な専門性を身につけ、学術的観点から自然や社会を**見通す力**
- 学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を**解決していく力**
- 常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく**学び続ける力**

15

(2) アクティブラーニング (7 頁)

基礎ゼミと地域学ゼミのセットで、解決していく力の基礎を
→アクティブラーニング

アクティブラーニング

- 手段として：学生の意欲や関心を高める（グループワーク等）
- 目的として：知的探求の模擬・練習（問題解決学習など）

16

(3) パフォーマンス評価 (8頁)

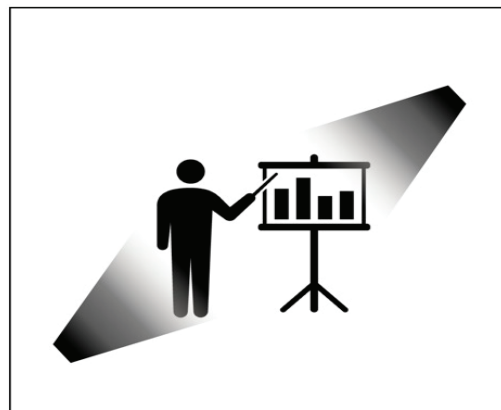
アクティブラーニング→成績評価しづらい・・・

- パフォーマンス評価：学生の活動の質を多角的に観察
- 教員の専門的判断

→教員自身の専門性や教育経験
→ルーブリック

学生に期待されるふるまいを
表の形でまとめたもの

(別冊資料3 ページ参照)

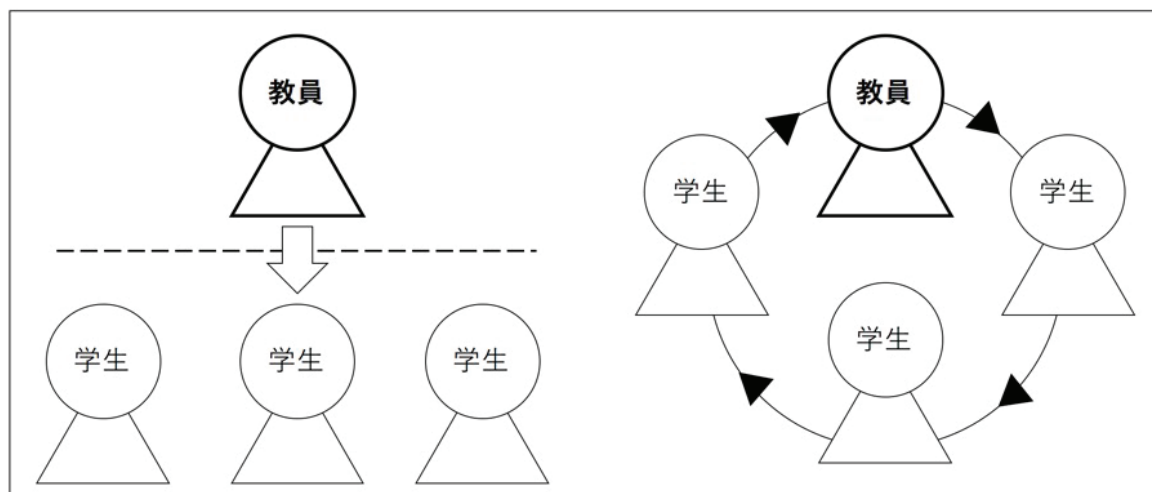


17

(4) 教員の役割 (11頁)

壇上の賢人

寄り添う案内人



(from Sage on the Stage to Guide on the Side)

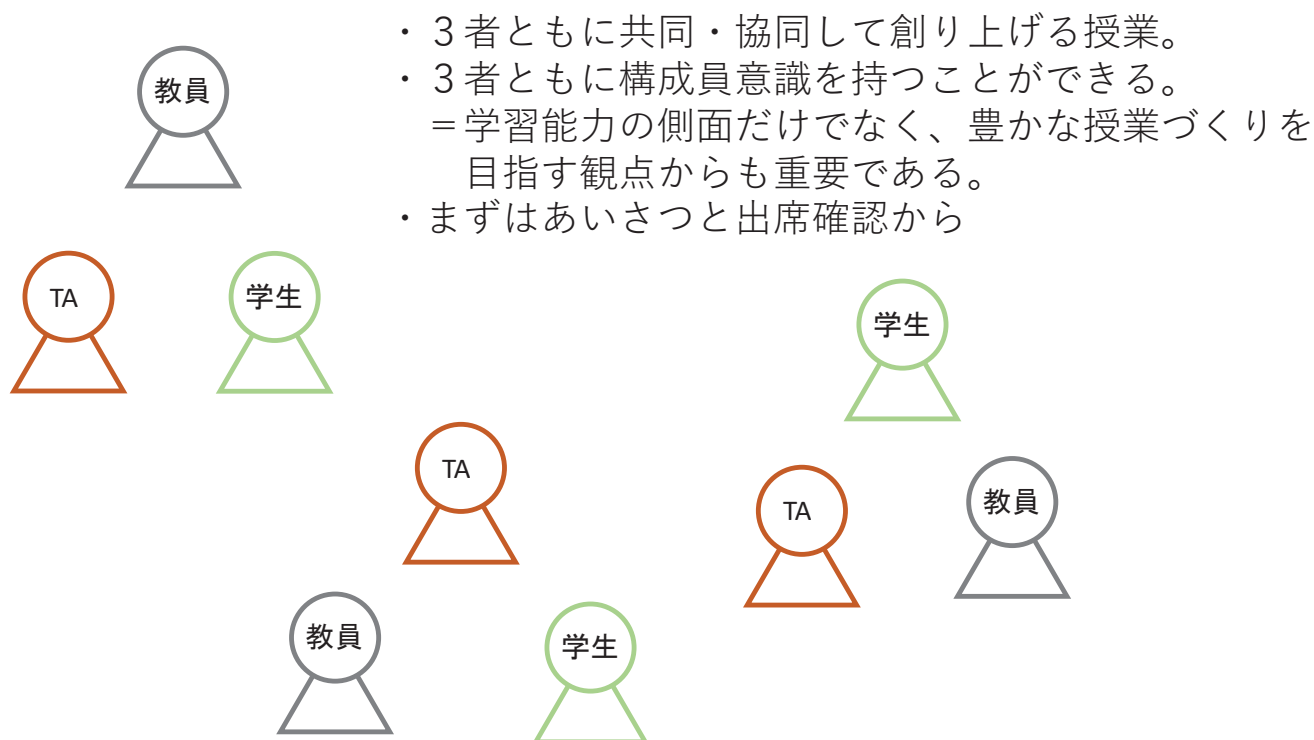
18

(4) 教員の役割 (11~12頁)

ー「寄り添う案内人」とは？

- アクティブラーニングを重視する授業の場合は、一般講義とは異なる役割が求められる
 - ・新しい役割への転換は『壇上の賢人から寄り添う案内人へ』
 - ・『壇上の賢人から寄り添う案内人へ』の2つの役割は、相互補完的なものであり、スタディスキル導入科目では「寄り添う案内人」としての役割が強く求められれている。
- 教員の知識や技能を伝達する役割から、学生たちの意見やアイデアを教育の支援によって引き出し、育む役割への転換
 - ・「寄り添う案内人」の役割を果たすためには？
 - ・「ファシリテーション」と「アセスメント」が重視される。
 - * 「ファシリテーション」とはチームにおける知的な相互作用を促進する働きのこと
 例えば、学生たちの議論が拡散しているのか収束しているのかを判断し、議論活性化のヒントを提示する = 議論整理のための論点を提示することがファシリテーターの役割である。
 - * 「アセスメント」とは、学生一人ひとりの性格や強み、弱みを把握すること
 例えば、グループワークを進めていくと、①学生の中には議論を自分の思うようにコントロールしようとする学生や、②逆に自分の意見を全く言えなかったりする学生も存在する。こうしたことが生成した際に、学生の目線に立ってその理由や原因を探ることが「アセスメント」である。

19



20

(5) 地域学ゼミナールにおける 文理融合型の教育の特色

- 地域学ゼミナールは、他大学にはない特色のある授業であり、文理融合型の教育のモデルとなっている。文部科学省**数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度のリテラシーレベルプラスと応用基礎レベル**に採択された。その**採択理由**に**地域学ゼミナールでPBLに取り組んでいることが評価**されていること。
- **地域が有している課題に対し、学問領域横断・学部融合型の構成員(教員・TA・学生)**によって解決策を検討することで、多角的な観点から問題解決につながる力が育まれること。

21

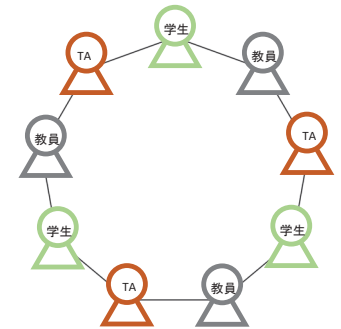
2. 実施体制について (資料：実施体制.docx)

- 教員・TA・学生、3者ともに、文理融合型の構成
- 学生にとっては、初年次教育から**他学部の学生と触れ合うメリット**
- 弘前大学のポリシー (p6) にあるように、学際的な教養と高度な専門性を育み、「**国際社会や地域社会の問題を解決していく力**」、「**新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力**」を育むことができる。

22

担当教員の配置

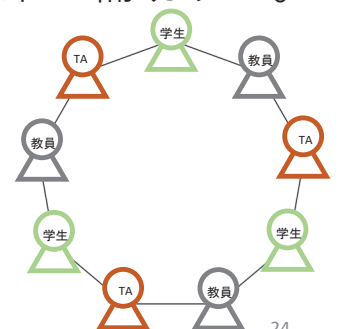
- 原則全て3名で担当する。
- 作業内容によっては教員1名あたり4～5グループを主に担当する。
- 取りまとめ教員を決めておくことを推奨する。



23

TAの配置

- 各クラスに3名のTAが配置される。
- 原則3名のTAが協力して業務を遂行する。
- 作業内容によっては教員1名あたりTA1名が作業を補助する。



24

3. 概要（資料：手引き19頁～）

- (1) モデル：問題解決学習
- (2) 到達目標
- (3) テーマ集
- (4) 授業計画
- (5) 学生が行う調査
- (6) 中間発表・最終発表形式
- (7) 成績評価
- (8) TAの役割

25

（1）問題解決学習（19頁）

- 社会の実際の問題に直面する
 - 問題の構造や原因を整理し、明確化する
 - 問題解決の手段を仮説として設定する
- 仮説を学問的な概念や論理・数理を用いて洗練させる
 - 仮説を具体的な実践を通して検証する

26

(2) 到達目標 (20頁)

チームワークに関する目標

- 学部横断チームの一員として自分の役割を認識し、行動できること
- 学部横断チームの一員として他者の役割を判断し、適切に働きかけることができること

問題解決に関する目標

- 地域の問題に関する資料（情報）の検索・収集・整理ができること
- 発表会で適切な行動ができること
- 地域が有している課題を発見できること
- 地域が有している課題に対し、解決策を提案できること
- 地域の状況をデータに基づいて適切に把握し、それらの可視化や比較分析ができること
- 地域が有している課題に対し、エビデンスに基づいた解決策を提案できること

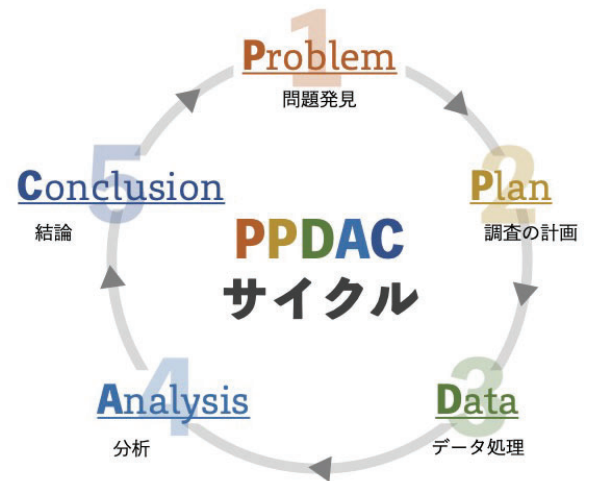
27

(3) テーマ集 (21頁)

- ① 「弘南鉄道大鰐線を存続させるには？」
- ② 「共に生きるあおもりー子育ての男女共同参画実現に向けて取り組むべきことは？ー」
- ③ 「りんごを海外で売りまくれ！！ー青森県りんご輸出量を倍増させよー」
- ④ 「若者の政治参加を促すには？」
- ⑤ 「白神山地魅力再発見ー白神山地観光客数の減少を食い止めろー」
- ⑥ 「身近なところから短命県返上ー弘大生の生活習慣病リスクゼロに挑戦ー」
- ⑦ 「買い物弱者を救え！」
- ⑧ 「オラこんな村イヤだ～急募：若者を青森に惹きつける方法」
- ⑨ 「学生目線の商品開発ー地域資源を生かした特産品を生み出すー」
- ⑩ 「北海道・東北地方に関するそのほかの課題」

28

(4) 授業計画 (21頁)



第一部 基本スキルの修得

- 第1回 ガイダンスとチームビルディング
- 第2回 ブレインストーミング
- 第3回 PPDACサイクル
- 第4回 情報へのアクセス

第二部 PPDACサイクルの実践

- 第5回 テーマを決める
- 第6回 要因を検討する
- 第7回 データを分析する
- 第8回 議論を集約する
- 第9回 中間発表

第三部 解決策の提案

- 第10回 解決策の候補を考える
- 第11回 解決策を検討する
- 第12回 解決策の効果を検証する
- 第13回 議論を集約する
- 第14回 最終発表(前半)
- 第15回 最終発表(後半)

29

(5) 学生が行う調査 (22頁)

- 1) 調査対象者に調査の趣旨を説明すること。
- 2) 調査内容が調査対象者に対し不適切でないこと。
- 3) 個人を特定する情報の取扱いに注意すること。

30

(6) 中間発表・最終発表 (22頁)

- パワーポイントによる口頭発表方式 (推奨)
 - BYOD (個人所有の端末を利用した授業形態)
 - クラウド (Teamsファイル共有) 上の共同作業
- ポスターセッション方式
- 紙芝居方式

31

(7) 成績評価 (23頁)

基本方針：

- 地域学ゼミは、問題解決学習を体験することを重視した授業ですので、学生に求められるパフォーマンスは、最低限、問題解決学習に主体的・能動的に取り組むことです。
- よって、学生には必ずしも質の高い問題設定や解決策の提案を求めるものではありません。
- **地域学ゼミのご担当の先生方は、授業に十分出席し、グループワークに全面的に参画している学生については、優を与えてください。**

32

達成目標	評価対象	評 点					自己評価 (0-4)
		4	3	2	1	0	
① 学部横断チームの一員として自分の役割を認識し行動できること	① チームに貢献する行動	自分の役割と個性を認識し、強みを活かして積極的な行動ができる	チームの中で自分の役割を認識し、行動できる	チームの中で自分の役割を認識し、行動しようとしていている	チームの中で自分の役割を認識したり、行動することがほとんどできない	チームの一員として行動する意思が見られない	
② 学部横断チームの一員として他者の役割を判断し適切に働きかけることができること	② メンバーへの働きかけ	メンバーの強みや弱みを把握し、チームのパフォーマンスを最大化するよう体制を構築、運用できる	効果的な役割分担についての提案やメンバーのパフォーマンスを高める働きかけができる	役割分担の検討やメンバーへのサポートにうとめている	役割分担の検討やメンバーへのサポートがほとんどできない	他のメンバーに働きかける意思が見られない	
③ 地域の問題に関する資料(情報)の検索・収集・整理・分析ができること	③-1 検索・収集	問題設定・解決策提案のために必須の情報に追加して、関連情報も豊富に集められる	問題設定・解決策提案に必要な情報を集めることができる	問題設定・解決策提案に必要な情報の収集にうとめている	問題設定・解決策提案に必要な情報をほとんど集めることができない	問題設定・解決策提案に必要な情報を集めようとしていない	
	③-2 理解・整理	情報を多角的に検討し、適切に理解・整理・分析できる	情報について検討し、理解・整理・分析できる	情報を理解し、整理しようとしていている	情報をほとんど理解・整理できない	情報を理解・整理しようとしていない	
④ 発表会で適切な行動ができること	④-1 発表資料作成	写真や図、表等を活用して、内容・体裁ともに優れた発表資料を作成できる	他人が見てわかりやすい発表資料を作成できる	他人が見てわかりやすい発表資料を作成しようとしていている	発表資料の作成がほとんどできない	発表資料を作成しようとしていない	
	④-2 発表表現	聞き手を説得するような質の高い発表ができる	聞き手にわかりやすい発表ができる	聞き手にわかりやすい発表しようとしていている	発表がほとんどできない	発表しようとしていない	
	④-3 質疑応答	他の発表を多角的に検討して質問したり、聞き手からの質問に説得的な回答を行うことができる	的確な質問・回答が行える	的確な質問・回答にうとめている	質問・回答をほとんど行えない	質問や回答を避ける	
⑤ 地域が有している問題を発見できること	⑤ 発見した問題の意義	社会的・学術的に見て、非常に重要な問題を見出せる	社会的・学術的に意義のある問題を見出せる	社会的・学術的に意義のある問題を見出そうとしていている	意義のある問題をほとんど見出すことができない	問題を見出そうとしていない	
⑥ 地域の状況をデータに基づいて適切に把握し、それらの可視化や比較分析ができること	⑥ 分析結果	十分な方法論により、分析や可視化を実施することができる	ある程度妥当な方法論により分析や可視化を実施することができる	分析や可視化を実施しようとしていている	分析や可視化をほとんど実施できない	分析や可視化を行おうとしていない	
⑦ 地域が有している課題に対し、エビデンスに基づいた解決策を提案できること	⑦ 提案施策	十分な妥当なエビデンスを提示している	ある程度妥当なエビデンスを提示している	エビデンスを示そうとしていている	ほとんどエビデンスを示すことができない	エビデンスを示そうとしていない	

⑥
地域の状況をデータに基づいて適切に把握し、それらの可視化や比較分析ができること

⑦
地域が有している課題に対し、エビデンスに基づいた解決策を提案できること

最終発表に対する相互評価の評価項目

5:とても優れている 4:やや優れている 3:どちらともいえない 2:やや不十分 1:とても不十分

問題の発見 (Problem) : 選択したテーマについて、科学的根拠に基づき地域の課題や探究の意義が明確に示されているか。

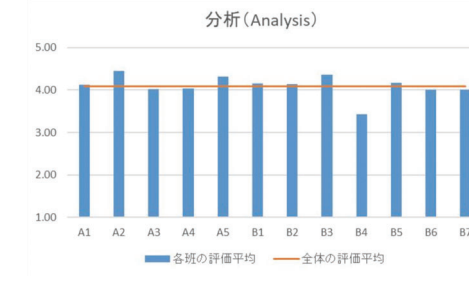
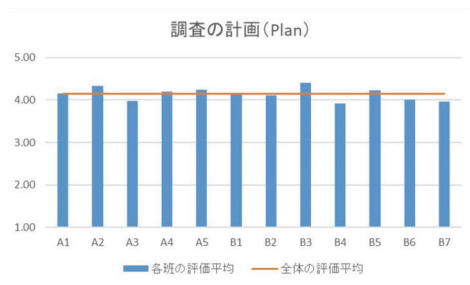
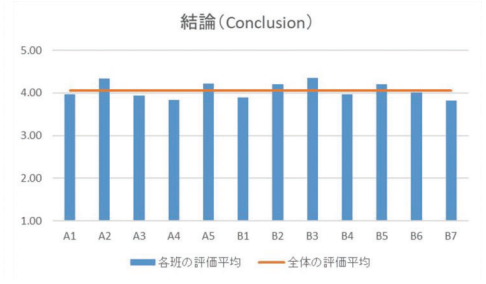
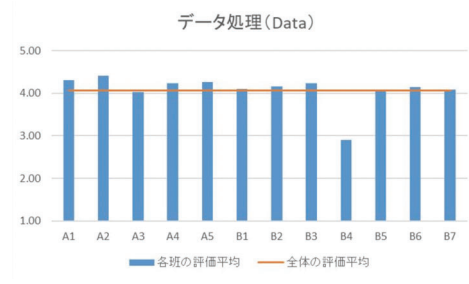
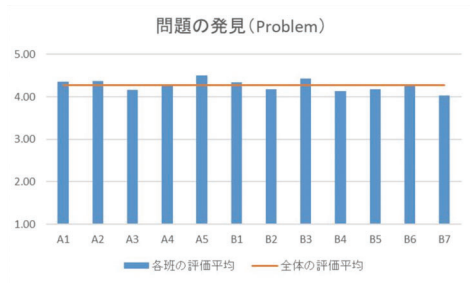
調査の計画 (Plan) : 幅広い地域課題解決の可能性を視野に入れた適切な仮説が設定され、要因の選定が適切であるか。

データ処理 (Data) : 課題の目的と解決方法に対して妥当なデータが選定されているか。データの前処理が適切に行われているか。

分析 (Analysis) : データは適切に可視化され特徴が抽出されているか。用いた分析手法は仮説を検証するうえで適切であり、分析結果は多角的な視点から検証されたものであるか。

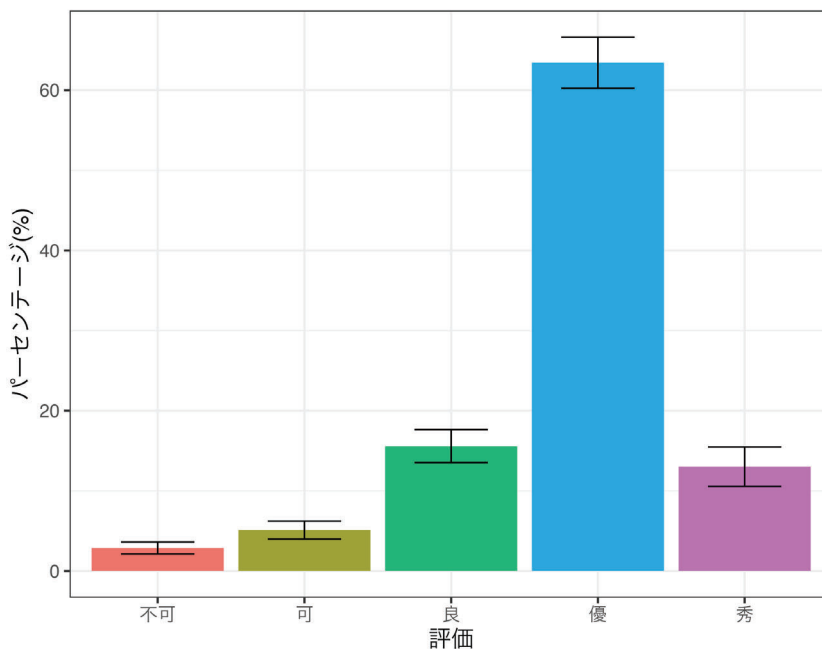
結論 (Conclusion) : 仮説を十分に検証することで、問題を深く掘り下げて探求し得られた知見を適切に生かしているか。

昨年度の最終プレゼン相互評価結果例



35

昨年度の成績分布



36

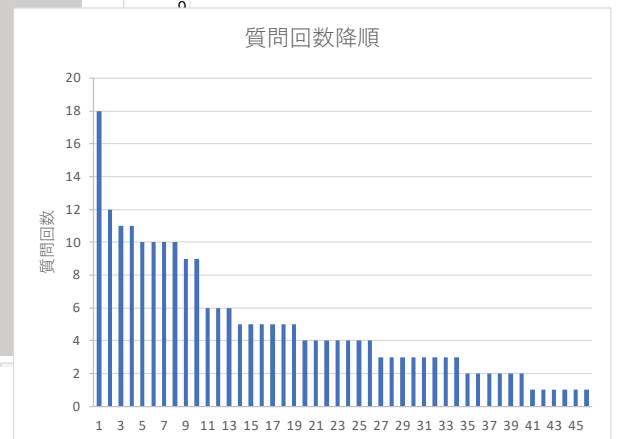
成績評価例

評定	出席数	欠席回数	その他の欠席	出席数得点	文献調査 課題提出	中間報告出席	期末報告出席回数	報告会				グループプレゼン
								優れた回答	優れた質問	積極的な質問	普段からグループを牽引している	
秀	15	0	0	60	5	5	10	5	3	3	5	4.8
優	15	0	0	60	5	5	10	0	0	2	0	4.8
秀	13	2	0	60	5	5	10	0	3	2	5	4.8
優	12	3	0	57	5	5	10	0	0	0	0	4.8
秀	15	0	0	60	5	5	10	0	3	3	5	4.8
良	11	3	1	57	5	5	5	0	0	0	0	4.8
優	14	0	1	60	5	5	10	0	0	0	0	7.0
秀	13	1	1	60	5	5	10	5	0	0	5	7.0
秀	14	0	1	60	0	5	10	0	3	3	5	7.0
秀	14	1	0	60	5	5	10	0	3	2	0	7.0
優	14	1	0	60	5	5	10	0	0	2	0	7.0
優	13	0	2	60	5	5	5	0	3	0	0	7.0
優	14	1	0	60	5	5	10	0	0	0	0	3.0
良	10	5	0	55	0	5	10	0	0	0	0	3.0
優	14	0	1	60	5	5	10	0	0	0	0	3.0
秀	13	1	1	60	5	5	10	0	3	1	5	3.0
優	13	2	0	60	5	5	10	0	0	0	0	3.0
優	14	1	0	60	5	5	10	0	0	0	5	3.0
優	15	0	0	60	5	5	10	0	3	1	0	3.9

37

Teamsを用いた質問例

タイムスタンプ+氏名	質問内容	質問班	氏名	質問回数
[01/26 10:43]	貯雪庫の建設には何かデメリットはありますか？	B6		1
[02/02 11:03]	青森県産のいいだしが出る食材は何かありますか？	B2		1
[01/26 11:15]	あんずやカシスは全国的には有名な物なんですか？	B4		2
[01/26 11:38]	子供の数が減っているのに保育所を作るような人はいるのか？	A1		2
[01/26 10:45]	弘前だと北海道より気温が高く雪の保管に冷房が必要になりませんか？	B6		9
[01/26 10:59]	資金調達の問題が出ていましたが資金を調達できるような解決案はありますか？	B1		0
[01/26 11:15]	あんずで染めた服は色が薄くあまりインパクトがないように思えたのですが見る人の目に留まると思えますか？	B4		
[01/26 11:25]	なぜ女子のBMIのみが影響を与えるのでしょうかもしくは男子のBMIが影響を与えないのはなぜでしょうか	A3		
[01/26 11:39]	ベビーシッターが子供に虐待をし問題になったことがあり中にはベビーシッターを頼むのにためらいがある人もいますかどう思いますか	A1		
[01/26 11:54]	宿泊施設を新設することで森林破壊や自然のバランスを崩すことにつながるのではないのでしょうか？	A5		
[02/02 11:01]	塩分の摂取量は全国で1位ということのはわかったのですが、糖分の摂取量は全国でどのくらいなのですか？	B2		
[02/02 11:18]	レンタカーの価格を行政が負担と書いていたのですが青森でそのようなことを行くとほかの県でも同じようなことを行わなければならないと思いますがそうすると行政が負担する金額が大きくなってしまわないのでしょうか	B3		
[02/02 11:38]	白神山地は人の影響をほとんど受けていない世界最大級の原生的なブナ天然林として世界遺産となっていますがアスレチックを建設することで人の影響を受けてしまい世界遺産のほうに影響は出ないのですか？	A2		



38

(8) TAの役割 (27頁)

- 学生の出席確認の補助
- 機材の準備
- グループワークのサポート
- データ分析のサポート (1名は「DS基礎」経験者)
- 相互評価の集計

※注意事項：TAの業務内容について

TAの業務内容は、授業時間内の教員のサポートおよび授業前後の準備と片付け、相互評価(最終評価)の集計です。基本的に、これ以外の業務をTAに行わせないでください。

39

4. 昨年度の最終プレゼン紹介

共に生きる青森 ～子育ての男女共同参画に向けて取り組むべきことは?～
白神山地地域をバズらせよう
新型コロナウイルス感染拡大が青森県労働市場に及ぼす影響
長寿県から学ぶ短命返上のための取り組み
白神山地魅力再発見 ～白神山地観光客数の減少を食い止めろ～
地方大学の現状と課題
身近なところから短命県返上 ～食事面から考える～
青森県の観光を交通の観点から活性化させるには
商品開発
青森県のような視点から考える健康へのアプローチ
青森の積雪利用
生活習慣と健康

40

その他

- データサイエンス基礎のテキスト
- 標準スライドの変更点
 - 次回予告を追加
 - DS基礎テキストと関連する回はテキストのページ数を追加
 - 第4回の補足資料を追加（標準化と回帰分析）
- データ分析の補講（中間発表の前と後）
 - データ分析に不安がある学生を対象にセミナーを開催（2回）
 - 具体的な日時は決まり次第連絡します



41

第1回に向けて（教員向け）

- TAと事前打ち合わせをしてください
- TAには共用PCをセットアップするよう指示しています
- 共用PCでマイクロソフトアカウントへサインインした場合は、返却前に必ずサインアウトしてください
- 標準スライドのダウンロード，修正，アップロードをお願いします
- 第1回目：アイスブレイク（ペーパータワーは紙のご提供にご協力ください）
- 第2回目：ブレインストーミング（PC必要ならご連絡を）
- 第3回目以降の重回帰分析（TA連絡用Teamsに動画をアップしています）

42

第1回に向けて（TA向け）

- 担当教員と事前打ち合わせをしてください
- 教員から指示があるまでは授業前に教養教育担当からPCを借りてセットアップしておいてください
- 共用PCでマイクロソフトアカウントへサインインした場合は、返却前に必ずサインアウトするように
- 第1回目のアイスブレイク
- 第3回目以降の重回帰分析の予習（連絡用Teamsに動画をアップします）

- 受講生へ声をかけてください

43

「地域学ゼミナール」
これからの授業内容（案）

データサイエンス教育の推進

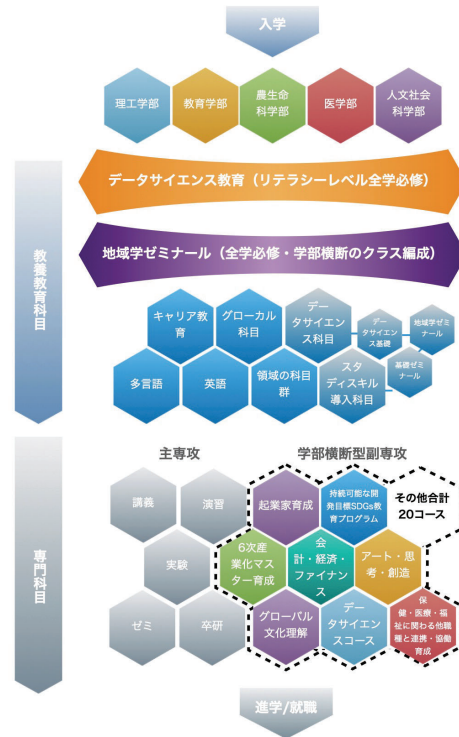
- リテラシーレベルプログラムを全学部必修で実施
- 文理融合を目的とした科目である「地域学ゼミナール」をリテラシーレベルプログラムの科目として設定し、データサイエンスを用いた課題解決型学習を実施
- リテラシーレベルプログラムで学んだ内容をベースに応用基礎プログラムを設定

文理融合教育（教養教育）の推進

- スタディスキル導入科目「地域学ゼミナール」（全学部必修）において、学部横断のクラス編成による課題解決型学習の実施

学部横断型副専攻プログラムの設置

- これまで以上に教養教育と専門教育との結びつきを強め、学部間の垣根をできるだけ低くし、学生の多様な学びを推進
- OSTEAM教育の実践のひとつとして位置づけ



生成AIを援用したブレインストーミング

授業時間配分案

- 準備 (5分)
- 解説：ブレインストーミングの意義と方法 (5分)
- 演習: ブレインストーミングの練習 (10分)
- 解説：Chat GPTの活用と留意点について (10分)
- 演習：Chat GPTを活用した課題解決の実際と考察 (40分)
- 発表：ブレインストーミングの結果とChatGPTとの差異についての考察 (10分)
- 振り返り・片付け (5分)

ブレインストーミングの練習

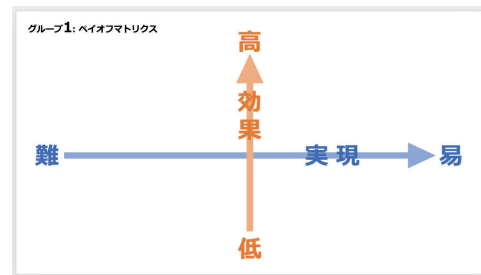
- テーマ: 「弘前大学を世界一有名な大学にするには？」

PC上でブレインストーミングを行いますので、共有スライドを開いてください。共有ですが、2人で一台など物理的に画面を共有すると、より対話が生まれます。グループごとに工夫してください。



オンラインでの作業方法

- Teams上で「02. ブレスト掲示板.pptx」を開き、グループごとにスライドの上で同時編集を行う



ブレインストーミング用スライド
(ペイオフマトリクスとKJ法による操作も兼ねる)

活動の流れ

- 1. ファシリテーターと記録係を決める
 - (ただし役割分担に囚われずに、発言を促したり、記入したりして構わない)
- 2. テーマについて、自由に発言する（ブレインストーミングの手法に沿って、自由に意見をとにかく出し合う）
- 3. 記録係は、発言を記録していく、直接付箋に書いても良いし、他の媒体にメモしておいて、後から記入しても良い。
- 4. ある程度、出て来たところで、ペイオフマトリクスの軸に従って付箋の位置を調整する。
- 5. 関係のあるものを囲んだり、線でつなげるなどして構造化を図る。

II. 演習②

Chat GPTを用いることで議論を広げたり考えを深めたりする

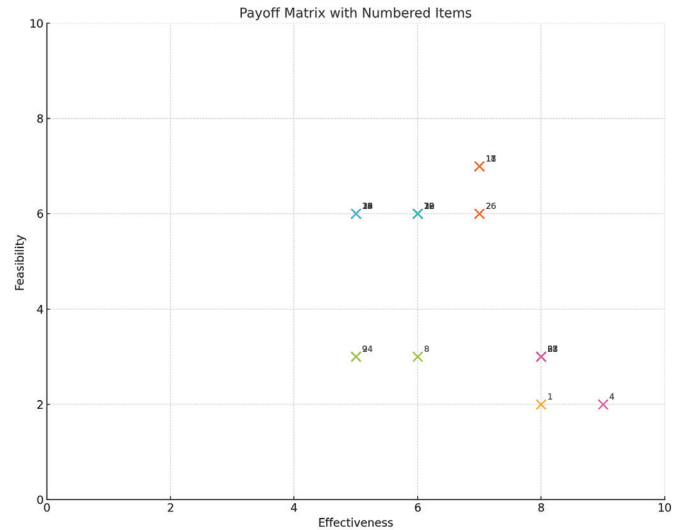
目的: Chat GPTの適切かつ効果的な活用法を身に付けるとともに、その問題点(人間の思考との違い)について比較検討することで把握する。

活動の大まかな流れ

1. 生成AI(ChatGPT)からの意見を聞く
(グループで同時に見れるように工夫してください)
2. 自分たちの意見と比較する(Chat GPTの意見を色の異なる付箋に記入するなど)
3. 生成AIと人間の意見の違いの考察(討論し、その考察をシートにまとめる)
4. 生成AIとの「対話」(意見の違いがなぜ出たのか、さらにChatGPTに質問する)
5. 考察の結果をまとめる(結果と考察したことをシートにまとめる)

番号	カテゴリー	項目	効果	実現性
1	研究	特定分野での世界トップレベルの研究拠点の確立	8	2
2	研究	国際共同研究プロジェクトの推進	7	6
3	研究	学術誌への積極的な論文発表	5	6
4	研究	ノーベル賞を目指した研究活動の推進	9	2
5	研究	国際的に著名な研究者の招聘と育成	8	3
6	研究	先端技術の研究開発と実用化	8	3
7	研究	地域の特徴を活かした研究テーマの強化	6	6
8	研究	学術賞や国際特許の取得を目指す活動	6	3
9	研究	大学内の研究設備の最先端化	5	3
10	研究	研究成果の産業界への技術移転	6	6
11	教育	グローバル教育プログラムの充実	7	7
12	教育	ダブルディグリーやトリプルディグリープログラムの導入	6	6
13	教育	オンライン教育の国際展開	6	6
14	教育	英語による授業の拡充	5	6
15	教育	国際学生交流プログラムの提供	5	6
16	教育	リーダーシップ育成プログラムの開発	5	6
17	教育	高い就職率を目指したキャリア支援の強化	7	7
18	教育	イノベーション教育の推進	7	7
19	教育	少人数制教育と個別指導の強化	6	6
20	教育	異文化理解とグローバルマインドセットの育成	6	6
21	国際交流	世界的な大学との連携強化	8	3
22	国際交流	国際学術シンポジウムや会議の主催	6	6
23	国際交流	海外留学プログラムの拡充	5	6
24	国際交流	海外の優秀な教員や研究者の招聘	5	3
25	国際交流	国際学生交流プログラムの充実	5	6
26	国際交流	国際的な産業界とのパートナーシップ	7	6
27	国際交流	国際大学ランキングでの評価向上	8	3
28	国際交流	海外キャンパスの設置	8	3
29	国際交流	国際奨学金プログラムの提供	5	6
30	国際交流	グローバルな卒業生ネットワークの構築	6	6

Chat GPT 4oの回答



データ分析内容の改善

重回帰分析

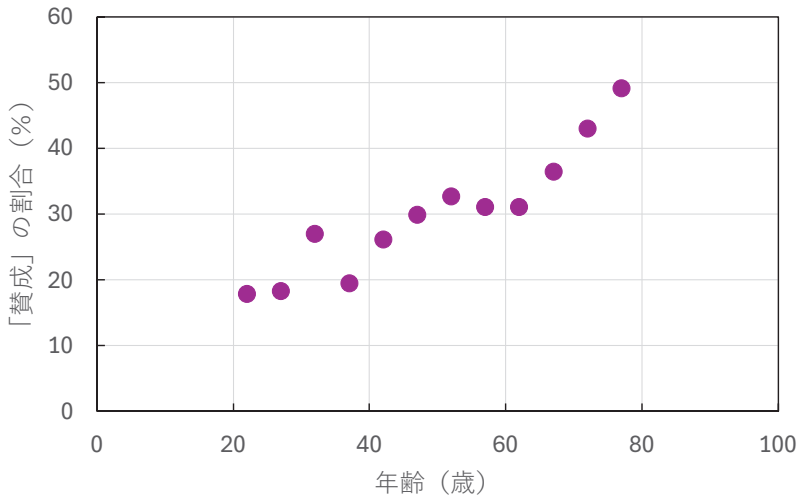


単回帰分析

回帰分析は手段であって目的ではない
せめて散布図 + 相関については理解させたい

1. 散布図を作成する

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」
という考え方に対する意識

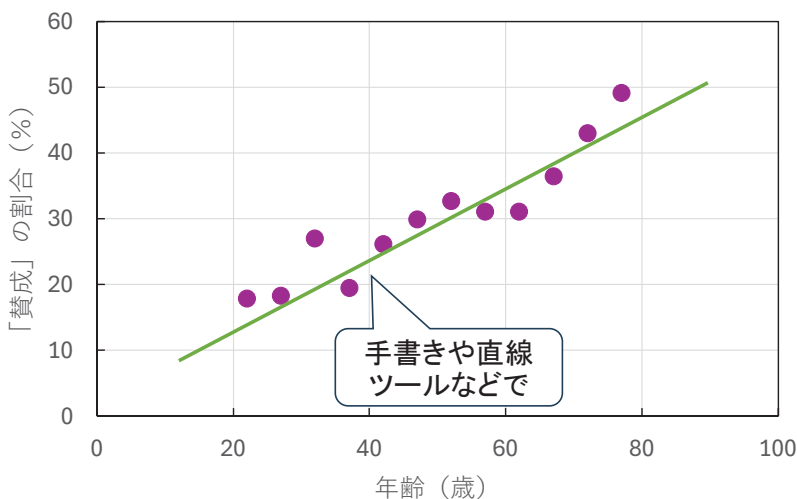


目的変数(y)を縦軸に
説明変数(x)を横軸に
単位も必ず示す

※この例では、内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査（令和4年11月調査）」の集計表10（問4）「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する意識の調査結果を使用

2. 散布図を観察する

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」
という考え方に対する意識



相関があるかないか？

相関があるようなら正の相関か負の相関か？

ラフに直線を引いてみて、
およその傾きを求める

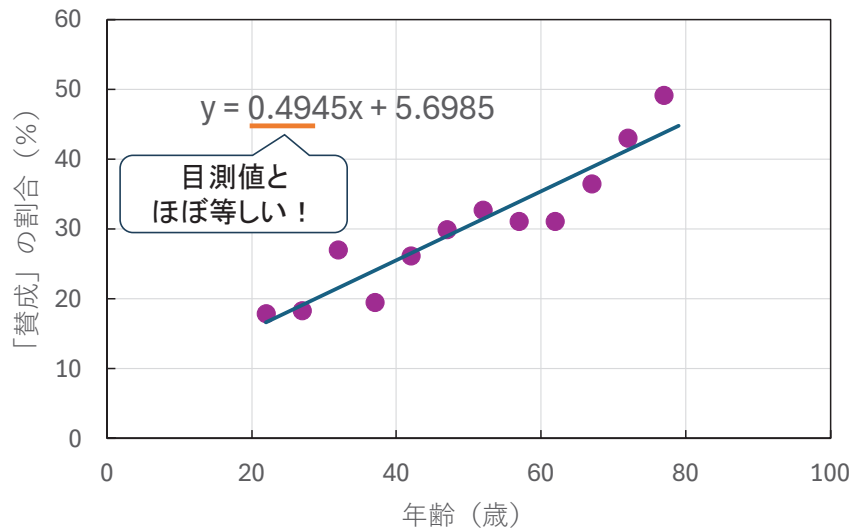
この例では、xが20歳から80歳になるときに、yが20%から50%くらいに増加している

$$\frac{50 - 20 \text{ (\%)}}{80 - 20 \text{ (歳)}}$$

$$= 0.5 \text{ ポイント/歳}$$

3. 「線形近似」で確認する

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」
という考え方に対する意識



エクセルで

グラフ要素を追加 > 近似曲線 > 近似曲線オプション

✓線形近似

✓グラフに数式を表示

年齢が1歳増えると、「賛成」の意識が0.5 pt増える、という結果が得られた

同じyに対して、xを色々変化させて調べてみよう

例) 性別、地域、経済状況など

その他の改善 (すべき) 点

- 担当教員へのアンケート
 - TAの事前・事後教育の強化 (FDの充実, 謝金の支払い)
 - TAと教員のアイスブレイクの場の設定
 - 文献調査 (見つけ方ではなく, 読み方) の教え方
 - 複数教員が担当することの利点
 - 標準スライドでの「予習内容・課題」の改善
 - PPDACサイクルの複数回転
- など

まとめ

- 学部横断型クラス編成 | 学生・TA・教員
- 地域課題PBL | PPDAC, データサイエンス
- グループワーク | ファシリテーション, クラウド編集, 生成AIの援用
- 発表会・成績評価 | クラウド・アンケート活用, 相互評価
- フィードバック | アンケート, FD (事前・事後)



ご清聴ありがとうございました

講師への追加質問とその回答

【質問1】

BYOD でパワーポイントの同時編集という話がありましたが、本学では100名程度の受講生でも教室から Wi-Fi で接続させると作業できない学生が出る場合があります。貴学ではネットワーク環境に伴う制約はないのでしょうか。あるいはどのようにクリアされているのでしょうか。

【回答1】

本学でも、BYOD 初年度は、学内 Wi-Fi へ接続できないという問題が発生しましたが、現在は解消しましたが、以下の3点が大きな改善点であったと伺っています：

- ① Wi-Fi アクセスポイントの追加
- ② アクセスポイント利用履歴の保存時間を120分から30分へ短縮
- ③ 教養教育棟に隣接する部局の利用可能数を支障の無い範囲で減少し、代わりに教養教育棟での使用可能者数を増加

【質問2】

講義中にネットワーク接続を前提とした Teams での同時編集等とありましたが、多くの学生が同時接続することでネットワーク接続が不安定になることはないのでしょうか？

概算で何人以上が同時接続することになる状況か、参考までにご教示いただけましたら幸いです。

(参考) 富山大学では教養科目で学生が多く集まる時間帯は無線 LAN への接続が不安定になる状況にあり、ネットワーク設備強化も難しいことから、学生個人所有端末でネットワーク接続を前提とした講義が組み難い状況にあります。令和8年度から始まる全学必修の導入学修では、複数クラスが同一コマに約900人受講するので、講義外にネットワーク接続してもらう内容に調整中です。

【回答2】

質問1への回答もご参照いただければ幸いです。最大接続可能端末数に関する正確な数字は把握できておりませんが、概算といたしまして、「地域学ゼミナール」(火曜と木曜に分けて開講)では教養教育棟で650名程度の学生が全員ノート PC に加えてスマホも持っているとし、さらに教員や事務職員等の分も含めると、1500台程度ではないかと推算いたします。

【質問3】

①80-90名の教室で、13グループ程度、3名の教員配置とのことですが、グループ学習という性質の授業では教員当たりの担当学生数がかなり多いように思います。この教員数は妥当とお考えでしょうか？あるいは、少ない教員でうまくグループ学習を回していく上で工夫されている点などがあればご教示いただきたく思います。

②成績評価はグループごとでしょうか、個人評価でしょうか？グループごとに発表を行う場合、個人ごとに評価を行うことが難しく感じるがありますが、何か工夫されておられますでしょうか？

③グループワーク、とくにグループディスカッションが非常に苦手な学生がたまに見受けられます（全く議論に参加できない、グループ討議になると萎縮してしまう、発達障害などでそもそもグループワークが苦手などの理由）。そのような学生に対して何か特別な配慮や対応についての対応方法の検討（マニュアル化など）はなされておられますでしょうか？

【回答3】

①お察しのとおり、3名の教員では持て余してしまう回はあります。一方で、「主体性」に重きを置いた成績評価や、グループワークの活性化を図るためのファシリテーションをきちんとしようとする、教員1名では大変かと思えます。また、異なる学部の教員複数が1つのクラスを担当することで得られる副作用といたしまして、普段は接する機会が少ない教員同士のコミュニケーションが深まり、長期的に考えた場合の「教養教育の質向上」へと寄与することや、出張等による休講を避けられることが挙げられます。担当教員数の確保が困難である場合は、TAの事前教育を充実させ、より積極的に授業運営に加担してもらうことが有効ではないかと考えます。

②グループ評価と個人評価の両方を行なっています。中間発表および期末発表は、グループごとの発表ではありますが、質疑応答における優れた回答と質問に対しては、個人点を付与する等の工夫をしているクラスがございます（全てのクラスではありません）。質問をする際には、Teamsのチャット機能を利用することで、誰がどのような質問をしたかということ、後からでも振り返って確認することが可能です。

③ご指摘のような特性を持った学生に対する「地域学ゼミナール」に特化したマニュアルは、現時点では作成しておりません。私が地ゼミの運営に関わるようになってからは、1名の学生（厳密には保護者様）から、「長期入院の必要があり登校できないが、何とか地ゼミを受講できないか」との問い合わせを受けたことがありました。そこで、当該クラスの担当教員へTeamsのチャネル会議を利用して、当該学生のオンラインでのグループディスカッション参加への協力を依頼し、教員からの同意は得られていました。しかし、結果的には保護者の方から受講の取り下げがありましたので、実施には至りませんでした。

ただし今後、「グループワークが苦手」等の理由による特別な配慮を必要とする学生が増加することは、大いに考えられます。特に本学「地域学ゼミ」のような必修科目は、卒業とも関わりますので、「レポートによる免除」や「他の教養教育科目との読み替え」などの対応が必要であろうと考えます。この点については、弘前大学「学生特別支援室」および「就学支援室」と連絡を取り合い、早急に対応を検討する予定です。

【質問4】

（質問）グループディスカッションのマネージメントについて

「ディスカッションの質の管理についての質問です。

学生たちのディスカッションやディスカッションレポートを見てみると、なんでもいいから盛り上がり

そんなネタを見つけて、それで時間やレポートの語数を稼いだりする様子が散見されます（テレビ業界用語でいう「撮れ高」のようなものが目的のディスカッション）。既知の関心や知識の枠をでない範囲で、楽に盛り上がりとしあうグループがどうしてもできてしまうのです。

そもそも良質のディスカッションをするためには、議論すべきネタとそうでないネタの判断、粗判断に必要な事前知識、有意義な議論になるための補足調査なども必要と思います。そのためには教員や TA がよほど上手に話題提供をしたり、議論状況を察知したりする必要があるように思います。

ご発表では、こうした点について、組織的に対応されているような印象を受けました。

そこで2点質問です。

(1) どのようにグループディスカッションに「介入」しているのでしょうか？

①事前の学生へのオリエンテーションで気をつけていること、②ディスカッション中に指示していること、③介入方法（グループから何らかのサインを得て介入、定期的にディスカッションを止め状況チェック、見回って適宜介入、など）

(2) ディスカッションをどう評価しているのでしょうか？

※学生たちが評価方法を知っていることが、ディスカッションの方向付けにもなると思います。

ディスカッション状況の情報化の手段について教えてください（学生相互の相互評価、教員の間接評価や最終評価、最終レポート）」

【回答4】

(1) ファシリテーションが重要であることは教員および TA 向けの FD でお伝えしておりますが、それ以外に組織的に対応していることは、これと行ってごさいません。基本的には、各クラスの担当教員へお任せしています。私がこれまで担当したクラスを観察してわかったことは、学部横断型のクラス編成自体が、非常に教育効果が高いということです。例えば、医学部、教育学部、理工学部学生から構成されるグループでは、医学部生はリーダーシップを、教育学部生はプレゼン資料作成におけるセンスの高さを、理工学部生はデータ分析における正確さをそれぞれ発揮します。このような役割分担が自然と作られることで、多くの学生が各々の役割分担を理解し、責任を持つようになってきているように思います。

また、地域学ゼミナールでは、学生に「主体的・能動的な学修態度を修得すること」を目標のひとつに定めています。そして、「主体的・能動的」になってもらうためには、私たち教員や TA が、まずはそのような姿勢を示すことが大切であることを、FD 等で再認識してもらうようお願いをしています。

(2) グループワークの統括やデータ分析を主としてリードしている学生を見極めることは可能ですが、それ以上のディスカッション評価はできていないのが現状です。中間あるいは期末プレゼンの際には、プレゼン資料の各ページに「発表者」に加えて「作成者」も示すことを指示しているクラスもございます。「作成者」は、どのディスカッション内容を誰がリードしたのかを示す指標になると考えます。

【質問5】

(質問) WiFi 環境とアプリについて

「3点質問です。

(1) グループディスカッションに TEAMS を使っているそうですが、授業内での一斉使用ということで

よろしいでしょうか？

(2) 一斉使用の場合、接続トラブルは回避できているのでしょうか？(ひとクラスあたりの学生数は？)

(3) TEAMS を選ばれている理由は何でしょうか？(他の教育アプリよりも簡便だからでしょうか？スキルとしての有用性が高いからでしょうか？)」

【回答5】

(1) 一斉使用しています。

(2) 現在では回避できております。質問1および2への回答もご参照いただけますと幸いです。

(3) 教育的理由は特にございません。新型コロナウイルス感染症によりオンライン授業が余儀なくされた際に、全学的に導入したアプリが Teams であり、それを今でも使い続けています。

【質問6】

<担当教員について>

- ・1クラス80名～90名とのことから、全学では17～8クラス、担当教員数は、1クラス3名で、51～54名ということでしょうか？
- ・2年間は同じ教員が担当されたのでしょうか？
今後も含めて、入れ替えがあるとすれば、どの程度の先生が替わる予定でしょうか？
- ・17～8クラスは、時間割上、同時限の開講でしょうか？

<実施環境について>

- ・アクティブラーニング形式の授業が含まれますが、教室は通常の講義室で足りているのでしょうか？
- ・学生は各自パソコンを持参するとのことですが、同時アクセスした場合の通信環境は大丈夫でしょうか？

<「基礎ゼミナール」について>

- ・学生数10名に対して教員1名といった説明があったようですが、同授業の担当教員数は何名でしょうか？
- ・学生のクラス分けはどのようにされているのでしょうか？

<教養教育全体について>

- ・卒業要件に必要な教養教育科目の単位数は、何単位でしょうか？
- ・学部によって異なっているのでしょうか？
- ・グローバル科目一覧には、数多くの科目名が並んでいます
例えば「地域の社会・文化」には、サブ科目に、-北日本の民俗芸能・祭り-、-地域ボランティア入門1-、-写真で見る青森の近代-、-地方創生入門2-、-青森の手工芸基礎-がありますが、これらは扱いとしては「地域の社会・文化」の1科目という理解で良いのでしょうか？
・-北日本の民俗芸能・祭り-を履修した学生は、-地域ボランティア入門1-を履修できない、という理解で良いのでしょうか？

【回答6】

<担当教員について>

- ・全学で18クラスになります。火曜9クラス、木曜9クラスです。
- ・教員は $18 \times 3 = 54$ 名体制です。
- ・2/3程度が2年間担当、残りの1/3程度は毎年交代しています（学科の方針によります）。

<実施環境について>

- ・教室は、コロナ期の「2講義室体制」のときも含めて、教養教育棟（本学では「総合教育棟」と呼んでいます。専門教育でも使用される講義棟です）の講義室のみで足りています。
- ・通信環境につきましては、質問1および2への回答をご参照いただけますと幸いです。

<「基礎ゼミナール」について>

- ・基本的には10名～20名に対して教員1名なのですが、医学部医学科はお一人の先生が全員（110名程度）を担当されています。担当教員数は90名程度です。
- ・学生のクラス分けは各学科にお任せしています。授業内容につきましては、事前にFDを開催し、手引きとともに15回分の授業モデルをお示しはしていますが、mustでの依頼はしておりません。

<教養教育全体について>

- ・卒業要件に必要な教養教育科目の単位数は、全学部共通で、34単位です。ただし、第5期に向けて見直し中です。
- ・各科目群の卒業所要単位数につきましては、学部・学科によって若干異なります。詳細は、下記URL記載の表をご参照いただけますと幸いです。

<https://www.hirosaki->

[ac.jp/reiki/act/actdata/110001146/current/FormEtc/13000440501000000048.pdf](https://www.hirosaki.ac.jp/reiki/act/actdata/110001146/current/FormEtc/13000440501000000048.pdf)

- ・「適宜修得単位」というバッファを設けておりますので、必要単位数を超過した履修も可能となっております。

【質問7】

「地域学ゼミ」での成績評価について、「学生に求められるパフォーマンスは、最低限、問題解決学習に主体的・能動的に取り組むこと」という点、「十分出席をし、グループワークに全面的に参画している学生には優を与える」という点、理解いたしました。また、それにより、成績評価での数値化がしやすく、教員側も比較的評価しやすくなると思われました。その上で、ご質問させていただきます。

- ・この成績評価のやり方に（つまり、良い問題設定や解決策の提案等の内容についてあまり評価されないことについて）、学生から不満の声が上がったりということはありませんでしょうか。
- ・（ご講演スライドp.37）成績評価例の中にある「文献調査課題提出」は、提出したか否かのみで評価される、つまり調査結果の内容については評価されないという理解で間違いないでしょうか。そうであれば、課題作成について、学生が手を抜いたり、適当に作成したりといったことにはなりませんでしょうか。或いは、その後の活動で、きちんと課題をおこなっていないと、それが後々響くという仕組み等を作られているのでしょうか。
- ・（ご講演スライドp.37）成績評価例の中にある「報告会：普段からグループを牽引している」という評

価は、誰がどのようにチェックされているのでしょうか（或いはスライド p. 33 にある自己評価でしょうか）。この点、誰がどのように評価するかで、結果にばらつき（或いは不公平感）が出てしまうのではないかなと感じ質問させていただきました。

【回答7】

- ・本学においても「成績評価に関する異議申し立て」制度を導入しておりますが、地域学ゼミナールに関しては、私が把握している限りでは、受講生からの異議申し立てはございません。
- ・文献調査に関して、評価については提出したか否かのみで判断しておりますが、宿題として調べてきた文献について、次の週に各班において各自グループ（6人）内で発表し合い、お互いの意見を聞いた上で、テーマを2～3個に絞ることを課しています。きちんと調べてきていない学生は、この発表の場においてグループメンバーからの信頼を失うこととなりますので、それなりの Driving force となっていることを期待しています。
- ・普段からグループを牽引しているかどうかを判断するのは、教員です。1クラスには12～13グループありますので、1教員あたり4グループ程度を重点的に見てもらっています。毎週、進捗状況の確認等を含め、4グループの学生たちと話をしていると、どの学生がリーダー的存在であるかや、どの学生がデータ分析を主として担当しているか、といったことを判断することは難しくありません。なお、学生には、名札を毎回つけてもらっています。

【質問8】

教員とTAについても、文理融合でチームを組まれているということ、1つの授業の中で専門分野を越えて、様々な角度から、より包括的な理解が深まるのではないかと感じました。教員とTAについて、ご質問させていただきます。

- ・（ご講演スライド p. 23）担当教員の配置で「取りまとめ教員を決めておくことを推奨する」とありますが、この取りまとめ教員の役割はどういったものを想定されているのでしょうか。或いは、取りまとめ教員が行う作業等が予め設定されているのでしょうか。取りまとめ教員を決めることが授業を円滑に実施することにつながるのではないかと感じ、参考にさせていただきたいと思い、ご質問させていただきました。
- ・ご講演の中で、今後さらに授業を活性化するには、TAの役割が重要であるというお話がありましたが、その効果を最大限に引き出すために、どのような工夫や取り組みが必要だとお考えでしょうか。（スライドには、FDの充実、謝金の支払い等があがっていましたが）これまでのご経験から、今後のご計画やこれまでの成功例等についてお伺いできればと思い、ご質問させていただきました。

【回答8】

- ・運営サイドから具体的なお願いはしておりませんが、私が担当したクラスにおける取りまとめ教員の業務は以下のとおりです：
 - 成績評価 | 3教員の評価の取りまとめ、教員間で大きなばらつきがないかどうかの確認、成績登録システムへの入力

- 全15回の役割分担（スライドを代表して説明する主担当）を決定するプロセスの進行役
- 中間発表や最終プレゼンにおけるTAへの業務内容の指示
- 最終プレゼン「相互評価」の集計をTAに依頼する際に発生する謝金関連手続きの、事務とTAとの窓口的存在

・TAに関しまして、これまでの成功例として、授業開始以前から交流を開始しコミュニケーションを深めておくことが重要であることを、担当教員からお伺いしたことがあります。それを踏まえて、今年度のFDでは、午前はTAのみ、午後は教員+TA向けに開催し、FD終了後に教員とTAが交流できる場を、用意することにいたしました。

また、地ゼミに限らないより長期的な取り組みとして、現在弘前大学では、全学共通の「TAマニュアル」を作成しているところです。ここでは、まずはTAの業務内容について整理しますが、将来的には学部学生でも担当できるSA、および博士後期過程学生が担当するTFについても、業務内容を整理し、○×表形式で明記する方針で進めております。そのような表において、例えば「機器の準備」はSAでも○とし、ファシリテーションは「SAは×・TAは○」のように示すことで、TAに求められている能力をより正確に示すことができるとともに、TAにはより自覚を持って授業に臨んでもらえることを期待しています。

以上

令和6年度第1回教養教育院FD
「新教養教育先行大学(弘前大学)に学ぶ教養改革 教養教育院FD2024 vol.1」参加状況

【当日参加者内訳】

教員	
役員	2
教養教育学系	19
理学系	1
都市デザイン学系	1
教育研究推進系	2
小計	25

職員	0
----	---

非常勤講師	0
-------	---

合計	25
----	----

【オンデマンド参加者内訳】

教員	
理学系	1
医学系	1
薬学・和漢系	1
小計	3

職員	0
----	---

非常勤講師	0
-------	---

合計	3
----	---

総計	28
----	----

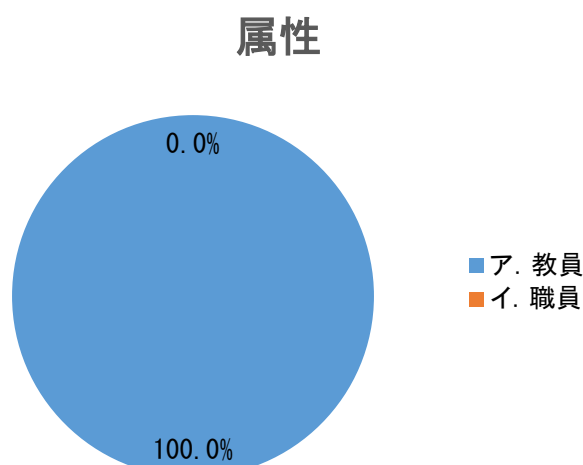
令和6年度第1回教養教育院FD参加者アンケート集計結果

FD参加者数：27名

(内訳：教員27名)

アンケート回答者数：22

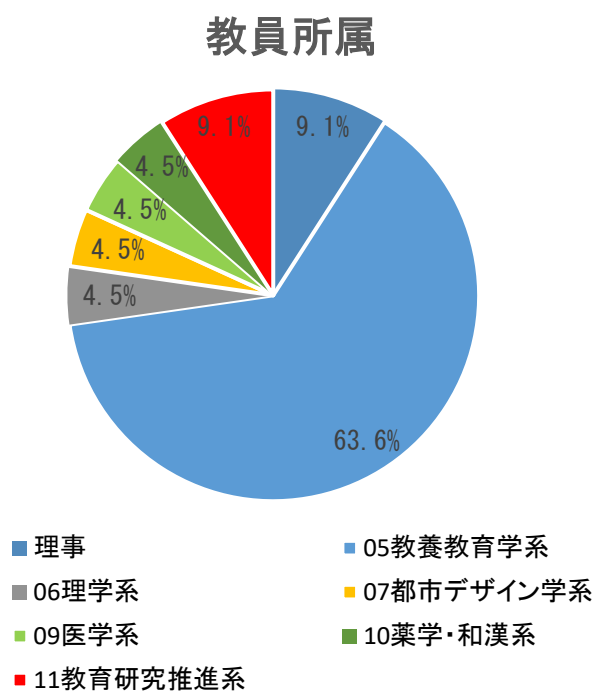
1. 属性を選んでください



属性

ア. 教員	21
イ. 職員	0
計	22

2. 所属を選んでください (教員のみ)

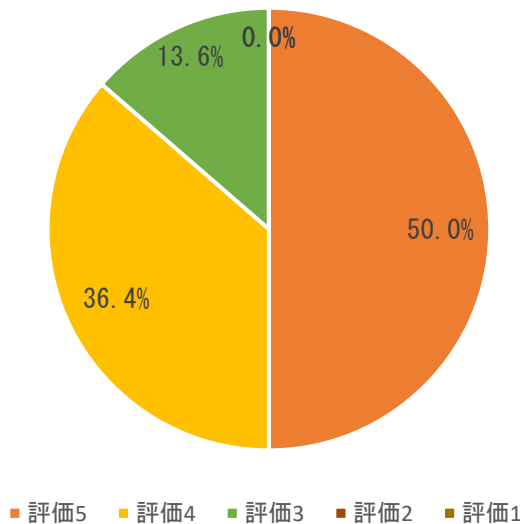


教員所属

理事	2
05 教養教育学系	14
06 理学系	1
07 都市デザイン学系	1
09 医学系	1
10 薬学・和漢系	1
11 教育研究推進系	2
計	22

3. 今回の教養教育院FDに参加しての評価を5段階評価で入力ください。

今回のFDに参加しての評価



今回のFDに参加しての評価

評価5	11
評価4	8
評価3	3
評価2	0
評価1	0
計	22

4. 今回の教養教育院FDについての感想やご意見があれば、ご記入ください。

- ・時間が短かったのが残念。
- ・さらに深く知りたい項目がたくさんあり、時間的に消化不足に感じました。質疑応答の時間はもっとたくさんあった方が良かったと思います。
- ・とても参考になりました。
- ・教養教育に大学院TA参加は、良いアイデアと思います。
- ・弘前大学の取り組みのご状況がよく分かり、また質疑応答を通じて、資料だけでは得られない貴重な情報を伺うことができ、大変勉強になりました。事前にPPTの資料もいただけたのも、とても良かったです。
- ・手引きや標準パワポを準備して全学的に教員の協力体制を構築しているところは素晴らしいと思った。一方、そのために授業内容がワンパターン化、形骸化してしまい、履修生の地域志向性がさほど高まらなくなる可能性もあるのではないかと考えた。
- ・導入系科目の内容と実施体制とについて、具体的な話が伺えて大変参考になりました。
- ・弘前大学の先生方のご苦労がよくわかりました。
- ・発表自体は、35分間ほどで、短かった。資料も50数ページで少なかった。発表は、分かりやすかったが新味に欠けているように感じた。発表に対するコメントは、ポイントを押さえておらず、よくなかった。発表自体以外に、時間をかけているように思った。
- ・実際の地域ゼミナールの内容について、発表されたスライド、等を見たかった。具体的な運営方法等が知りたかった。

- ・FDの進め方、chatGPTの使い方の提示について、勉強になりました。
- ・他の教育機関における具体的な取り組みを知れて、非常に有用であった。アクティブラーニングなど実施すべきもの・目標は共通であっても、具体的な授業・取り組み内容など教育機関に裁量がある部分に関しては特色が現れており、興味深いと感じた。

5. 今後、教養教育院FDで取り上げて欲しいとお考えのテーマがあれば、ご記入ください。

- ・グループディスカッションの進め方、評価の仕方などについては、いつも非常に苦労しておりますので、ノウハウに踏み込んださらに具体的な内容をFDをがあればと思いました。
- ・教養教育と専門教育の連携
- ・「教養教育の授業の中での教育系アプリの使用例や利点」「(専門的な観点から)アクティブラーニングの際の学生に対する評価方法とその具体例」等が、知りたいなと思います。
- ・アントレプレナーシップ教育
- ・導入ゼミと情報処理科目の線引きなど。
- ・どの分野にも共通する内容として、学生が現在、将来に向けて自身の健康について振り返ることに関するテーマがあれば良いと思いました。

第2回

「新教養教育先行大学(宇都宮大学)に学ぶ教養改革
教養教育院 F D 2024 vol. 2」

『宇都宮大学の教養科目構成とルーブリックについて』

(令和6年9月25日開催)

令和6年度第2回教養教育院FD 実施計画

テーマ「新教養教育先行大学(宇都宮大学)に学ぶ教養改革 教養教育院FD2024 vol.2」

1. 開催趣旨

温暖化に代表される地球環境の劇的変化、コロナ禍、デジタル技術の急速な進展など世界中で様々なレベルでの人類を取り巻く環境は急激に変化しています。このような時代の変動を見据えて、これらに対応しうる人材を育成するため大学教育は大きく変わりつつあります。

全国の大学を見渡すと、新しい時代に対応した教養教育改革を進め、魅力的な教養教育を実施している先例が見受けられます。本学では、二年後の令和8年度を教養改革の転換点と位置づけて大きな改革の準備を進めており、このような先行例を学ぶことで、私たちの改革をさらに実りあるものへ進めることが可能になると思われま

す。今回のFDは、先行事例として宇都宮大学の教養科目構成とルーブリックについてお話いただき、本学の教養教育改革に資する教訓を得ることを目的として実施します。

2. 開催日時

令和6年9月25日(水) 13:30~14:30

3. 開催会場

五福キャンパス共通教育棟D棟1階 D11教室

4. 対象

本学教職員、非常勤講師

5. 次第

(1) 開会挨拶・趣旨説明

片桐 達雄(教養教育院 教育改善推進委員長)

(2) 「宇都宮大学の教養科目構成とルーブリックについて」

講師：石井 ^{いしい} ^{かずや} 和也 氏

(宇都宮大学 大学教育推進機構 基盤教育センター副センター長)

(3) 質疑応答

(4) 閉会挨拶

武山 良三(教養教育院長)

富山大学
令和6年度第2回教養教育院FD
令和6年9月25日(水)13:30-14:30

宇都宮大学の教養科目構成と ルーブリックについて

宇都宮大学 大学教育推進機構
基盤教育センター副センター長
ラーニングサポートオフィス長
教学マネジメント企画室副室長

石井 和也 ishii@a.utsunomiya-u.ac.jp

宇都宮大学の紹介

学士課程学生数(2024年度)

データサイエンス経営学部	59名
地域デザイン科学部	616名
国際学部	465名
共同教育学部	717名
工学部	1,429名
農学部	875名
合計	4,161名

※大学院生は1,004名

地域で学ぶ、地域 と学ぶ

Handson Experiences

共同教育学部

教職の志願する学生に課される、教職に関心のある学生には不応を感ずる人も多くありません。共同教育学部では、実際に入る前に各学院院で活動する機会が設けられています。小・中学校のニーズに応じて教職センターが窓口となり、希望する学生は必ずしも学生支援のスタッフ、教員と2年次に授業の一環として小・中学校で活動する教育ボランティア入門です。小・中学校の先生のサポートをしながら、授業中や休み時間、放課後に児童生徒の学習や活動の支援を行うことで現場での対応力を磨いていきます。このような活動を通して地域に還元しながら、自らの学びを進めています。

工学部

地域の企業や自治体と連携したプロジェクトへの参画
機械システム工学コースの基礎研究では、観光や物流、新たな交通手段として、バーチャルモビリティロボットの開発を行っています。研究のプロジェクトの一つであった地域企業共同で開発した遊歩機、遊歩機、歩行者に代わる関係者の学生が主体的に取り組み、試作機で試行しているものの、自身の知識の応用の機会と連携して、「モノ」を社会に送り出すというプロセスを体験し、成長を遂げました。
工学部では、地域の企業や自治体と連携したプロジェクトがいくつも進んでいます。企業や自治体とともに、社会の課題解決や発展に寄与することはあるのです。この例のように、プロジェクトに学生を積極的に参画させることにより、開発と実践の両立を得た、即戦力として活躍できるエンジニアの育成に努めています。

農学部

小さな拠点「葉山キャンパス益子家」プロジェクト
農業経済学部の西田研究室の学生が中心となり、益子町の農村地域にある小さな宿舎を改修し、葉山キャンパスとして活用する取り組みをしています。学生や地域内外の方と交流するだけでなく、農業の視点で農村地域の課題解決を考え、実践しているプロジェクトの一つでもあります。学生たちが考えた益子家のコンセプトは、①特産物や葉山に実地できる場所、②やってみてほしい場所、③多様な働き場、④とまが自分自身に結びつけられる場所です。空き家改修の後、空き家の課題を再考し、ゆうだい 21の無農薬栽培、マルシェの開催などを行いながら、農村の活性化や課題の解決を進めています。

地域デザイン科学部

地域プロジェクト演習
地域デザイン科学部では、1年次から地域に出て学ぶ授業科目がそれぞれ用意されています。3年次では、コミュニティデザイン学科、建築都市デザイン学科、社会経済デザイン学科の3つの学が協働して、6人のグループとなり、各自が地域の課題に挑戦するもって得るフィールドワーク型の必修授業「地域プロジェクト演習」に取組んでいます。課題解決の授業は、教員の場で多く取り入れられていますが、宇都宮大学のこの取組みには、3つの大きな特徴があります。実際に地域の課題に直面し、徹底的に考える。各自治体職員や市民の方と一緒に課題の解決に向けて取り組むこと。同じ学科の仲間だけでなく、異なる専門性をもつ仲間と協力すること。このように、さまざまな立場からの視点を得、調査設計、課題発見、解決策立案と次第に形にしていける過程は、1つの学科だけでは得られない多くの学びが待っています。

国際学部

地域とともに持続可能な数民族・循環型社会を探究する「UUISプロジェクト」
国際・多文化共生などの多岐にわたる課題を、多岐にわたる分野に探究する方針として注目されているのが「ローカルSDG」地域課題解決型という考えです。本学は都市圏と農村部が混在する「ローカルSDG」の推進に好ましい環境的・社会的条件で、地域課題解決にも多くの経験によって行われていますが、資金の制約や情報的な不足の問題に悩んでいます。一方、SDGや地域の課題解決に向けて行動したいと考える中高生や学生も多くいます。このような背景からUUISプロジェクトでは、学生が地域NPOの農山漁業や小中学校生向けSTEM教育講座などに参加して多様な実践経験を身につけ、オンラインSDG上級会などを通して他校の学生と交流しながら国際的な協力を進めています。

データサイエンス経営学部

データサイエンス経営学部では、3年次後期に、学部で修得するデータサイエンスおよび経営学の知識を活用しながら、地域の企業や自治体とともに実際のデータを解析するPBL(Project Based Learning)形式の演習を行います。演習では、企業が実際に抱えている課題についてデータを基盤としてPBLを学ぶ機会が豊富にあり、社会課題の解決に貢献しています。「データサイエンス」および「経営学」の両方から学べる機会を創出し、分野の異なる複数の教員の指導を受けつつ、深掘り取り組み、学際型グループで互いの専門性を活かしながら取り組むことによって発展する学びも期待されています。

49

学修者本位の教育の実現に向けた提案（全学的取組）

CP, APの改訂とカリキュラム(基盤教育・専門教育)の整備

学修者本位の教育の実現に向けた提案(2)

学生が自身の多様な学びの成果を把握し、成長を実感できるようにするために、下記の取組を行う。

- 宇大スタンダードと全学DPの設定
- 各部局DPへの宇大スタンダードの明示とDP達成のための科目整備
- 学修成果可視化システムの修正

宇都宮大学の教育目標

- 基盤教育を出発点として、現代社会に必要な汎用的能力(宇大スタンダード)を育成します。
【修正前】現代社会に必要なリテラシー、幅広く深い教養と豊かな人間性、そして、知と行動力を統合した行動的知性を育成するための基盤教育を行います。
- 専門教育を通じて、実践的で専門的な知識と技能を涵養します。
【修正前】実践的で専門的な知識を修得するための専門教育を行います。
- それらのふたつを有機的に結びつけた4年一貫教育により、幅広い教養と行動的知性を備え、未来の社会を拓き支える人材を育成します。
【修正前】それらのふたつを有機的に結びつけた4年一貫教育により、“あらたな社会”を拓き支える人材を育成します。

A

宇大の教育目標1を具体化するために、すべての宇大生が卒業時に身につけるべき宇大スタンダード(汎用的能力)を整理し、全学DPを新設する。

宇大スタンダードを新設(4年間を通じ獲得)

宇都宮大学の学位授与の方針(全学DP)の新設

宇都宮大学は、教育目標に定める幅広い教養と行動的知性を備えた人材を育成するために、所定の期間在学して必要な単位を取得し、「宇大スタンダード」に定める汎用的能力と、所属学部において定める専門分野に関する知識・技能を獲得した者に学位を授与します。

B

宇大の教育目標1および2を達成するために、各部局DPの見直しと、基盤教育科目および専門教育科目の整備を行う。

※CP, APの見直しを含む。

各部局DPへの「宇大スタンダード」の明示

各部局のDPPに、「宇大スタンダード」を明示するとともに、既存のDPの項目を通直修正する(「宇大スタンダード」と重複する項目の削除等)。

DPを達成するためのCP改訂と専門教育科目の整備

全学/部局DPを達成するために、全部局でCPの見直しを行い、これと平行して専門教育科目の整備を行う。

全学DP(宇大STD)を達成するための基盤教育再編

高度教養科目の導入等、新カリキュラムを導入する。

基盤教育科目 全学DPの達成

宇大スタンダードの完成
基礎固め

専門教育科目 宇大スタンダードの完成

専門的知識・技能の獲得

DP, CPと整合の取れた新しいAPの制定

全部局でAPを見直し入学者選抜要項に順次公表する。

C

学生が成長実感をもつことが可能となる学修成果可視化システムを構築する。

学修成果可視化システムの修正の方針

宇大スタンダードの完成を促すための多面的評価と、成長実感を持つことが可能となる学修成果可視化システムを構築する。

すべての宇大生が卒業時に共通して身につけるべき能力を「宇大スタンダード」として新たに定める。それら能力の獲得状況を学生自身が把握できるようにするために、基盤から専門にかけて、特定の科目で重点的にルーブリック評価を実施する(教員による評価、自己評価、ピア評価)。その評価結果は、学生が成長実感を持ち、次の学びに意欲的に取り組むことが可能となるよう、レーダーチャートなどを用いて視覚的に表現する。

具体的には、4年間共通のルーブリックを用い(各基準の詳細説明は、授業科目ごとにアレンジ)、宇大スタンダードに関する能力を測定する。この結果を、専門的知識・技能に関するGPAとともに、1つのレーダーチャート上に表示する。なお、語学力は、外部試験の結果など、語学力を客観的に示す数値や資格を別に表示する。

デジタルを活用した大学・高専教育高度化プラン：令和3年度（2021年度）から

ブレンドッド・ラーニングの推進と多面的評価による自律的学修者の育成：LMSと連携したe-ポートフォリオの活用を通じて

教学マネジメントの核となるブレンドッド・ラーニングの推進

宇都宮大学DX推進計画の一環である本取組は、これまででない多様な教育・学修データをもたらす。これらを活用し、教育・学修成果を検証・可視化することで、全学的教学マネジメントを動かし、教育・学修の質向上をめざす。

学修者本位の教育の実現

ブレンドッド・ラーニングでの学びにおいて、自己評価力の向上や学修コミュニティの活用を可能とする。このことで、激しい変化に晒される社会において学修の自己管理と学びのバージョンアップができる自律的学修者を育成する。

01 教員による評価

自己評価
ピア評価

ルーブリックに示された明確な目標に沿って学修を進め、成果をe-ポートフォリオ上で自己評価によって可視化することで、学修の自己管理を可能とする。さらに、LMSとe-ポートフォリオの連携により学生同士のピア評価を実施し、オンライン上においても、学生同士の学び合いを深化させる。このことを通じて、自律的学修者を育成する。

02 学びのコミュニティ

個別最適な学修支援
デジタル学修コンテンツ

LMSとe-ポートフォリオを連携させることにより、オンライン上で学生や教員からなる学びのコミュニティを形成する。このコミュニティでは、個別最適化された学修支援を提供するとともに、e-ポートフォリオを通じて、正課内外における学修仲間を見出すことを可能とする。さらに、学修を深化させるために、いつでも学修状況に応じたデジタル学修コンテンツが利用できるデータベースを構築し、自律的学修者を育成する。

03 三層からなる教育成果と学修成果の可視化

機関・教育プログラムレベルでは、ブレンドッド・ラーニングの実施状況を調査し、可視化する。授業科目レベルでは、GPA、学生のパフォーマンス、LMS記載事項等を調査し、可視化する。学修者レベルでは、学修前・中・後の三時点における学修状況を調査し、可視化する。このことで、社会への説明責任も果たす。

基盤教育改革：平成26年度(2014年度)から取組開始

宇都宮大学の 基盤教育改革

宇大スタンダードの基礎固め
力の修得状況の可視化

宇都宮大学では、DPのもと、4年間の学士課程教育を通じて修得すべき汎用的能力「**宇大スタンダード**」を定めている。基盤教育では、**宇大スタンダードの基礎固め**を行うことで、**全学共通DPの達成に貢献する**。さらに、異なる専門分野の教員が連携して開講する科目において、**学修者の多様な力の修得状況を多面的に把握するために、ルーブリック評価を実施する**。このことで、**宇大スタンダードの修得状況を可視化**し、**学修者に対して次の学びにおける指針を与え**るとともに、**基盤教育で修得できる力について説明責任を果たす**。

全学共通のDP※

宇都宮大学は、教育目標に定める幅広い教養と行動的知性を備えた人材を育成するために、所定の期間に学修に必要な単位を取得し、「宇大スタンダード」に定める汎用的能力と、所属学部において定める専門分野に関する知識・技能を修得した者に学位を授与します。

※学部ごとに設定されたDPのうち、全学で共通した記述となっている箇所を「全学共通のDP」と呼んでいる。

宇大スタンダードの6つの力
「宇大スタンダード」は、宇大での4年間の学びを通じて修得すべき6つの汎用的能力を意味している。(右図参照)。これらの汎用的能力は、大学での学びに限らず、職業や社会生活の中でも活用されることが期待されている。



令和5年度からの新たな基盤教育

初期導入科目	新入生に向けて「大学での学び」とはどのようなものかを理解させる 全学共通で実施される内容と、学部学科ごとに実施される内容から構成される。(2単位、必修)。
リテラシー科目	あらゆる社会で活躍するための知識・スキル・考え方を身につける 宇大英語プログラム(EPUU) スポーツと健康 データサイエンス入門 SDGs入門
教養科目	
基盤教養科目	1年次の時点での総合(学際的・学際的)と知の活用(課題解決型)の内容を試みる ルーブリック評価を実施し、1年次の時点における宇大スタンダードの修得状況を可視化する。(2単位、必修)。
リベラルアーツ科目	幅広い「問い」に触れ学びの幅を広げることにより、自らを多様な世界へと突き放す 教員の専門分野に基づき細分化されていた科目をまとめることで、特定の学問分野に偏ることなく履修することを可能とする。
高度教養科目	3(4)年次で、異なる専門的知識・技能を修得しつづける者と対話する力を身につける ルーブリック評価を実施し、3(4)年次の時点における宇大スタンダードの修得状況を可視化する。(1単位、必修)。

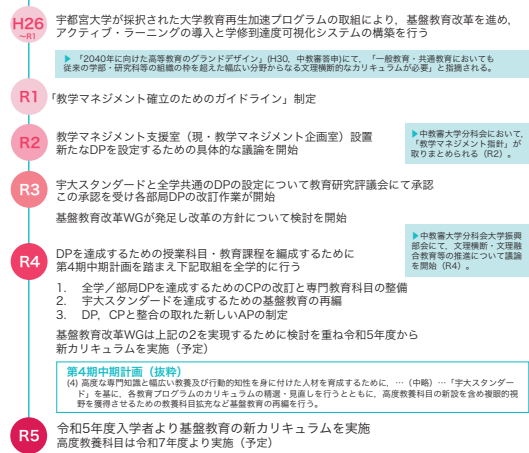
主に「教養科目」の改革を実施

これまでの基盤教育の主要な課題と改善策

宇大スタンダードの6つの力の修得状況を可視化する仕組みを構築する必要性
宇大スタンダードの修得状況をルーブリック評価で可視化する科目として、1年次に履修する基盤教養科目と、3(4)年次に履修する高度教養科目を新設する。これらの科目の新設により、**1年次と比較して宇大スタンダードの修得状況にどのような変化がみられたか**ということを学修者自身が把握できるようになる。

文理横断・文理融合型科目の充実
課題発見・解決力を修得させる科目の充実
異なる専門分野の教員が連携し、基盤教養科目および高度教養科目において、課題発見・解決型の内容を実施する。また、リベラルアーツ科目において、様々な学問分野の問いに触れさせ、学びの幅を広げる。このことで、**広い視野を持ちながら多くの課題に向き合うことができる力を修得**できるようになる。

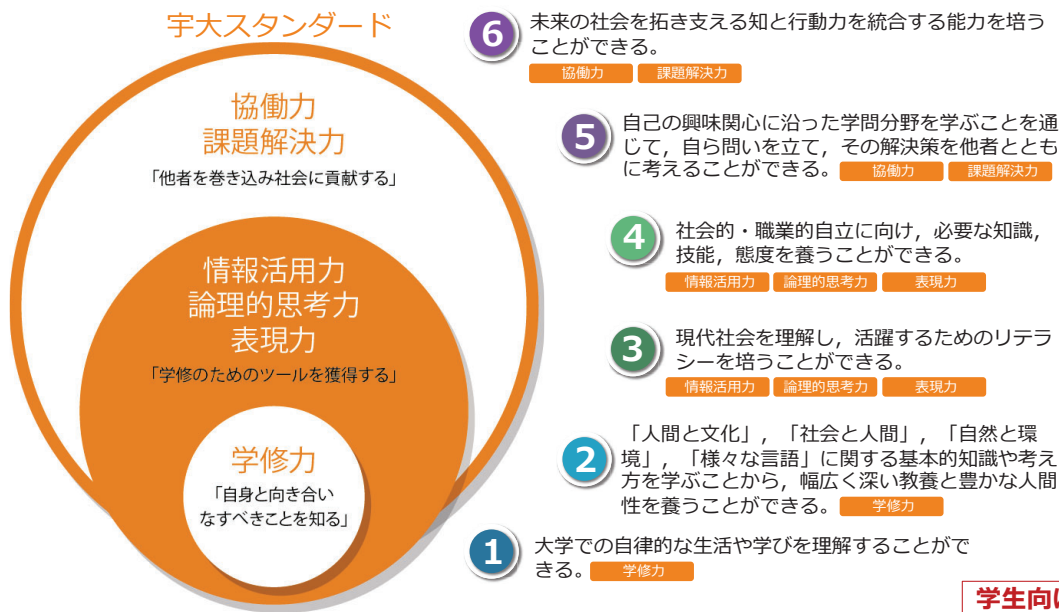
基盤教育改革のあゆみ



宇大スタンダード (学生向け説明)

基盤教育のスタンダード (学修・教育目標)

宇都宮大学では、基盤教育でみなさんが達成すべき学修・教育目標として、「基盤教育のスタンダード」を設定しています。基盤教育では、これらの目標の達成を可能とするための科目を開講し、「宇大スタンダード」に定める6つの力の基礎を固め、幅広い教養と行動的知性を備え、未来の社会を拓き支える人間としての基盤を育成します。



学生向け

宇大スタンダード（教員向け説明）

教員向け

基盤教育のスタンダード（学修・教育目標）

宇都宮大学では、基盤教育でみなさんが達成すべき学修・教育目標として、「基盤教育のスタンダード」を設定しています。基盤教育では、これらの目標の達成を可能とするための科目を開設し、「宇大スタンダード」に定める6つの力の基礎を固め、幅広い教養と行動的知性を備え、未来の社会を拓き支える人間としての基盤を育成します。

宇大スタンダード	基盤教育のスタンダード	対応する科目
学修力 自身と向き合いなすべきことを知る	①【学修力】大学での自律的な生活や学びを理解することができる。 ②【学修力】「人間と文化」、「社会と人間」、「自然と環境」、「様々な言語」に関する基本的知識や考え方を学ぶことから、幅広く深い教養と豊かな人間性を養うことができる。	初期導入科目 教養科目 リベラルアーツ科目 人文科学系, 社会科学系, 自然科学系, 総合系, 初修外国語系
情報活用力 論理的思考力 表現力 学修のためのツールを獲得する	③【情報活用力・論理的思考力・表現力】現代社会を理解し、活躍するためのリテラシーを培うことができる。 ④【情報活用力・論理的思考力・表現力】社会的・職業的自立に向け、必要な知識、技能、態度を養うことができる。	リテラシー科目 教養科目 リベラルアーツ科目 基盤キャリア教育系科目
協働力 課題解決力 他者を巻き込み社会に貢献する	⑤【協働力・課題解決力】自己の興味関心に沿った学問分野を学ぶことを通じて、自ら問いを立て、その解決策を他者とともに考えることができる。 ⑥【協働力・課題解決力】未来の社会を拓き支える知と行動力を統合する能力を培うことができる。	教養科目 基盤教養科目 教養科目 高度教養科目

科目区分の変更点

令和4年度までの基盤教育

初期導入科目	新入生セミナー(2)
リテラシー科目	EPUU(8), スポーツと健康(2), データサイエンス入門(2), SDGs入門(1)
教養科目	人文科学系科目, 社会科学系科目, 自然科学系科目, 初習外国語系科目, 総合系科目 <small>学部ごとに必要単位数が異なる。</small>
基盤キャリア教育科目	キャリア創造科目 <small>学部ごとに必要単位数が異なる。</small>

令和5年度からの基盤教育

初期導入科目	新入生セミナー(2)
リテラシー科目	EPUU(8), スポーツと健康(2), データサイエンス入門(2), SDGs入門(1)
教養科目	基盤教養科目(2) 人間と文化への扉, 社会と人間への扉, 自然と環境への扉, ものづくり体験 リベラルアーツ科目 <small>学部ごとに必要単位数が異なる。</small> 人文科学系科目, 社会科学系科目, 自然科学系科目, 初修外国語系科目, 総合系科目, 基盤キャリア教育科目 高度教養科目(1) 3・4年次に履修 高度教養セミナー

新規科目区分

科目区分の再編

新規科目区分

- ・括弧()内は全学部共通の必修単位数。
- ・専門導入科目は、令和5年度以降は専門教育科目に移行。
- ・留学生日本語科目については省略。

※従来の「教養科目」とは意味合いが全く異なることに注意

基盤教養科目の詳細

基盤教養科目 (全学部必修2単位)

人間と文化への扉

基盤教養科目は左記の3つの科目から構成される。なお、各科目には複数のテーマが設けられており、それらのテーマから1つを選んで履修する。

社会と人間への扉

自然と環境への扉

履修の方法

科目ごとに設定されているテーマの中から1つを選んで履修する。

例: 人間と文化への扉 を履修する場合

テーマ

- 認知心理学入門
- 日本の古典
- 論理的思考
- 初修外国語への誘い
- ...

これらのテーマの中から1つを選んで履修する。どのテーマを選んだとしても、「人間と文化への扉」という科目を履修したという扱いになる。

※「人間と文化への扉」の中のテーマを2つ以上履修することはできない(教務ポータルが登録を受け付けないシステム)。

授業科目名	学期	科目名	授業テーマ名	時間割コード	履修時期
人間と文化への扉	前期	水5-6	7分モク・スタート入門	G880008	始
	後期	月5-6	英語とつきあうために	G880005	始
	後期	月5-6	初修外国語への誘い	G880006	始
	後期	火3-4	7分モク・スタート実践	G880010	始
	後期	木3-4	認知心理学入門	G880001	始
	後期	木5-6	日本の古典	G880007	始
	後期	金7-8	論理的思考	G880004	始
社会と人間への扉	前期	火3-4	宇大を学ぶ	G880109	始
	前期	水9-10	Q11と学問の不確かさ	G880105	始
	前期	集中	ダイナミクス社会の中の男女共同参画	G880105	学外
	後期	月3-4	ダイナミクス社会の中の男女共同参画	G880104	始
	後期	月5-6	ダイナミクス社会の中の男女共同参画	G880110	始
	後期	月5-6	多文化共生論入門	G880101	始
	後期	月5-6	人と社会をつなぐ地域デザイン学	G880106	履東
	後期	月7-8	遊び論と遊び指導	G880107	始
	後期	集中	人間と社会	G880108	始
	自然と環境への扉	前期	火3-4	野外における野生動物観察プログラムの基礎	G880201
前期		水7-8	フィールドワークの理論と実践	G880203	始
後期		月9-4	数学の世界	G880202	始
後期		月3-4	情報の発信技術の演習	G880209	履東
後期		月5-6	生物資源の利用を考える	G880211	始
後期		月5-6	知能機械としてのAIフィクと社会実践	G880207	履東
後期		月5-6	地域デザイン学の工学と文化	G880213	履東
後期		火3-4	化学・技術史	G880206	履東
後期		木5-6	おいしい薪木	G880210	始
後期		金7-8	テラでもみる薪木	G880208	履東
後期		未定	人と環境をつなぐ	G880212	始
学年		不定時	星山のオアシス計画の学びを考える	G880204	学外
学年		不定時	環境×デザイン実践	G880205	履東
ものづくり体験	後期	木9-10	ものづくり体験	G880301	履東

30科目

※「ものづくり体験」については、工学部の学生は専門科目での履修となるので注意してください。

基盤教養科目の詳細

授業の内容・到達目標・進め方

1年次の時点での宇大スタンダードの獲得状況を把握する

授業の内容

人文科学/社会科学/自然科学における重要な論点や考え方に触れることで、基本的な知識の修得と、自ら問いを立て、それに対する答えを見出そうとする姿勢の修得を目指す。

到達目標

人文科学/社会科学/自然科学の基本的な知識を身につけ、その過程において宇大スタンダードに明記されている汎用的能力を身につけることを目標とする。具体的には、次の通りである。

授業の進め方

知識を身につけるだけでなく、授業での学びを通じて宇大スタンダードに記載の6つの力を身につけるために、ルーブリックを活用する。



宇大スタンダードの6つの力

「宇大スタンダード」は、宇大での4年間の学びを通じて獲得すべき6つの汎用的能力を意味しています。これらの汎用的能力は、大学での学びに留まらず、職業や社会生活の中でも活用されることが期待されています。



宇大STDとルーブリックの活用

従来の成績評価(秀・優・良・可)で測れる学力だけではなく、多様な力を測り、可視化していく。このような多様な力を測るためには、各力の達成度の指標が必要になるため、右に記すルーブリックを活用する。

ルーブリックを活用することで 学修の目標を確認しながら自己評価を行おう。

ルーブリックとは、授業で求められる目標を確実に把握するとともに、それらの目標をどの程度達成できているかを確認することで、今後の学修で必要となる取組を自分自身で理解するためのツールです。皆さんは、まず「基盤教養科目」にてルーブリックを活用することになります。宇宮大学のルーブリックは、宇大スタンダードの6つの力に関する達成度を4段階に分け、各段階の基準を文章で表現しています。このようなルーブリックを活用することにより、宇大スタンダードの6つの力をどの程度身につけたか、しっかりと把握することができるようになります。

新入生セミナーにて配布

ルーブリックの例(一部省略) ※実際に授業で用いるルーブリックとは異なります。

宇大 STD	4段階の達成度			
	4	3	2	1
論理的思考力	資料や情報を効果的に選択することで、自分の考えを論理的に説明している。	資料や情報を示し、自分の考えを論理的に説明している。	自らの考えを多層や飛躍な(論理行)で説明している。	6つの力について、4段階のうちどの段階まで達成できているかを考えてみよう。
情報活用能力	明確な目的のために十分な量の資料を収集している。	多くの資料を収集し、	まで達成できているかを考えてみよう。	
表現力	正確な言葉遣い、現を用いて	情報活用能力と表現力は十分に身に付いていそうだ。自分の強みをもっと伸ばそう。	みを用いて...	
学修力	自ら進んで知識や能力を身につけるために...	知識や能力を身につけるために...	必要となるにのみ...	
協働力	他の学生と共に活動する際に、自分の役割を理解し...	他の学生と共に、積極的に声をかける。	論理的思考力・学修力・協働力はもう少し伸ばす余地がありそうだ。	
課題解決力	物事を複数の側面から見る	自ら納得の問いを立て... 課題解決力を伸ばすために、今後の学修計画を真剣に見直す必要がありそうだ。	自ら問いを立て...	

ルーブリックの活用のコツ

皆さんは、教務ポータルから「基盤教養科目」のルーブリックを閲覧することができますので、右の手順でルーブリックを活用しましょう。なお、教務ポータルは、「宇大を学ぶためのツール」を知ろう」に記載のQRコードもしくはURLからアクセスして下さい。

第1回目の授業 第1回目授業までに必ずルーブリックを閲覧して、授業の目標を把握し、具体的な学修計画を立てる。

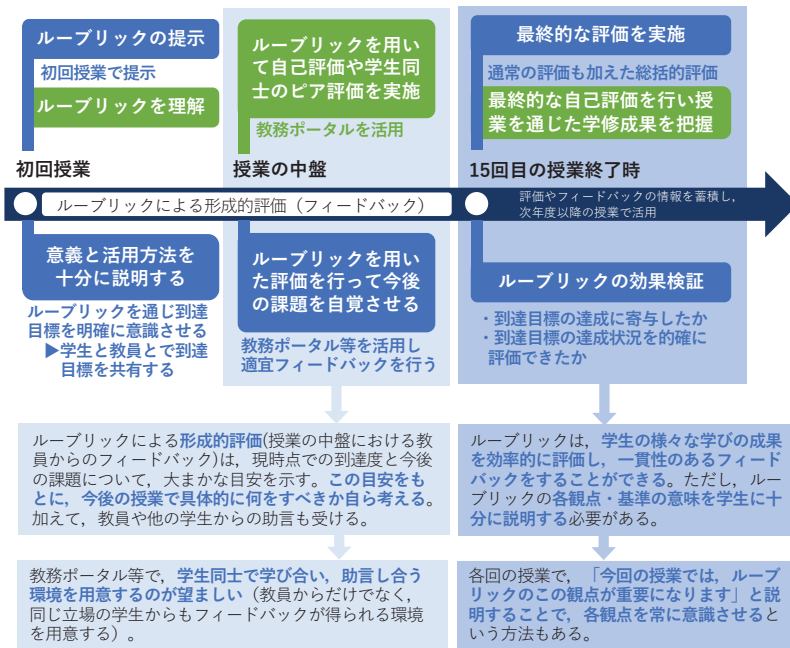
授業の中間 ルーブリックを用いて自己評価を行い、自分の改善点を多面的に把握し、学修計画を修正する。

授業の最終回 ルーブリックにより最終的な達成度を把握し、授業内外で今後実行すべき取組を具体化する。

卒業までに... 卒業までに、宇大スタンダードを十分身につけたと自信を持って言えるようになろう。

基盤教養科目の詳細

ルーブリック活用手順



ルーブリックを活用した成績評価の例

評価対象 (レポート、グループワーク、プレゼンテーション) ごとに、ルーブリックの一部を活用して評価を行う。

レポート 20%	評価の観点	課題解決力 情報活用力 論理的思考力 学修力 その他 (テーマ設定の適切さ、授業内容の理解度…)	ルーブリックを活用することで、課題に取り組む際の心掛けを予め学生に示すことが可能になる。また、「その他」の観点にルーブリック評価を組み合わせることで、多面的な評価が可能になる。
グループでの取組 20%	評価の観点	協働性 課題解決力 情報活用力 学修力 その他 (テーマ設定の適切さ、授業内容の理解度…)	ルーブリックを活用することで、課題に取り組む際の心掛けを予め学生に示すことが可能になる。また、「その他」の観点にルーブリック評価を組み合わせることで、多面的な評価が可能になる。
プレゼンテーション 20%	評価の観点	協働性 情報活用力 論理的思考力 表現力 その他 (テーマ設定の適切さ、授業内容の理解度…)	ルーブリックを活用することで、課題に取り組む際の心掛けを予め学生に示すことが可能になる。また、「その他」の観点にルーブリック評価を組み合わせることで、多面的な評価が可能になる。
定期試験など 40%			

基盤強化担当教員全員に対し、ルーブリック評価に関する説明会 (1時間程度) を実施

基盤教養科目のシラバス共通内容

シラバス入力項目	入力内容についての留意点 (以下に言及のない項目については、授業ごとに自由に記述する)
AL 度	AL20, AL50, AL80のいずれかを選択する。
授業の内容	「授業の内容」の冒頭で、下線を引いた内容を記載する。 「人間と文化への扉/社会と人間への扉/自然と環境への扉」は、人文科学/社会科学/自然科学における重要な論点や考え方に触れることで、基本的な知識の修得と、自ら問いを立て、それに対する答えを見出そうとする姿勢の修得を目指す。 以下、授業ごとに詳細な内容を自由に記述する。
授業の到達目標	「授業の到達目標」の冒頭で、下線を引いた内容を記載する。 人文科学/社会科学/自然科学の基本的な知識を身につけ、その過程において宇大スタンダードに明記されている汎用的能力を身につけることを目標とする。具体的には、次の通りである。 以下、記載例を参考に、授業ごとに到達目標の詳細を自由に記述する。 記載例: (1)○○について理解することができる。 (1-a)○○について、筋道を立てて論理的に考えることができる (論理的思考力)。 (1-b)○○の課題を明らかにし、課題解決に向けた計画を立案し、自律的に取り組むことができる (課題解決力)。 (2)△△することができる。 (2-a)△△するために、情報及び情報手段を主体的に選択し、活用することができる (情報活用力)。
学修・教育目標との関連	「宇都宮大学の学士課程教育・学生の皆さんへの約束-」の「基盤教育の達成目標標準」との関連性を記載する。 記載例: 基盤教育の達成目標標準「大学での自律的な生活や学びを理解することができる」に関連しています。
授業の具体的な進め方	知識を身につけるだけでなく、授業での学びを通じて宇大スタンダードに記載の6つの力を身につけるために、ルーブリックを活用するということを明記する。
成績評価	最終的な成績評価では、「授業の到達目標」に記載した内容を評価する。

基盤教養科目のルーブリック

ルーブリックのひな形

授業ごとに、必要に応じて下記ルーブリックに修正を加え、活用する。

宇大スタンダード	定義	4	3	2	1
論理的思考力	筋道を立てて論理的に物事を考える力。	<input type="checkbox"/> 自らの考えを支える根拠となる資料や情報を効果的に選択することで、自分の考えを実証的かつ論理的に説明している。	<input type="checkbox"/> 自らの考えを支える根拠となる資料や情報を示し、自分の考えを論理的に説明している。	<input type="checkbox"/> 自らの考えを矛盾や飛躍なく筋道立てて説明している。	<input type="checkbox"/> 自らの考えや感想を説明している。
情報活用力	情報及び情報手段を主体的に選択し、活用する力。	<input type="checkbox"/> 明確な目的のために十分な量の資料を適切に収集している。 <input type="checkbox"/> 各資料の特性を理解し、情報の正確性・信頼性を評価した上で、資料に記載の情報を適切かつ効果的に活用している。	<input type="checkbox"/> 多くの資料を収集している。 <input type="checkbox"/> 各資料の特性を理解した上で、資料に記載の情報を適切に活用している。	<input type="checkbox"/> 必要最低限の資料を収集している。 <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を利用している。	<input type="checkbox"/> 単一の資料を入手している。 <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を断片的に引用している。
表現力	感情や思考などを伝達可能な形式に表し、効果的・印象的なものとして伝える力。	<input type="checkbox"/> 正確で明快な言語表現や図表表現を用いることで、背景の異なる他者に対しても自らの考えを理解しやすく伝達している。	<input type="checkbox"/> 正確な言語表現や図表表現を用い、他者が理解できるように自らの考えを伝達している。	<input type="checkbox"/> 言語表現や図表表現を用い、自らの考えを伝達している。	<input type="checkbox"/> 言語表現あるいは図表表現のみで自らの考えを伝達している。
学修力	一人称で物事を捉え自ら行動し、進んで新しい知識・能力を身に付けようとする力。変化に対応し、自らを変えようとする力。	<input type="checkbox"/> 自ら進んで新たな知識や能力を身につけるために、自身の学修の到達状況について十分理解し、授業外においても積極的に学びを深めている。 <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾け、自らの考えを柔軟に改善している。	<input type="checkbox"/> 自ら進んで新たな知識や能力を身につけるために、自身の学修の到達状況について理解し、学びを進めている。 <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾けることで、自らの考えの改善点を自覚している。	<input type="checkbox"/> 新たな知識や能力を身につけるために、教員からのアドバイスを理解し、学びを進めている。 <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾けている。	<input type="checkbox"/> 与えられた課題のみに取り組むなど、必要最低限の学びを進めている。 <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの意見のうち、自らの意見と共通性の高い意見に耳を傾けている。
協働力	チームの中で協力しながら自分の役割や責任を果たす力。多様な人々との繋がりや協働を生み出す力。	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の役割を十分に理解し、他の学生に自ら声をかけ積極的に協力し合いながら取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の役割を理解し、協力し合いながら取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、他の学生と協力し合いながら取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の判断のみで作業を進めている。
課題解決力	多面的な視点から現状を分析し、目的や課題を明らかにする力。課題解決に向けた計画を立案し、自律的に取り組む力。	<input type="checkbox"/> 物事を複数の側面から見ること、自ら具体的な問いを立て、その答えを導き出している。 <input type="checkbox"/> 諸課題に優先順位を付け、解決に向けた計画を自ら立案し、進捗状況に応じて計画を改善しながら取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 自ら問いを立て、その答えを導き出している。 <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた計画を自ら立案し、計画に沿って取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 自ら問いを立て、その答えを導き出すために必要な学びを進めている。 <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた計画を立案し、取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 与えられた問いについて、その答えを導くための試みを行っている。 <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた取り組みをしている。

13

リベラルアーツ科目の詳細

リベラルアーツ科目

人文科学系科目

…科目区分名 …科目名

思想と論理の世界A 人間発達の世界A

思想と論理の世界B 人間発達の世界B

…

社会科学系科目

経済生活の世界A グローバル化の世界A

経済生活の世界B グローバル化の世界B

…

自然科学系科目

自然科学の世界A 科学技術の世界A

自然科学の世界B 科学技術の世界B

…

初修外国語系科目

○○○○

総合系科目

○○○○

基盤キャリア教育系科目

○○○○

リベラルアーツ科目は上記の6つの科目区分から構成される。各科目区分には複数の科目が設置されている。同じ科目名でも、末尾に付されたアルファベット (A, B, C…) が異なる場合には、別科目とみなされる。

なお、各科目には複数のテーマが設けられている場合があり、その場合には、それらのテーマから1つを選んで履修する。

履修の方法(1)

テーマが1つだけの科目を履修する場合

例: 人文科学系科目の **思想と論理の世界B** を履修する場合

テーマ(1つのみ)

東洋思想



「思想と論理の世界B」を履修登録すれば、東洋思想について学ぶことになる。

履修の方法(2)

テーマが2つ以上存在する科目を履修する場合

例: 自然科学系科目の **科学技術の世界B** を履修する場合

テーマ(2つ)

ワイヤレス通信のしくみ
グラフィックス入門



これらのテーマの中から1つを選んで履修する。どのテーマを選んだとしても、「科学技術の世界B」という科目を履修したという扱になる。

※すべてのテーマが毎年開講されとは限らない。

※ **科学技術の世界B** の中のテーマを2つ以上履修することはできない(教務ポータルが登録を受け付けないシステム)。
※ **科学技術の世界A** と **科学技術の世界B** を履修した場合、それぞれの単位が認定される。

14

リベラルアーツ科目の詳細

令和6年度リベラルアーツ科目

科目区分	授業科目名	授業テーマ
人文科学系 (人間と文化)	思想と論理の世界A	西洋思想 現代思想
	思想と論理の世界B	東洋思想
	思想と論理の世界C	論理学 科学思想史
	人間発達の世界A	質的心理学研究法入門 心理物理学
	人間発達の世界B	児童生徒の思考と認知 学校臨床心理学
	人間発達の世界C	ことばから見た人間 子どもの言語とコミュニケーション入門
	文学の世界A	日本近代文学講読
	文学の世界B	フランス文学
	文学の世界C	米文学入門 英文学入門
	歴史の世界C	地域の歴史
	芸術の世界A	吹奏楽〜バンド・オーケストラ〜
	芸術の世界B	美術表現基礎演習 自然と芸術
	芸術の世界C	現代美術 芸術学
	異文化理解の世界A	アフリカ入門
	異文化理解の世界B	ピアサポート入門
	異文化理解の世界C	ピアサポート実践(新規) グローバル入門 世界を知る、学ぶ、行動する
	言語表現の世界A	Japanese Communication Arts 日本語文化と教育
	言語表現の世界B	多言語コミュニケーション-西語越語と7650の語問題- 点字の世界への招待
	言語表現の世界C	社会言語学概論-日本語の変遷-
	生涯学習概論	
	人権と福祉	

科目区分	授業科目名	授業テーマ
社会科学系 (社会と文化)	親密圏と公共圏の世界A	社会的相互行為のデザインと会話分析
	親密圏と公共圏の世界B	現代社会と教育改革
	親密圏と公共圏の世界C	政治の世界 現代日本政治論
	親密圏と公共圏の世界D	法学入門
	グローバル化の世界A	中東の社会と文化
	グローバル化の世界B	戦争と平和をめぐる諸問題 武力紛争と人権
	グローバル化の世界C	国際政治史
	経済生活の世界A	現代社会と金融 地域金融論 資本市場の役割と証券投資
	経済生活の世界B	農業経営入門 資本論を読もう 生命保険を考える
	経済生活の世界C	地域金融機関とともに「地方創生」を考える
	地域生活の世界A	宇大生の宇大生による宇大生のための理想の授業 流域管理論
	地域生活の世界B	現代社会の地理学
	地域生活の世界C	実践・宇都宮のまちづくり 日本国憲法
	グローバル化と外国人児童生徒教育	経営学総論
	国際協力の実態と課題	現代政治の理論と実際
	遊びの理論とゲーム開発	著作権法入門
	知的財産権概論	

科目区分	授業科目名	授業テーマ
自然科学系 (自然と環境)	自然科学の世界A	電気電子数学入門
	自然科学の世界B	家庭の中の物理 物理学入門
	自然科学の世界C	青リ・春・兵衛(ゆり直し高校化学→大学教養の化学) ノーベル化学賞周辺の化学
	科学技術の世界A	化学プロセス工学入門
	科学技術の世界B	ワイヤレス通信技術の今と昔 グラフィックス入門
	科学技術の世界C	なぜ理科を学ぶのか
	人間生活と生物の世界A	維生観察入門
	人間生活と生物の世界B	人間生活と植物
	人間生活と生物の世界C	生物の多様性と何か
	人間社会と情報の世界A	C言語によるプログラミング入門 プログラミング応用
	人間社会と情報の世界B	Webのしくみ インターネットのしくみ 特別支援教育におけるICT活用
	人間社会と情報の世界C	統計学入門
	人間生活と健康の世界A	Introduction to Psychiatry: 英語で学ぶ精神医学入門
	人間生活と健康の世界B	食×SDGs
	人間社会と科学の世界A	人間の感覚を測る
	人間社会と科学の世界B	エレクトロニクス科学史
	人間社会と科学の世界C	データテラシー Python入門
	ICTを活用した教育の理論と実践	
	バイオメテックス入門	
	物質・材料の機器分析入門	
	食と生命のフィールド実践演習	
	データサイエンス基礎	
	実践データサイエンス	
	AI・機械学習入門	
	データサイエンスのための数学	

リベラルアーツ科目の詳細

科目区分	授業科目名	授業テーマ
初修外国語系	フランス語基礎Ⅰ	
	フランス語基礎Ⅱ	
	スペイン語基礎Ⅰ	
	スペイン語基礎Ⅱ	
	中国語基礎Ⅰ	
	中国語基礎Ⅱ	
	韓国朝鮮語基礎Ⅰ	
	韓国朝鮮語基礎Ⅱ	
総合系	Iより始めよ	
	防災・安全教育	
	言語と教育	
	ジェンダー論	
	エスニック・マイノリティの子どもと教育	
基盤キャリア教育系	基盤キャリア教育A	キャリア入門～自分を育てる～ 人と関わる職業について考える
	基盤キャリア教育B	キャリアデザイン
	基盤キャリア教育C	実践企業人材論 起業の実際と理論
	基盤キャリア実習A	
	基盤キャリア実習B	

85
科目

112
テーマ

授業の内容・到達目標・進め方

様々な学問分野の学問的問いに触れ学びの幅を広げることによって、自己の興味関心に自ら課している制約を取り除く。

授業の内容

「○○の世界」は、現代社会に生きる私たちにとって必要となる○○における多様な論点や考え方に触れることで、**幅広い知識の修得と科学リテラシーの向上**を目指す。また、本授業での学びを通じ、○○の世界を**統合的に理解**できるようになることを目指す。

到達目標

○○に関する**幅広い知識**を身につけ、その過程において**宇大スタンダードに明記されている汎用的能力**を身につけることを目標とする。

授業の進め方

授業ごとに異なる。

リベラルアーツ科目のシラバス共通内容

シラバス入力項目	入力内容についての留意点（以下に言及のない項目については、授業ごとに自由に記述する）
AL 度	AL20, AL50, AL80のいずれかを選択する。
授業の内容	「授業の内容」の冒頭で、下線を引いた内容を記載する。 「○○の世界」は、現代社会に生きる私たちにとって必要となる○○における多様な論点や考え方に触れることで、幅広い知識の修得と科学リテラシーの向上を目指す。また、本授業での学びを通じ、○○の世界を統合的に理解できるようになることを目指す。 以下、授業ごとにより詳細な内容を自由に記述する。
授業の到達目標	「授業の到達目標」の冒頭で、下線を引いた内容を記載する。 ○○に関する幅広い知識を身につけ、その過程において宇大スタンダードに明記されている汎用的能力を身につけることを目標とする。具体的には、次の通りである。 以下、記載例を参考に、授業ごとに到達目標の詳細を自由に記述する。 記載例：(1)○○について理解することができる。 (1-a)○○について、筋道を立てて論理的に考えることができる（論理的思考力）。 (1-b)○○の課題を明らかにし、課題解決に向けた計画を立案し、自律的に取組むことができる（課題解決力）。 (2)△△することができる。 (2-a)△△するために、情報及び情報手段を主体的に選択し、活用することができる（情報活用力）。
学修・教育目標との関連	「宇都宮大学の学士課程教育-学生の皆さんへの約束-」の「基盤教育の達成目標標準」との関連性を記載する。 記載例：基盤教育の達成目標標準「大学での自律的な生活や学びを理解することができる」に関連しています。
成績評価	最終的な成績評価では、「授業の到達目標」に記載した内容を評価する。

17

リベラルアーツ科目のルーブリック

ルーブリックのひな形(基盤教養科目と同じもの)

授業ごとに、必要に応じて下記ルーブリックに修正を加え、活用する。

宇大スタンダード	定義	4	3	2	1
論理的思考力	筋道を立てて論理的に物事を考える力。	<input type="checkbox"/> 自らの考えを支える根拠となる資料や情報を効果的に選択することで、自分の考えを実証的かつ論理的に説明している。	<input type="checkbox"/> 自らの考えを支える根拠となる資料や情報を示し、自分の考えを論理的に説明している。	<input type="checkbox"/> 自らの考えを矛盾や飛躍なく筋道立てて説明している。	<input type="checkbox"/> 自らの考えや感想を説明している。
情報活用力	情報及び情報手段を主体的に選択し、活用する力。	<input type="checkbox"/> 明確な目的のために十分な量の資料を適切に収集している。 <input type="checkbox"/> 各資料の特性を理解し、情報の正確性・信頼性を評価した上で、資料に記載の情報を適切かつ効果的に活用している。	<input type="checkbox"/> 多くの資料を収集している。 <input type="checkbox"/> 各資料の特性を理解した上で、資料に記載の情報を適切に活用している。	<input type="checkbox"/> 必要最低限の資料を収集している。 <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を活用している。	<input type="checkbox"/> 単一の資料を入手している。 <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を断片的に引用している。
表現力	感情や思考などを伝達可能な形式に表し、効果的・印象的なものとして伝える力。	<input type="checkbox"/> 正確で明快な言語表現や図表表現を用いることで、背景の異なる他者に対しても自らの考えを理解しやすく伝達している。	<input type="checkbox"/> 正確な言語表現や図表表現を用い、他者が理解できるように自らの考えを伝達している。	<input type="checkbox"/> 言語表現や図表表現を用い、自らの考えを伝達している。	<input type="checkbox"/> 言語表現あるいは図表表現のみで自らの考えを伝達している。
学修力	一人称で物事を捉え自ら行動し、進んで新しい知識・能力を身に付けようとする力。変化に対応し、自らを変えようとする力。	<input type="checkbox"/> 自ら進んで新たな知識や能力を身につけるために、自身の学修の到達状況について十分理解し、授業外においても積極的に学びを深めている。 <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾け、自らの考えを柔軟に改善している。	<input type="checkbox"/> 自ら進んで新たな知識や能力を身につけるために、自身の学修の到達状況について理解し、学びを進めている。 <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾けることで、自らの考えの改善点を自覚している。	<input type="checkbox"/> 新たな知識や能力を身につけるために、教員からのアドバイスを理解し、学びを進めている。 <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾けている。	<input type="checkbox"/> 与えられた課題のみに取り組むなど、必要最低限の学びを進めている。 <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの意見のうち、自らの意見と共通性の高い意見に耳を傾けている。
協働力	チームの中で協力しながら自分の役割や責任を果たす力。多様な人々との繋がりや協働を生み出す力。	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の役割を十分に理解し、他の学生に自ら声をかけ積極的に協力し合いながら取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の役割を理解し、協力し合いながら取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、他の学生と協力し合いながら取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の判断のみで作業を進めている。
課題解決力	多面的な視点から現状を分析し、目的や課題を明らかにする力。課題解決に向けた計画を立案し、自律的に取組む力。	<input type="checkbox"/> 物事を複数の側面から見ることで、自ら具体的な問いを立て、その答えを導き出している。 <input type="checkbox"/> 諸課題に優先順位を付け、解決に向けた計画を自ら立案し、進捗状況に応じて計画を改善しながら取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 自ら問いを立て、その答えを導き出している。 <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた計画を自ら立案し、計画に沿って取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 自ら問いを立て、その答えを導き出すために必要な学びを進めている。 <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた計画を立案し、取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 与えられた問いについて、その答えを導くための試みを行っている。 <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた取り組みをしている。

18

高度教養科目の詳細

高度教養科目 (全学部必修1単位)

高度教養セミナー

3・4年次に開講される学部ごとの「高度教養セミナー」を履修する。

履修の方法

3年次もしくは4年次に開講される「高度教養セミナー」を履修する。

高度教養科目の実施内容等について (予定)

学部	実施時期	実施内容
地域デザイン科学部	3年次 集中講義扱い	地域プロジェクト演習における活動内容について、活動のレベルを『調査設計』『課題発見』『解決策提案』の3段階に設定し、これらを段階毎にとりまとめる。 当該プロジェクトに関わった地域パートナーをはじめ、その他のプロジェクト関係者に対して成果を発表し、質疑応答やフィードバックを受け、多様な意見を踏まえ活動の方向性を確認し、また適宜修正などの対応を行う。 最終段階においては、学内外の関係者を迎えたポスターセッション形式での発表とし、成果をとりまとめ、活動の達成度の評価・見直しが必要な点などの抽出を行い、今後の類似活動の石杖とする。
国際学部	3年次後期～4年次 不定時	各学生が、対面、もしくはC-LearningやZoomなどを用いたオンデマンド・オンライン方式等により、卒業研究に関連するテーマについて公開発表を行う。学生間での質疑応答を推奨し、独自の発表方法 (対外的な発表) も含む。
共同教育学部	原則として4年次前期 不定時・演習 (未修得者向けに4年 後期開講も検討)	専門分野で修得した知識・技能に基づいて各自が課題設定を行い、異なる複数の分野の教員から指導を受けるとともに、分野横断型の少人数討議に参加することによって、専門性を高めつつ主体的に課題解決を行う。
工学部	4年次前期 不定時	各学生が、卒業研究に関連するテーマについて発表するオンデマンド動画を作成し、C-learning上で公開する。この発表に対して学生間で質疑応答を行う。
農学部	3年次後期(予定) 不定時	栃木県農業関連機関 (栃木県庁 (農政課、環境森林政策課)、JA栃木中央会、JA全農とちぎ、県森林組合連合会、等) の実務者による講義と学生によるグループワークを実施する。農の主な施策を中心とした講義としつつ、学生が興味を持ち、将来の仕事にイメージできる内容とする。また、社会的な課題を明らかにするとともに解決アイデアを話し合い、具体的な施策や技術を開発するワークショップやグループワークを実施する。農学部5学科の学生が参加することによって、これまで学んできた専門科目の内容を社会にどのように活用すべきかについて思考が深まることにも、キャリアデザインの構築や問題解決能力の向上などが期待できる。

授業の内容・到達目標・進め方

3・4年次の時点での宇大スタンダードの獲得状況を把握する

授業の内容

各受講生が3年次/4年次までに修得した専門的知識・技能を基にして、**自ら立てた問いについて他者と対話する力を身につける**ことを目指す。

到達目標

自ら立てた問いについて他者と対話し、その過程において宇大スタンダードに明記されている汎用的能力を身につけることを目標とする。具体的には、次の通りである。

授業の進め方

知識を身につけるだけでなく、授業での学びを通じて宇大スタンダードに記載の6つの力を身につけるために、**ルーブリックを活用**する。

高度教養科目

ルーブリックを活用して
3・4年次時点での宇大スタンダードの獲得状況を把握

宇大スタンダードの獲得状況にどのような変化があったかを把握し、**自身の強みと弱みを多面的に理解**する。

基盤教養科目

ルーブリックを活用して
1年次時点での宇大スタンダードの獲得状況を把握

授業のイメージ

課題解決型・プロジェクト型学修や、卒業研究の公開発表会など、**専門を異にする人びととの協働や対話が組み込まれた授業が開講**される。

高度教養科目のシラバス共通内容

シラバス入力項目	入力内容についての留意点 (以下に言及のない項目については、授業ごとに自由に記述する)
AL 度	AL20, AL50, AL80のいずれかを選択する。
授業の内容	「授業の内容」の冒頭で、下線を引いた内容を記載する。 <u>「高度教養科目」は、各受講生が3年次/4年次までに修得した専門的知識・技能を基にして、自ら立てた問いについて他者と対話する力を身につけることを目指す。</u> 以下、授業ごとにより詳細な内容を自由に記述する。
授業の到達目標	「授業の到達目標」の冒頭で、下線を引いた内容を記載する。 <u>自ら立てた問いについて他者と対話し、その過程において宇大スタンダードに明記されている汎用的能力を身につけることを目標とする。具体的には、次の通りである。</u> 以下、記載例を参考に、授業ごとに到達目標の詳細を自由に記述する。 記載例：(1)○○について理解することができる。 (1-a)○○について、筋道を立てて論理的に考えることができる (論理的思考力)。 (1-b)○○の課題を明らかにし、課題解決に向けた計画を立案し、自律的に取り組むことができる (課題解決力)。 (2)△△することができる。 (2-a)△△するために、情報及び情報手段を主体的に選択し、活用することができる (情報活用力)。
学修・教育目標との関連	「宇都宮大学の学士課程教育-学生の皆さんへの約束-」の「基盤教育のスタンダード」との関連性を記載する。 記載例：基盤教育のスタンダード「⑥未来の社会を拓き支える知と行動力を統合する能力を培うことができる」に関連しています。
授業の具体的な進め方	知識を身につけるだけでなく、授業での学びを通じて宇大スタンダードに記載の6つの力を身につけるために、 ルーブリックを活用 するということを明記する。
成績評価	最終的な成績評価では、「授業の到達目標」に記載した内容を評価する。

高度教養科目のルーブリック

ルーブリックのひな形(基盤教養科目と同じもの)

授業ごとに、必要に応じて下記ルーブリックに修正を加え、活用する。

宇大スタンダード	定義	4	3	2	1
論理的思考力	筋道を立てて論理的に物事を考える力。	<input type="checkbox"/> 自らの考えを支える根拠となる資料や情報を効果的に選択することで、自分の考えを実証的かつ論理的に説明している。	<input type="checkbox"/> 自らの考えを支える根拠となる資料や情報を示し、自分の考えを論理的に説明している。	<input type="checkbox"/> 自らの考えを矛盾や飛躍なく筋道立てて説明している。	<input type="checkbox"/> 自らの考えや感想を説明している。
情報活用力	情報及び情報手段を主体的に選択し、活用する力。	<input type="checkbox"/> 明確な目的のために十分な量の資料を適切に収集している。 <input type="checkbox"/> 各資料の特性を理解し、情報の正確性・信頼性を評価した上で、資料に記載の情報を適切かつ効果的に活用している。	<input type="checkbox"/> 多くの資料を収集している。 <input type="checkbox"/> 各資料の特性を理解した上で、資料に記載の情報を適切に活用している。	<input type="checkbox"/> 必要最低限の資料を収集している。 <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を利用している。	<input type="checkbox"/> 単一の資料を入手している。 <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を断片的に引用している。
表現力	感情や思考などを伝達可能な形式に表し、効果的・印象的なものとして伝える力。	<input type="checkbox"/> 正確で明快な言語表現や図表表現を用いることで、背景の異なる他者に対しても自らの考えを理解しやすく伝達している。	<input type="checkbox"/> 正確な言語表現や図表表現を用い、他者が理解できるように自らの考えを伝達している。	<input type="checkbox"/> 言語表現や図表表現を用い、自らの考えを伝達している。	<input type="checkbox"/> 言語表現あるいは図表表現のみで自らの考えを伝達している。
学修力	一人称で物事を捉え自ら行動し、進んで新しい知識・能力を身に付けようとする力。変化に対応し、自らを変えようとする力。	<input type="checkbox"/> 自ら進んで新たな知識や能力を身につけるために、自身の学修の到達状況について十分理解し、授業外においても積極的に学びを深めている。 <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾け、自らの考えを柔軟に改善している。	<input type="checkbox"/> 自ら進んで新たな知識や能力を身につけるために、自身の学修の到達状況について理解し、学びを進めている。 <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾けることで、自らの考えの改善点を自覚している。	<input type="checkbox"/> 新たな知識や能力を身につけるために、教員からのアドバイスを理解し、学びを進めている。 <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾けている。	<input type="checkbox"/> 与えられた課題のみに取り組むなど、必要最低限の学びを進めている。 <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの意見のうち、自らの意見と共通性の高い意見に耳を傾けている。
協働力	チームの中で協力しながら自分の役割や責任を果たす力。多様な人々との繋がりや協働を生み出す力。	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の役割を十分に理解し、他の学生に自ら声をかけ積極的に協力し合いながら取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の役割を理解し、協力し合いながら取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、他の学生と協力し合いながら取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の判断のみで作業を進めている。
課題解決力	多面的な視点から現状を分析し、目的や課題を明らかにする力。課題解決に向けた計画を立案し、自律的に取り組む力。	<input type="checkbox"/> 物事を複数の側面から見ること、自ら具体的な問いを立て、その答えを導き出している。 <input type="checkbox"/> 諸課題に優先順位を付け、解決に向けた計画を自ら立案し、進捗状況に応じて計画を改善しながら取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 自ら問いを立て、その答えを導き出している。 <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた計画を自ら立案し、計画に沿って取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 自ら問いを立て、その答えを導き出すために必要な学びを進めている。 <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた計画を立案し、取り組みを進めている。	<input type="checkbox"/> 与えられた問いについて、その答えを導くための試みを行っている。 <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた取り組みをしている。

21

学生 ルーブリックの活用に対する反応

肯定的反応

- 論理的思考力や協働力など複数の観点で目標が設定されていて大学生で身に付けたい能力がはっきり分かるところがいいと思う。大学に入ったばかりの1年生は高校までの学び方ではいけないことを感じるのではないかと。高校までは教師に教わったことを覚えたり出来るようにしたりすることが中心だが、**大学では専門分野を学ぶため、学習者の意欲により学びに深さが出る**。学習する人とならない人では大学卒業時には大きな差が出来ているので、ルーブリック評価があることで**現状の自分の位置を把握して高い基準を目指して学習することが出来る**と思う。
- 自分のレベルを認識することができた。
- 自分の授業に取り組む前と後で何がどう変化したのか分かりやすかった。
- 授業を受けて終わりではなく、**事前の自己評価と事後の自己評価を見比べ、学びを実感することができた**。
- 自分の気持ちや授業に対する意欲の変化を見ることができてよかった。**回を追うごとに技の完成度が高められ、グループでの演技を高めたいという気持ちが増えていったので、それを目に見える形で示すことができてよかった**。
- 事前や途中、終わりそれぞれグラフを視覚化することで自己評価を確認しやすかった。
- 自分の器械運動を通しての**成長が目に見えて分かった**。また、先生からの評価ももらえ、**見てもらえているということがわかり、モチベーションになった**。
- 自分がどのような姿までいくことができればいいのか具体的に分かるため、これからどうすればいいのか、どのように授業に参加していけばいいのか目標にしやすくなる。また参加できない中でもできることというのはたくさんあると分かったし、その中でも**ルーブリック評価というのはいかにできない中でどう授業に参加すればいいのかを示してくれた**。
- **自己評価と他人からの評価を比較して、客観的に見直すことができた**。
- 授業開始時から終了時にかけてどのように自分が変化していったかを客観的に評価し視覚的に捉えられた。

22

学生 ルーブリックの活用に対する反応

否定的反応

- 段階を踏んでできるという点はいいと思ったが、少し文章が多く、みづらいなと思った。
- 正直、そこまで手が回っていなかったの、どのように学習と結びついているのか実感が無い。
- 正直に言うと、気にしているタイミングが少なく、あってもなくてもどちらでも、という感じだった。
- 4段階評価しかなくて、形式的感が少しあるから（最初より最後の方が良くなるようにするか、みたいな）。
- 段階的に自己評価及び学びの実態の振り返りができたことは良かったが、評価項目の言い回しがもう少し単純なものの方が、自分に当てはめて考えやすかったのではないかと感じた。
- ルーブリック評価の項目の文章が長いのと、どの項目に値するのかあまりよく分からずに付けてしまった。
- 教務ポータル自体をあまり開く機会がないのに加えて、C-learningとLMSで課題に取り組んでいるのに三つ目のものとして行うものがやりづらい。

23

教員 ルーブリックの活用に対する反応

- ルーブリックをシステムに入れ込む作業が出来さえすれば、入力自体は難しいことではないと思います。
- **今回は30名のクラスですが、実際にひとりひとりルーブリックで評価していくのはなかなか難しいと感じます。**
- 課題やテストと、ルーブリックとがリンクし、自動的にルーブリック評価ができるようなシステムであればかなり良いと思うのですが、どうすればそうなるのかは想定外です。
- マニュアルを提示しながら操作の説明をすることで、学生は問題なく自己評価を行うことができていました。
- 学生も全く問題なくシステムの操作をしておりました。欠席した学生には、マニュアルを見て自分で操作をするように指示しましたが、問題なかったようです。
- 学生の自己評価は、一般的に高い評価を付けることはなく、きちんとできていても低めの評価を付けるのが通常ではないかと思いました。また、何となく、感覚的にチェックしている感じもあります。
- **ルーブリックを利用することの意義や、自己評価を行うことの意義を、1回目の授業において十分に説明することが重要**であると感じています。●●●●では、自己評価を通じ自分自身の様々な側面を振り返り、今後の学びにおいてどういうところに力を入れていかなければならないか自分自身でも判断できるようになる、というメッセージを伝えてきました。
- ●●●●では、各学生が興味を持っている社会現象を一つ取り上げ、情報収集を行いながら考察を加え、最終的にポスターセッションで論理的な発表をすることを求めています。したがって、これまでも学生の様々なパフォーマンスに対して効果的かつ効率的にフィードバックを行うために、独自にルーブリックを利用してきました。今後は、自己評価シートを参照しながら、より効率的に学生へのフィードバックができるのではないかと考えています。
- **達成すべき目標を強く意識しながら授業に臨むことができる、という点にメリットを感じている学生が多い**と感じました。
- 授業内で発表をするときに、どのような点に注意をして準備を進めればいいのか具体的な指針を得ることができたという声を複数聞くことができました。

24

組織の概要と目標 (2024年9月現在)

大学院生	3名	
4年次生	1名	
3年次生	8名	
2年次生	4名	
1年次生	2名	合計18名



宇大ラーニングサポーターの主な活動内容

定期的な相談窓口 (毎週火曜日18~21時)

ラーニング・コモンズに宇大ラーニングサポーターが常駐し、学生生活や学業について相談や質問に応じる。相談に際して予約等は不要。

学修に関するイベントの実施

履修相談会、レポートの書き方講座、PCの使い方講座、各種勉強会等、宇大生のよりよい学びを促すためのイベントを高頻度(2024年度前期は毎週1回以上)で実施。

基盤教養科目の授業サポート

ルーブリック評価を必ず実施することになっている「基盤教養科目」に入り、受講者がルーブリックを用いた自己評価を円滑に行えるようにサポートする。

上記以外にも、様々な活動を精力的に行っている。詳細は宇大ラーニングサポーター公式ウェブサイトを参照。



X大学ピアサポーターの目標

すべてのX大生がX大学という場を最大限に活かし、主体的かつ自律的に学びきって卒業できるよう、学生の立場から同じ目線でサポートを行う。

サポーター間の議論を経て、2024年2月15日に決定。

宇大ラーニングサポーター (2023年10月~)

定期相談窓口 (サポーター全員で対応)

- ▶ 学部生の宇大ラーニングサポーターが、学生生活面での相談や、学生間のつながり創出の助けを行う。
- ▶ 学部生及び大学院生の宇大ラーニングサポーターが、学修環境の整備や、能動的な学修を促す企画の実施を行う。

アカデミックサポート

定期相談窓口のサービスの1つとして
大学院生・学部4年生が対応

- ▶ 大学院生・学部4年生の宇大ラーニングサポーターが、学修面での困りごと(レポートの書き方や、教理化等の基礎的な学修方法)について相談対応を行う。

サポート活動に対する助言 ▲ サポーターに対する研修

ラーニングサポートオフィス(2023年4月~)

宇大ラーニングサポーター

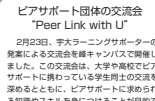
宇都宮大学広報誌 UUnow第58号



高松 翔人
工学部基盤工学科4年

一人一人が主体的に行動する
宇大ラーニングサポーターは特定のリーダーをめぐって、全員がリーダーシップを発揮しながら活動することによって成り立ちます。各自が主体的に動くことを意識して活動しています。私は元々、主体的な行動が得意でした。一人一人が自分自身で目標を定めて行動し、それを達成していただくことで、今では積極的に行動できるよくなりました。成長を実感しました。

コロナ禍での経験が原動力に
入学したときはコロナ禍で、オンライン授業が続き、友達と会えず、先陣も知らず、成長の足がかりがなくて苦しい日々を送っていました。でも、先輩からアドバイスをもらって、自分自身で行動し、成長を実感しました。その経験が今の活動の原動力になっています。



田中 遼
国際学際国際学専攻2年

ピアサポート団体の交流会
「Peer Link with U」
2月23日、宇大ラーニングサポーターの発案による交流会を種ヶ丘キャンパスで開催しました。この交流会は、大学や高校などでピアサポートに関わっている学生間の交流を深めるとともに、ピアサポートに求められる知識やスキルを身につけることが目的です。当日はだけでなく事前の準備から交流を深めることを目指し、他大学の学生と定期的なコミュニケーションを行い、企画内について議論を重ねました。



山田 遼
工学部基盤工学科4年

ピアサポートの重要性を伝える
ピアサポートの重要性を伝えるために、様々な場面で活動しています。例えば、入学オリエンテーションや、学修支援イベントなど、様々な場面で活動しています。また、先輩からアドバイスをもらって、自分自身で行動し、成長を実感しました。その経験が今の活動の原動力になっています。



佐藤 遼
農学部農林科学科2年

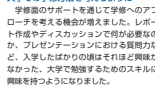
自分と同じ大学生のために
人と話すこと、関わるのが好きなので、それを活かして活動することに生かされたいなと思っています。この活動に参加して、自分と同じ大学生をサポートすることを通じて、自分の働きが役に立っていることを実感できています。オープンキャンパスでは基礎的な学修方法に関する相談に答えることができて、今後はもっと活躍したいと思っています。

仲間から学ぶ「経験と実習」
新しい取り組みを始めると呼びかけられたときに、自分自身で活動するのは心細いので、先輩の経験や実習に学ぶことに決めました。先輩の経験や実習に学ぶことで、自分自身で活動する自信が持てました。また、先輩からのアドバイスもとても役に立ちました。今後はもっと活躍したいと思っています。



山手 遼
工学部基盤工学科4年

協力を改善していく実行力
学生を支援するといっても自分も学生なので、自己研鑽も必要です。また、「学生インターン」で活動の必要性について学ぶ機会もたくさんありました。その経験を通して、自分自身で活動するようになり、成長を実感しました。



山口 遼
工学部基盤工学科4年

協力を改善していく実行力
学生を支援するといっても自分も学生なので、自己研鑽も必要です。また、「学生インターン」で活動の必要性について学ぶ機会もたくさんありました。その経験を通して、自分自身で活動するようになり、成長を実感しました。



山崎 遼
農学部農林科学科2年

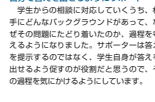
協力を改善していく実行力
学生を支援するといっても自分も学生なので、自己研鑽も必要です。また、「学生インターン」で活動の必要性について学ぶ機会もたくさんありました。その経験を通して、自分自身で活動するようになり、成長を実感しました。

協力を改善していく実行力
学生を支援するといっても自分も学生なので、自己研鑽も必要です。また、「学生インターン」で活動の必要性について学ぶ機会もたくさんありました。その経験を通して、自分自身で活動するようになり、成長を実感しました。



山崎 遼
農学部農林科学科2年

協力を改善していく実行力
学生を支援するといっても自分も学生なので、自己研鑽も必要です。また、「学生インターン」で活動の必要性について学ぶ機会もたくさんありました。その経験を通して、自分自身で活動するようになり、成長を実感しました。



山崎 遼
農学部農林科学科2年

協力を改善していく実行力
学生を支援するといっても自分も学生なので、自己研鑽も必要です。また、「学生インターン」で活動の必要性について学ぶ機会もたくさんありました。その経験を通して、自分自身で活動するようになり、成長を実感しました。



宇大ラーニングサポーター

同じ目線で支え合う心強い仲間たち

相談対応

- 学生生活や学修、履修登録に関することなど、幅広い相談に対応。
- 月に1回の定期相談窓口を開設するほか、Web上でも相談を受け付けます。

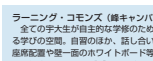


アカデミックサポート

大学院生及び学部4年生がレポートの書き方やプレゼンテーションの方法、数学・物理・化学等の学修方法など、学修の悩みや相談に対応。定期・不定期にデスクを開設。

学修環境の整備

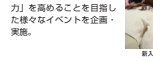
- 学修環境の整備や、能動的な学修を促すための企画・相談を実施。
- 学修に役立つ情報をまとめた掲示物や冊子の作成。



ラーニング・コモンズ(種ヶ丘)5号館 全ての学生が自主的に学修のために利用できる学習の空間。自習のほか、話し合いもできる。座席配置や壁一面のホワイトボード等の設備に加え、個室型ワーキングスペースも数ヶ所設置して利用可能。学修支援や学修環境の整備など、学修に役立つ企画を実施。

イベントの企画・実施

- 4月の新入生対象履修相談会をはじめ、レポート相談会、各学部ゼミ紹介イベントなど、学生生活の「学び」を高めることを目指した様々なイベントを企画・実施。

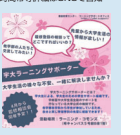


新入生対象履修相談会



履修相談会とゼミ紹介イベントの様子

令和6年度新入生対象履修相談会
日時：令和6年4月4日(木) 19時~21時(金)
場所：ラーニング・コモンズ 5号館等詳細はSNSで告知



新入生対象履修相談会



履修相談会とゼミ紹介イベントの様子

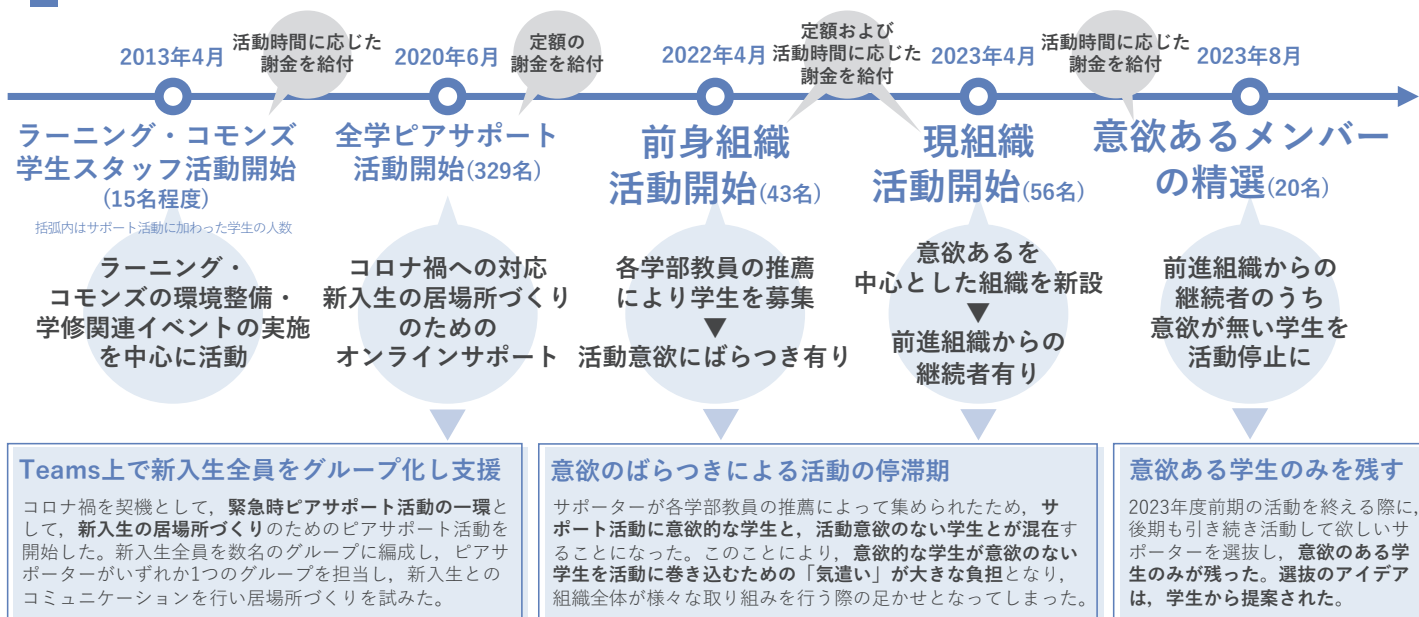


履修相談会とゼミ紹介イベントの様子



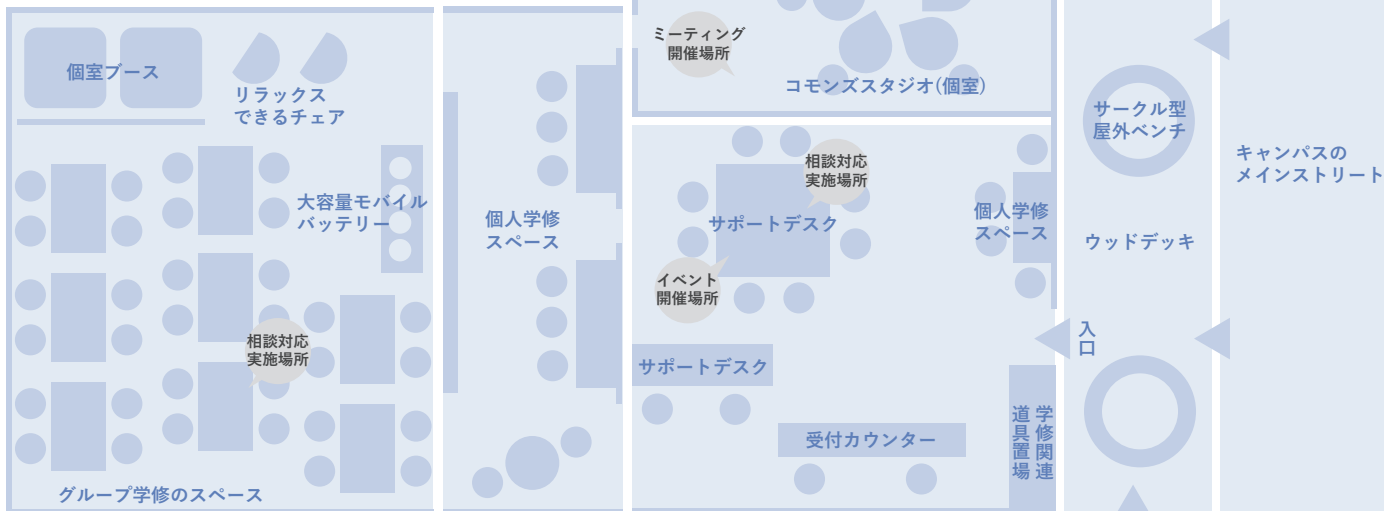
履修相談会とゼミ紹介イベントの様子

宇大ラーニングサポーターの沿革



主な活動場所 (ラーニング・コモンズ)

火曜日18-21時に相談窓口を開設している(同時帯にミーティングも実施)。各自の都合に合わせてサポーターが滞在し、随時相談対応を行う。相談者が訪れない際には、学修関連イベントの実施に向けた準備を行う。



ご清聴ありがとうございました。



教務ポータル利用マニュアル

資料
⑩

履修カルテ（教職課程以外）

学生用

履修カルテ（教職課程以外）

以下は【ルーブリック評価を入力する場合】の手順です

ルーブリック評価を入力する

手順① ルーブリックによる自己評価を入力します。
「ルーブリック評価入力」をクリックしてください。

HOME > 履修カルテ(教職課程以外) >

自己評価シート入力（教職課程以外）

所属				コメント数	👍の数
学籍番号	学生身分	一般		0	0
学生氏名				コメントへの返信率	
カナ氏名				0%	
入学年月日	2022年4月1日	要件年度	2022年度		
現況区分	在学				
カルテ区分	基盤教育科目履修カルテ				
シート	アカデミック・スキルズ2			評価	
開講年度	2022	時間割コード		履修中	
開講科目名					

ルーブリック評価入力

⑩-5

履修カルテ（教職課程以外）

手順② 当初、中間、最終から該当するタブを選択してください。
表に記載されている指標や基準をもとに、自分が当てはまるセルをクリックし、画面下部の「保存」をクリックしてください。

自己評価シート入力（教職課程以外）／ルーブリック評価入力

当初 中間 最終 評価者別リーダーチャート

字大スタンダード	説明	指標4	指標3	指標2	指標1
論理的思考力	筋道を立てて論理的に物事を考える力	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマに関する多くの先行研究（書籍・論文など）に基づいて、意義ある研究テーマを設定できる（研究計画立案）。 研究室の仲間や指導教員と議論を展開し、質の高い結論を論理的に導くことができる（研究遂行）。 得られた結果と論文の目的が整合し、結果を導く方法が妥当である（論文作成）。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマに関する先行研究（書籍・論文など）に基づいて、意義ある研究テーマを設定できる（研究計画立案）。 研究室の仲間や指導教員と議論を展開し、結論を論理的に導くことができる（研究遂行）。 得られた結果と論文の目的が整合し、結果を導く方法が妥当である（論文作成）。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマに関する先行研究（書籍・論文など）に基づき、自分なりの研究テーマを設定できる（研究計画立案）。 研究室の仲間や指導教員と議論を展開し、自分なりの結果を得ることができる（論文作成）。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の経験に基づき、自分なりの研究テーマを設定できる（研究計画立案）。 自分なりの結果を得ることができる（論文作成）。
情報活用力	情報及び情報手段を主体的に選択し、活用する力	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマについての先行研究（書籍、論文など）を自らも広く調査し、意義ある研究テーマを設定できる（研究計画立案）。 調べた情報を基に、研究テーマについて考察できる（論文作成）。 得られた結果を活用して、算数・数学教育との関連について考察できる（論文作成）。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマについての先行研究（書籍、論文など）を自らも調査し、研究テーマを設定できる（研究計画立案）。 調べた情報を基に、研究テーマについて考察できる（論文作成）。 得られた結果を活用して、算数・数学教育との関連について考察できる（論文作成）。 	<ul style="list-style-type: none"> 指導教員のアドバイスによって自ら先行研究（書籍、論文など）を調べ、そこで得た情報に基づいて研究テーマを設定できる（研究計画立案）。 調べた情報を基に、研究テーマについて考察できる（論文作成）。 	<ul style="list-style-type: none"> 指導教員が指定した先行研究（書籍、論文など）で得た情報に基づいて研究テーマを設定できる（研究計画立案）。 先行研究を基に、研究テーマについて調べることができる（論文作成）。

保存 戻る

自己評価 教員評価

未評価 評価無し もう少し グッド

選択したセルは黄緑色で表示されます。

履修カルテ（教職課程以外）

以下は【教員評価・レーダーチャートを確認する場合】の手順です

教員評価・レーダーチャートを確認する

手順① 自己評価に対する教員評価やレーダーチャートを確認することができます。教員評価の入力が完了すると、薄い赤枠で表示されます。

自己評価シート入力（教職課程以外）／ルーブリック評価入力

セル内の個別の評価項目について、「もう少し」や「グッド」等で達成状況が表示される場合がありますので、学修の参考にしてください。

履修カルテ（教職課程以外）

手順② 自己評価や教員評価の入力が完了すると、画面下部にレーダーチャートが表示されます。「評価者別レーダーチャート」をクリックすると、自己評価や教員評価ごとのレーダーチャートが表示されます。レーダーチャートの変化を確認するときに使用してください。

自己評価シート入力（教職課程以外）／ルーブリック評価入力

自己評価シート入力（教職課程以外）／評価者別レーダーチャート

履修カルテ（教職課程以外）

以下は【目標や学びの振り返り、課題の自己評価を入力する場合】の手順です

目標や学びの振り返り、課題の自己評価を入力する

手順① 入力したい項目のタブをクリックします。

HOME > 履修カルテ(教職課程以外) > 自己評価シート入力 (教職課程以外)

所属		コメント数	👍の数
学籍番号	学生身分 一般	2	2
学生氏名		コメントへの返信率	
カナ氏名		50%	
入学年月日	2022年4月1日 要件年度 2022年度		
現況区分	在学		
カルテ区分	基礎教育科目履修カルテ		
シート	アカデミック・スキルズ3	評価	
開講年度	2022 時間割コード	履修中	
開講科目名			

ループリック評価入力

この授業での私の目標 | 学びの振り返り | 課題の自己評価 | 同じ授業を履修する他学生

この授業での私の目標 (2022/05/12 12:17) 🗨️ 2件

○○○について理解する。

登録

行う内容によって以下参照ページへ進んでください

- * 「この授業での私の目標」を入力する場合
- * 「学びの振り返り」を入力する場合
- * 「課題の自己評価」を確認する場合

(⑩-10ページ参照)
(⑩-11ページ参照)
(⑩-12ページ参照)

⑩-9

履修カルテ（教職課程以外）

「この授業での私の目標」を入力する場合

手順② テキストボックスに目標を入力し、「登録」をクリックします。

HOME > 履修カルテ(教職課程以外) > 自己評価シート入力 (教職課程以外)

所属		コメント数	👍の数
学籍番号	学生身分 一般	2	2
学生氏名		コメントへの返信率	
カナ氏名		50%	
入学年月日	2022年4月1日 要件年度 2022年度		
現況区分	在学		
カルテ区分	基礎教育科目履修カルテ		
シート	アカデミック・スキルズ3	評価	
開講年度	2022 時間割コード	履修中	
開講科目名			

ループリック評価入力

この授業での私の目標 | 学びの振り返り | 課題の自己評価 | 同じ授業を履修する他学生

この授業での私の目標 (2022/05/12 12:17) 🗨️ 2件

○○○について理解する。

登録

履修カルテ（教職課程以外）

「学びのふり返し」を入力する場合

手順②

「新規入力」をクリックすると、入力画面が表示されます。
振り返る授業の日付と時限を選択し、コメントを入力したうえで「登録」をクリックします。

HOME > 履修カルテ(教職課程以外)

自己評価シート入力（教職課程以外）

所属	学号	学生身分	一般	コメント数	2	♡の数	2		
学籍番号	学生氏名	カナ氏名	入学年月日	2022年4月1日	学年年度	2022年度	コメントへの返信率	50%	
状況区分	在学	カルテ区分	基礎教育科目履修カルテ	シート	アカデミック・スキルズ3	製課年度	2022	特製制コート	評価中
履修科目名	評価	履修中	ルーブリック評価入力	この授業での私の目標	学びのふり返し	課題の自己評価	同じ授業を履修する他学生		

新規入力

授業日時：2022/05/12 1限
○○○の理解が深まった。
(2022/05/12 13:08) ♡0件
このコメントに対して返信/編集/削除

自己評価シート入力（教職課程以外） / 学びの振り返り入力

授業日時

2022/05/12

1限

コメント

○○○の理解が深まった。

登録

⑩-11

履修カルテ（教職課程以外）

「課題の自己評価」を確認する場合

手順②

「課題の自己評価」はC-Learningのレポート機能と連携します。
対象科目について、C-Learningのレポート機能で提出やコメントがされると、「課題の自己評価」のタブに自動で反映されます。

<C-Learning画面>

協働板

レポート

活動履歴

<教務ポータル画面>

この授業での私の目標

学びのふり返し

課題の自己評価

同じ授業を履修する他学生

ラフデザインを提出
ラフデザインについて、○○○○○○○○。
ラフデザイン.jpeg (学生 太郎1 2021/05/10 11:00) 編集

評価：優

教員コメント1 (教員 一郎 2021/05/10 11:00)

教員コメントに対する本人返信 (学生 太郎1 2021/05/10 11:00)

コメント1 (佐賀 花子 2021/05/10 11:00)

コメント1 - コメントに対する本人返信 (学生 太郎1 2021/05/10 11:00)

67

「編集」をクリックすると、提出した課題に対して自己評価のコメントを入力できます。

⑩-12

履修カルテ（教職課程以外）

以下は【コメントや成績を確認する場合】の手順です

コメントや成績を確認する

手順①

授業での目標などに対するコメントや成績を確認することができます。コメントや「イネ！」の件数、コメントへの返信率が表示されます。成績公開期間に入ると、成績が表示されます。

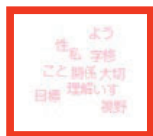
所属				コメント数	👍の数
学籍番号		学生身分	一般	2	2
学生氏名				コメントへの返信率	
カナ氏名				50%	
入学年月日	2022年4月1日	要件年度	2022年度		
現況区分	在学				
カルテ区分	基盤教育科目履修カルテ				
シート	アカデミック・スキルズ3			評価	
開講年度	2022	時間割コード		履修中	
開講科目名					

⑩-13

履修カルテ（教職課程以外）

手順②

「この授業での私の目標」等に対して、教員や同じ授業を履修している学生からコメントをもらうことがあります。コメントに対して返信することも可能です。返信する場合は「このコメントに対して返信」をクリックしてください。



ワードクラウド

コメントをもとに作成されたワードクラウドも表示されます。

コメント追加

良い目標だと思う。
△△△についても視野に入れると、理解がより深まると思う。
(2022/05/12 12:19) 👍 1件
このコメントに対して返信

ありがとうございます。
△△△との関係も含めて学修を進めます。
(2022/05/12 12:32) 👍 2件
このコメントに対して返信 / 削除

私も○○○についての理解することは大切だと考えています。
○○○と△△△の関係性についてどのように考えていますか？
(2022/05/12 12:28) 👍 0件
このコメントに対して返信

注意

初期表示では返信コメントが折りたたまれています。親コメント(この場合はオレンジのコメント)をクリックすると表示されます。

オレンジ：教員
緑：コメントに対する返信
青：同じ授業を履修している学生

⑩-14

履修カルテ（教職課程以外）

以下は【ピアコメントを入力する場合】の手順です

ピアコメントを入力する

手順①

同じ授業を履修している他の学生に対してコメントを入力することができます。「同じ授業を履修する他学生」のタブを選択すると、学生氏名欄に対象の学生氏名が表示されます。コメントを入力したい学生氏名をクリックしてください。

自己評価シート入力 (教職課程以外)

所属		コメント数	👍の数
学籍番号	学生身分 一般	2	2
学生氏名		コメントへの返信率	
カナ氏名		50%	
入学年月日	2022年4月1日 要件年度 2022年度	評価	
現況区分	在学	履修中	
カルテ区分	基礎教育科目履修カルテ		
シート	アカデミック・スキルズ3		
開講年度	2022 時間割コード		
開講科目名			

ループリック評価入力

この授業での私の目標 学びのふり返り 課題の自己評価 **同じ授業を履修する他学生**

1件目 から 60件目の検索結果を表示しています (全部で 60件あります)

検索結果ページ: << 前へ 1 次へ >>

No.	学生氏名	学生所属	学年
1	○○ ○○	××学部××学科	1
2	△△ △△	××学部××学科	1

⑩-15

履修カルテ（教職課程以外）

手順②

対象学生の目標や学びのふり返りの画面に遷移します。「コメント追加」をクリックすると、他の学生に対してコメントすることが可能です。

ループリック評価入力

この授業での私の目標 学びのふり返り 課題の自己評価 同じ授業を履修する他学生

この授業での私の目標

コメント追加

「ループリック評価入力」をクリックすると、対象学生の自己評価を参照することが可能です。

この授業での私の目標 **学びのふり返り** 課題の自己評価 同じ授業を履修する他学生

授業日時: 2022/05/12 1限
○○の理解が深まった。
(2022/05/12 13:08) 👍 0件

このコメントに対して返信 / 編集 / 削除

注意

学びのふり返りへコメントする場合は、「学びのふり返り」タブをクリックし、「このコメントに対して返信」からコメントを入力してください。

⑩-16

ルーブリック評価 ガイドブック

ルーブリックの作成と活用のガイド

本ガイドブックは、「ルーブリック評価の実施方針」に沿ってルーブリック評価を実施する際の参考となる情報を提供することを目的としています。具体的には、ルーブリックの基本的な作成方法と活用方法について説明しています。もちろん、本ガイドブックを参考にしながらも、各授業の実情に応じて、作成方法・活用方法に工夫を加えて頂ければと思います。

なお、教務ポータル内のルーブリックの機能（「自己評価シート作成」，「自己評価シート入力」）については「履修カルテマニュアル」をご覧ください。

CONTENTS

ルーブリックとは

ルーブリックの種類

ルーブリック活用の意義

ルーブリックの作成方法

ルーブリックの活用方法

ルーブリックのサンプル

参考文献

ルーブリックとは

ルーブリックとは学修上の目標の達成度を判断するため、**評価の観点**と、観点の尺度を数段階に分けて文章（**記述語**）で示した**評価の基準**から構成される評価ツールを指します。

学修活動のプロセスや、成果物に含まれる**思考力や表現力**、**理解の深さや質**を捉えたいときや、**実験・実習・実技**を通して学生の**パフォーマンス**を観察し、そこに現れる様々な技能を捉えたいときに、ルーブリックを活用することができます。

最も単純な言い方をすれば、ルーブリックとは「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」である。ルーブリックは、ある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明したもので、様々な課題の評価に使うことができる。例えば、レポート、書評、討論への参加、実験レポート、ポートフォリオ、グループワーク、プレゼンテーションなどである。

(Stevens and Levi 2013=2014: 2)

ルーブリックの構成

◀ 模範的 評価の基準 要改善 ▶

	観点	基準4	基準3	基準2	基準1
評価の観点	観点A (論理的思考力)	観点A, 基準4の説明を記述	観点A, 基準3の説明を記述	観点A, 基準2の説明を記述	観点A, 基準1の説明を記述
	観点B (情報活用力)	観点B, 基準4の説明を記述
	観点C (表現力)	観点C, 基準4の説明を記述
	観点D (学修力)	観点D, 基準4の説明を記述
	観点E (協働力)	観点E, 基準4の説明を記述
	観点F (課題解決力)	観点F, 基準4の説明を記述

評価の観点

一般的には、**学生に身につけさせたい（測定したい）能力や知識**などを記載したり、**課題の評価項目**（例えば、レポートの「構成」や「論理性」など）を記載したりします。

ルーブリックの活用場面によって記載するが異なります。

教務ポータル内でルーブリックを作成・活用する際には、宇大スタンダードの6つの力（上の表の左列丸括弧内に記した力）から1つ以上を選び、評価の観点とすることになります。なお、基盤教養科目、高度教養科目、4年次の専門教育科目は、6つの力すべてを評価の観点とします。

評価の基準

何段階かの評価の基準（レベル）を設けた上で、観点ごとの基準を満たすためにはどのようなことができなければならないか（**行動として現れることが望ましい内容**）、具体的な説明を記述します。

ルーブリックによって各基準の意味は異なりますが、例えば基準を4段階に分けた場合には、下記の通り整理できます。

- 基準4**：十分に目標を達成している
- 基準3**：最低限のレベルで目標を達成している
- 基準2**：目標達成のための努力が必要である
- 基準1**：根本的な改善が必要である

ルーブリックの種類

ルーブリックにはいくつかの種類（策定単位）があります。まず、**課題ルーブリック**です。これは、授業内で提示するレポートやプレゼンテーション、実験等の課題に対して活用できるルーブリックを指します。

次に、**授業ルーブリック**です。これは授業科目の到達目標をルーブリックで示したものです。

最後に、**カリキュラムルーブリック**です。これはカリキュラム全体に対して作成したルーブリックです。

カリキュラムルーブリック
カリキュラム全体における到達度を測定

授業ルーブリック
授業の到達度を測定

課題ルーブリック
レポート、プレゼン、実験等
各種課題の到達度を測定

課題ルーブリック

策定単位 課題単位（レポート、プレゼンテーション、グループワーク、実験、実習等の各種課題）

活用目的 学生の成績評価のため
学生自身の到達度確認のため

レポート等の課題について、ルーブリックを用いて具体的な達成水準を事前に明らかにすることにより、**課題において何を求めているかを明確にすします**。課題の返却時にルーブリックの評価結果を添えることにより、**学生が自身の達成できている部分とそうでない部分を具体的に把握でき、次の学修へつなげるためのきっかけ**になります。

授業ルーブリック

策定単位 授業科目単位

活用目的 学生の成績評価のため
学生自身の到達度確認のため

各授業科目の到達目標についてルーブリックを作成し、具体的な達成水準を事前に明らかにすることで、**学生が自身の達成度を都度把握し、今後の学修で何をすべきか理解できるようにします**。また、複数の教員が担当する授業科目において、**担当教員同士で協議の上でルーブリックを活用することにより、評価に関する共通理解を構築し、評価の水準を高めることも可能**です。

カリキュラムルーブリック

策定単位 教育プログラム単位（特に卒業研究や卒業論文等、キャップストーンに位置付けられる科目での活用が想定できる）

活用目的 DPの到達度の把握のため

各教育プログラムのDP（学位授与の方針）に定められた資質・能力等を測定するためのルーブリックを作成し、**DPに定められた特定の資質・能力等の到達度について、学生および教員が把握できるようにします**。また、学修成果の可視化の観点から、**一人ひとりの学生が自身の学修成果を説明することを可能にします**。

教務ポータルを用いてルーブリックを活用する場合には、後に説明するように、授業の到達目標からルーブリックの記述内容と具体的な評価方法（レポート作成、プレゼンテーションやグループワークの実施等）を考え、それを宇大スタンダードの6つの力に対応させていく方法があります。

この方法でルーブリックを作成した場合には、上記の「課題ルーブリック」を作成し、活用するということになります。

ルーブリック活用の意義

曖昧な目標の明確化に役立つ

例えば、レポート課題で論理的に説明できることを目標として掲げる際に、ルーブリックに「論理的な説明とはどのようなことか」という説明を具体的に書き込むことで、**学生に対して目標を明確に示すことが可能になります。**

教員が期待していることを学生に理解させるために役立つ

課題とともにルーブリックを配付すれば、学生は、**教員が何を望んでいるのか、また、エネルギーをどこに集中させるべきなのかをより深く理解することができるようになります。**

学生の自己改善を助ける

学生がルーブリックを使って提出前に自分の課題を自己評価するように促せば、**学生がメタ認知（学び方を内省することにより学び方を理解すること）という一生涯の重要なスキルを伸ばす手助けをすることができるでしょう。**

フィードバックが容易になり短時間で済むようになる

ルーブリックの表に具体的な記述があるため、学生のパフォーマンスに即した箇所をチェックするだけで、**どの観点が達成できており、どの観点が向上の必要があるかを容易に伝えることが可能です。**特に、大人数授業の場合は、学生の課題に一つ一つコメントを付すと負荷がかかるので、ルーブリックのメリットを感じることができるようになります。

一貫性のある評価／偏りのない評価を行えるようになる

特に大人数の学生の課題を評価する場合には、最初に評価した課題と最後に評価した課題とで、**基準がブレることなく一貫性のある評価をすることができます。**また、複数の教員で評価をする場合に、**教員によって評価に偏りが生じることを抑えることができます。**

学生との意見の対立を減らすことができる

評価基準を明確に示すことにより、評価に関する学生からの抗議（「なぜあの学生が提出した課題の評価が高く、私の評価は低いのか」等）を防ぐことができます。教員は、自身の評価の仕方について説明することに時間を費やすのではなく、**学生のパフォーマンスをいかにして向上させることができるかという助言に力を注ぐことができるようになるでしょう。**

ルーブリックのデメリットとして、**学生がルーブリックに示された観点のみに焦点を当てること**で、ルーブリックを用いなければ伸びていたかも知れない能力の伸びが阻害される可能性が指摘されています。

例えば、レポート課題の発表とともにルーブリックを示した場合、教員が期待している事柄は確実に満たしているが、均一的で独創性に欠けるレポートが提出されてしまうことがあります。独創性など、**教員の予想を超え出たプラスアルファの要素を持つレポート執筆を促すためには、このことを予めルーブリックに書き込むとよいでしょう。**例えば、ルーブリックの表の中に、教員の予想を超えることを推奨するという明確なメッセージを記述するという方法が考えられます。

また、ルーブリックは学生へのフィードバックを少ない労力で可能にしますが、内容に即した個別コメントを期待する学生もいます。その際には、**まず、ルーブリックを通じたフィードバックをもとに自身の学修の振り返りを行うよう促し、それでも個別フィードバックが必要な場合には、別途の対応を行う必要があるでしょう。**

ルーブリックの作成方法

ルーブリックを作成する際には、**既存のルーブリックを参考にする**ことで、少ない労力で作成できます。多くのルーブリックがオンライン上で公開されていますので、それらを参考にするとよいでしょう。

モデルとなるルーブリックが見当たらない場合には、新たなルーブリックを作成するために、右に記した**4つのステップ**を経るとよいでしょう。

ルーブリック作成の4つのステップ

1. 目標や課題のふり返り
2. リストの作成
3. グループ化と見出し付け
4. 表の作成

1. 目標や課題のふり返り

目標や課題のふり返りのステップでは、**授業の到達目標や、課題を通じて学生に何を達成することを求めているか**を振り返ります。ふり返り際には、下記のような問いかけを行い、どのようなルーブリックを作成すべきか考えるとよいでしょう。

- 学生にどのような目標に到達して欲しいか
- 目標の到達に向けた取組において学生に発揮して欲しいスキルは何か
- 目標に到達するために学生が行う必要があるのはどのような活動か
- 学生が目標に到達した場合にどのようにそのことを示せばよいか
- 最も優れたパフォーマンスにはどのような特徴があるか
- 最も評価の低いパフォーマンスにはどのような特徴があるか

2. 目標のリストの作成

目標のリストの作成のステップでは、まず、**授業を通じて学生がどのような目標を達成して欲しいか**を考え、到達目標のリストを作成します。到達目標は、教員が学生に期待するものであると同時に、学生が学修を進める際の羅針盤ともなり、**教員と学生とで目標を共有しながら授業を進行する上で非常に重要なもの**です。

例えば、1年次の学生に、大学での学修スキルを集中的に身につけさせる科目では、以下のような到達目標のリストを挙げることができます。

- ① 大学での学びにおいて必要となる能力を理解できる
- ② 適切な方法で情報を収集し、整理することができる
- ③ 自分の考えを整理し、他者に対して論理的に伝えることができる
- ④ 他者と協働し、ひとつの成果を生み出すことができる
- ⑤ 自ら問いを立て、その答えを導き出すための努力をすることができる

次に、それぞれの到達目標について、**最も高いレベルに到達していると判断できる行動**を考えていきます。例えば、③の最高レベルを考えると、以下のような行動のリストを考えることができます。

- ③ 自分の考えを整理し、他者に対して論理的に伝えることができる
 - a. 自分の考えを実証的・論理的に説明するために根拠となる資料や情報を効果的に選択している
 - b. 目的に沿って十分な量の資料を適切に収集している
 - c. 各資料の特性を理解し、情報の正確性・信頼性を評価している
 - d. 資料に記載の情報を適切かつ効果的に活用している
 - e. 他者に対して自分の考えを伝える際に正確で明快な言語表現や図表表現を用いている
 - f. 背景の異なる他者に対しても自らの考えを理解しやすく伝達している

3. グループ化と見出し付け

グループ化と見出し付けのステップでは、到達目標ごとに考えた最高レベルの行動リストを、類似のものが同一のグループになるように分類していきます。分類を行ったら、各グループに見出しを付けます。この見出しがループリックの評価の観点となります。

教務ポータルにてループリックを活用する際には、宇大スタンダードの6つの力が評価の観点として設定されていますので、各グループがどの力に分類できるかを考えていきます。

例えば、先ほどの到達目標③の行動リストをグループ化し、宇大スタンダードの力に分類すると、以下ようになります。

③ 自分の考えを整理し、他者に対して論理的に伝えることができる

論理的思考力

- a. 自分の考えを実証的・論理的に説明するために根拠となる資料や情報を効果的に選択している
- b. 目的に沿って十分な量の資料を適切に収集している

情報活用力

- c. 各資料の特性を理解し、情報の正確性・信頼性を評価している
- d. 資料に記載の情報を適切かつ効果的に活用している

表現力

- e. 他者に対して自分の考えを伝える際に正確で明快な言語表現や図表表現を用いている
- f. 背景の異なる他者に対しても自らの考えを理解しやすく伝達している

2~3のステップを通じて行動リストを吟味することで、それぞれの行動をどのような方法で評価できるか、ということも明確になっていきます。上の例では、a~fのすべての行動を、レポートを作成させることで評価できると考えられます。または、レポートでは特にa~dについて評価をし、eとfをプレゼンテーションの実施で評価をするということも考えられます。各授業の性質に応じて、どのような方法を採用かは変わってきます。

なお、例えばレポートを課すことをはじめから決めていた場合にも、レポートを作成する際の最高レベルの行動リストを考え、上記と同様に分類を行うことが可能です。

4. 表の作成

表の作成のステップでは、3のステップで付けた見出しを評価の観点とし、評価の基準を設定してループリックの表を作成します。評価の基準は、4, 3, 2, 1などの数字以外にも、「模範的/標準的/要改善/再学修の必要あり」などの評語を付すこともできます。

先ほどの到達目標③の行動リストについて、教務ポータルのループリックに整理すると、次のような表を作成することができます。具体的には、まず、最高レベルの行動リストを基準4の列に記し、次に、最も低いレベルを1の列に記します。最後に、中間段階の3と2を記述するとよいでしょう。

観点	4	3	2	1
論理的思考力	<input type="checkbox"/> 自分の考えを実証的・論理的に説明するために根拠となる資料や情報を効果的に選択している	<input type="checkbox"/> 自らの考えを支える根拠となる資料や情報を示している	<input type="checkbox"/> 自らの考えを矛盾や飛躍なく筋道立てて説明している	<input type="checkbox"/> 自らの考えや感想を説明している
情報活用力	<input type="checkbox"/> 目的に沿って十分な量の資料を適切に収集している <input type="checkbox"/> 各資料の特性を理解し、情報の正確性・信頼性を評価している <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を適切かつ効果的に活用している	<input type="checkbox"/> 多くの資料を収集している <input type="checkbox"/> 各資料の特性を理解している <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を適切に活用している	<input type="checkbox"/> 必要最低限の資料を集めている <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を利用している	<input type="checkbox"/> 単一の資料を入手している <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を断片的に引用している
表現力	<input type="checkbox"/> 他者に対して自分の考えを伝える際に正確で明快な言語表現や図表表現を用いている <input type="checkbox"/> 背景の異なる他者に対しても自らの考えを理解しやすく伝達している	<input type="checkbox"/> 正確な言語表現や図表表現を用いている <input type="checkbox"/> 他者が理解できるように自らの考えを伝達している	<input type="checkbox"/> 言語表現や図表表現を用い、自らの考えを伝達している	<input type="checkbox"/> 言語表現あるいは図表表現のみで自らの考えを伝達している

表に記す記述は、以下の点を踏まえ、適宜修正を加えるとよいでしょう。

- 学生が実行できる行動を記述する必要があるため、「～している」や「～できる」等の表現にする。
- 何を評価したいのかということを明確にし、必要に応じて数値を記載する（例えば、「3本以上の論文を挙げ意見を述べている」「1~2本の論文を挙げ意見を述べている」「論文以外の資料のみを挙げ意見を述べている」「資料に基づかず自説のみを展開している」）。
- 評価をやすくするため、また、学生が学修の目安として活用しやすくするため、可能な限り1つの文章に1つの行動のみを記す。
- 実際に観察可能な行動を記す。

ここまで、大学での学修スキルを集中的に身につけさせる科目の到達目標③のみを取り上げ、ループリック作成の過程を説明してきました。しかし、同科目には他に4つの到達目標がありますので、これらについても上記の手順を経てループリックに記述していくことになります（下表参照）。

ただし、「①大学での学びにおいて必要となる能力を理解できる」に関しては、学生に何らかの行動をさせるよりも、座学によって基本的な知識を身につけさせる方が望ましいと言えます。したがって、①についてはループリックからは除外し、確認テストなどで知識の修得状況を確認すべきです。このように、各授業の到達目標に応じて、複数の評価手法を適切に組み合わせるとよいでしょう。

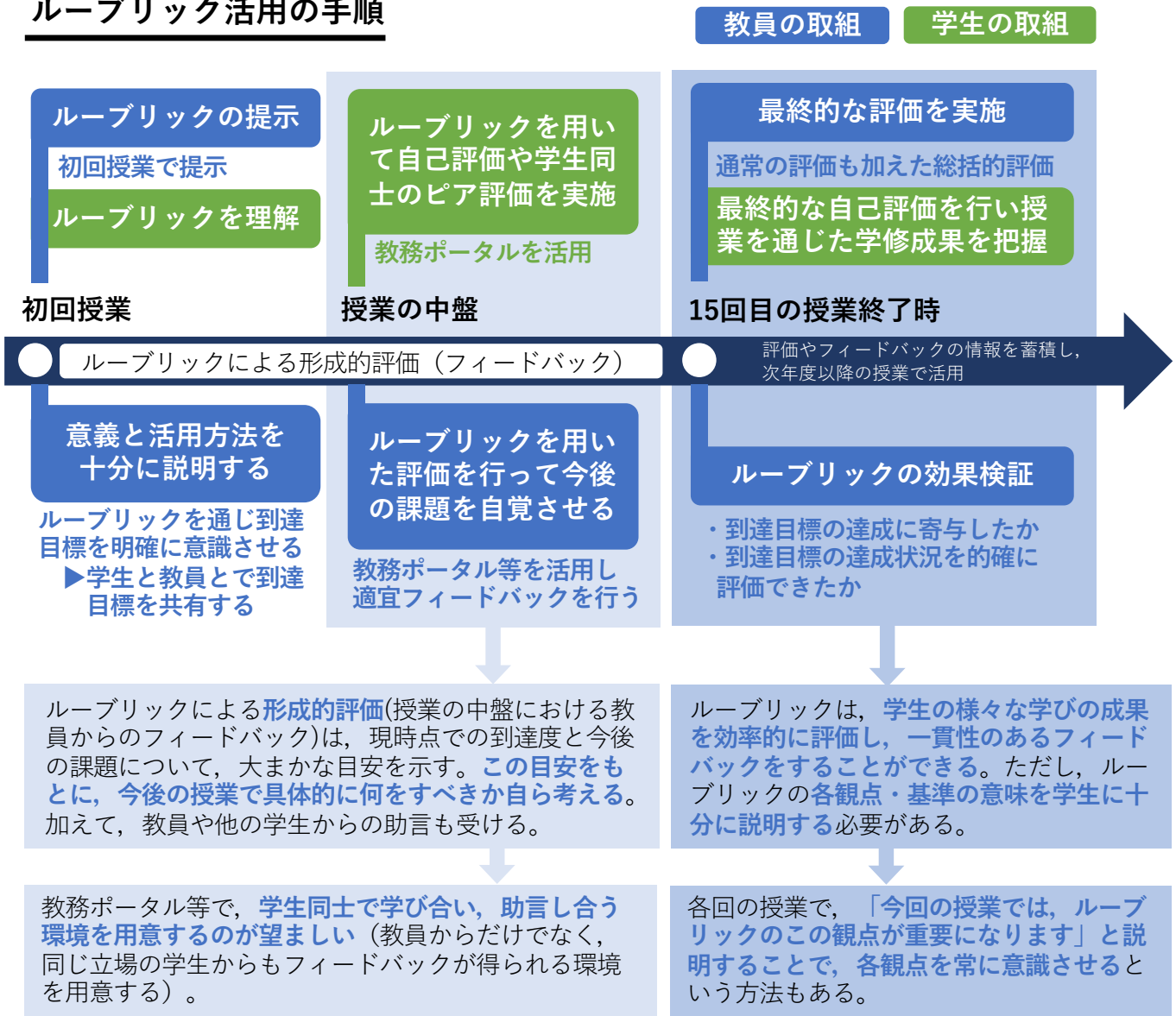
観点	4	3	2	1
論理的思考力	<input type="checkbox"/> 自分の考えを実証的・論理的に説明するために根拠となる資料や情報を効果的に選択している	<input type="checkbox"/> 自らの考えを支える根拠となる資料や情報を示している	<input type="checkbox"/> 自らの考えを矛盾や飛躍なく筋道立てて説明している	<input type="checkbox"/> 自らの考えや感想を説明している
情報活用力	<input type="checkbox"/> 目的に沿って十分な量の資料を適切に収集している <input type="checkbox"/> 各資料の特性を理解し、情報の正確性・信頼性を評価している <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を適切かつ効果的に活用している	<input type="checkbox"/> 多くの資料を収集している <input type="checkbox"/> 各資料の特性を理解している <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を適切に活用している	<input type="checkbox"/> 必要最低限の資料を収集している <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を活用している	<input type="checkbox"/> 単一の資料を入手している <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を断片的に引用している
表現力	<input type="checkbox"/> 他者に対して自分の考えを伝える際に正確で明らかな言語表現や図表表現を用いている <input type="checkbox"/> 背景の異なる他者に対しても自らの考えを理解しやすく伝達している	<input type="checkbox"/> 正確な言語表現や図表表現を用いている <input type="checkbox"/> 他者が理解できるように自らの考えを伝達している	<input type="checkbox"/> 言語表現や図表表現を用い、自らの考えを伝達している	<input type="checkbox"/> 言語表現あるいは図表表現のみで自らの考えを伝達している
学修力	<input type="checkbox"/> 自ら進んで新たな知識や能力を身につけるために、自身の学修の到達状況について十分理解し、授業外においても積極的に学びを深めている <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾け、自らの考えを柔軟に改善している	<input type="checkbox"/> 自ら進んで新たな知識や能力を身につけるために、自身の学修の到達状況について理解し、学びを進めている <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾けることで、自らの考えの改善点を自覚している	<input type="checkbox"/> 新たな知識や能力を身につけるために、教員からのアドバイスを理解し、学びを進めている <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾けている	<input type="checkbox"/> 与えられた課題のみに取り組むなど、必要最低限の学びを進めている <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの意見のうち、自らの意見と共通性の高い意見に耳を傾けている
協働力	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の役割を十分に理解し、他の学生に自ら声をかけ積極的に協力し合いながら取り組みを進めている	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の役割を理解し、協力し合いながら取り組みを進めている	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、他の学生と協力し合いながら取り組みを進めている	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の判断のみで作業を進めている
課題解決力	<input type="checkbox"/> 物事を複数の側面から見ることで、自ら具体的な問いを立て、その答えを導き出している <input type="checkbox"/> 諸課題に優先順位を付け、解決に向けた計画を自ら立案し、進捗状況に応じて計画を改善しながら取り組みを進めている	<input type="checkbox"/> 自ら問いを立て、その答えを導き出している <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた計画を自ら立案し、計画に沿って取り組みを進めている	<input type="checkbox"/> 自ら問いを立て、その答えを導き出すために必要な学びを進めている <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた計画を立案し、取り組みを進めている	<input type="checkbox"/> 与えられた問いについて、その答えを導くための試みを行っている <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた取り組みをしている

ルーブリックの活用方法

ルーブリックを効果的に活用するためには、**学生が評価の観点および評価の基準を十分に理解する必要があります**。そのため、ルーブリックの利用開始前に、学生に対し、ルーブリックの記述内容の意味や利用方法について説明をする必要があります。また、ルーブリック活用のタイミングについても十分に吟味する必要があります。

以下では、教務ポータルでのルーブリックを活用する場面について、説明していきます。

ルーブリック活用の手順



上図の通り、ルーブリックは、授業の初回、授業の中盤、授業終了時といったタイミングで活用することができます。

授業の初回では、**ルーブリックの趣旨や記述内容などについて学生に理解させます**。場合によっては、ルーブリックの利用を試行することで、初回時点で自身がどの程度の力を備えているか、自己診断を行わせることもできます (診断的評価)。

授業の中盤では、ルーブリックを通じた自己評価および教員による評価を通じて、**自身の改善点を把握させ、今後の学修を促します** (形成的評価、学修のための評価)。

授業終了時では、ルーブリックを通じた自己評価および教員による評価を通じて、**最終的な到達度を把握させ、授業内外で今後実行すべき取組を自覚させます** (総括的評価)。

授業の中盤での活用例

授業の中盤で学生にレポートを作成させたり、プレゼンテーションやグループワークなどを行わせたりする場合は、その都度ルーブリックを活用することができます。

教務ポータルにてルーブリックを運用する場合には、「ルーブリックの作成方法」で示したとおり、学生に求める行動リストを、宇大スタンダードの6つの力に分類してルーブリックを作成する方法があると説明しました。また、行動リストを吟味することで、それぞれの行動をどのような方法で評価するかが明確になっていくと説明しました。

このことを踏まえ、「ルーブリックの作成方法」で例示したルーブリックに、評価の方法を対応させると次のようになります。

	観点	4	3	2	1
レポート	論理的思考力	<input type="checkbox"/> 自分の考えを実証的・論理的に説明するために根拠となる資料や情報を効果的に選択している	<input type="checkbox"/> 自らの考えを支える根拠となる資料や情報を示している	<input type="checkbox"/> 自らの考えを矛盾や飛躍なく筋道立てて説明している	<input type="checkbox"/> 自らの明して
レポート	情報活用力	<input type="checkbox"/> 目的に沿って十分な量の資料を適切に収集している <input type="checkbox"/> 各資料の特性を理解し、情報の正確性・信頼性を評価している <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を適切かつ効果的に活用している	<input type="checkbox"/> 多くの資料を収集している <input type="checkbox"/> 各資料の特性を理解している <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を適切に活用している	<input type="checkbox"/> 必要最低限の資料を収集している <input type="checkbox"/> 資料に記載の情報を利用している	<input type="checkbox"/> 単一の資料に片的に
プレゼン	表現力	<input type="checkbox"/> 他者に対して自分の考えを伝える際に正確で明快な言語表現や図表表現を用いている <input type="checkbox"/> 背景の異なる他者に対しても自らの考えを理解しやすく伝達している	<input type="checkbox"/> 正確な言語表現や図表表現を用いている <input type="checkbox"/> 他者が理解できるように自らの考えを伝達している	<input type="checkbox"/> 言語表現や図表表現を用い、自らの考えを伝達している	<input type="checkbox"/> 言語表現の伝達
日頃の学修姿勢	学修力	<input type="checkbox"/> 自ら進んで新たな知識や能力を身につけるために、自身の学修の到達状況について十分理解し、授業外においても積極的に学びを深めている <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾け、自らの考えを柔軟に改善している	<input type="checkbox"/> 自ら進んで新たな知識や能力を身につけるために、自身の学修の到達状況について理解し、学びを進めている <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾けることで、自らの考えの改善点を自覚している	<input type="checkbox"/> 新たな知識や能力を身につけるために、教員からのアドバイスを理解し、学びを進めている <input type="checkbox"/> 教員や他の学生からの多様な意見に耳を傾けている	<input type="checkbox"/> 与えられた最低限の意見に耳を
グループワーク	協働力	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の役割を十分に理解し、他の学生に自ら声をかけ積極的に協力し合いながら取り組みを進めている	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、自分の役割を理解し、協力し合いながら取り組みを進めている	<input type="checkbox"/> 他の学生と共に活動する際に、他の学生と協力し合いながら取り組みを進めている	<input type="checkbox"/> 他の学
レポート グループワーク	課題解決力	<input type="checkbox"/> 物事を複数の側面から見ることで、自ら具体的な問いを立て、その答えを導き出している <input type="checkbox"/> 諸課題に優先順位を付け、解決に向けた計画を自ら立案し、進捗状況に応じて計画を改善しながら取り組みを進めている	<input type="checkbox"/> 自ら問いを立て、その答えを導き出している <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた計画を自ら立案し、計画に沿って取り組みを進めている	<input type="checkbox"/> 自ら問いを立て、その答えを導き出すために必要な学びを進めている <input type="checkbox"/> 課題の解決に向けた計画を立案し、取り組みを進めている	<input type="checkbox"/> 与えられた課題の取り組み

上の例の場合、レポート課題を課すことで、論理的思考力・情報活用力・表現力・課題解決力を評価します。また、プレゼンテーションを課すことで、情報活用力・表現力を評価し、グループワークを行うことで、協働力・課題解決力を評価するということになります。つまり、**授業の中盤において6つの力すべてをいっぺんに評価するのではなく、課題や取組ごとに6つのうち特定の力について評価していく**という方法です。ただし、上の例では、学修力はいずれの取組においても土台となる力ですので、すべての取組において評価を行うという方針になっています。

ルーブリックのサンプル

レポート作成のルーブリック

観点	基準4	基準3	基準2	基準1
論理的思考力	<input type="checkbox"/> 明確に課題と結論が記載され、対応している。	<input type="checkbox"/> 課題と結論が対応している。	<input type="checkbox"/> 課題と結論は書かれているが、対応が明確でない。	<input type="checkbox"/> 課題と結論のどちらか、または両方が書かれていない。
情報活用力	<input type="checkbox"/> 適切なデータ、事実が必要なものだけ記載されている。 <input type="checkbox"/> 複数の専門家の解釈、見解を、適切に引用している。 <input type="checkbox"/> 文献リストが正しい形式で記載され、本文との対応がわかりやすい。	<input type="checkbox"/> データ、事実が適切に記載されている。 <input type="checkbox"/> 専門家の解釈、見解を、適切に引用している。 <input type="checkbox"/> 文献リストが正しい形式で記載されている。	<input type="checkbox"/> データ、事実が記載されているが、適切でない。 <input type="checkbox"/> 引用文と自分の意見が区分されていない。 <input type="checkbox"/> 文献リストの形式が整っていない。	<input type="checkbox"/> データ、事実が書かれていない。 <input type="checkbox"/> 引用が無い。 <input type="checkbox"/> 文献リストが無い。
表現力	<input type="checkbox"/> 誤字脱字が全く無い。 <input type="checkbox"/> 適切な見出し、段落があり、文章も読みやすい。	<input type="checkbox"/> 誤字脱字が1~2か所ある。 <input type="checkbox"/> 適切な段落があり、文章も読みやすい。	<input type="checkbox"/> 誤字脱字が目立つ。 <input type="checkbox"/> 数か所、読みにくい部分がある。	<input type="checkbox"/> 誤字脱字が10か所以上ある。 <input type="checkbox"/> 全体的に書き直さなければ文章を読み進めることができない。
論理的思考力	<input type="checkbox"/> 必要事項について十分に調べてあり、論理的な整合性がある。	<input type="checkbox"/> 必要事項について調べた量・内容は十分だが、論旨が明確でない。	<input type="checkbox"/> 必要事項について調べた量・内容が不十分なため論旨が明確でない。	<input type="checkbox"/> 必要事項について調べていない。

プレゼンテーションのルーブリック

観点	基準4	基準3	基準2	基準1
論理的思考力	<input type="checkbox"/> 情報は論理的かつ興味を引く順序で提示され、聴衆は内容を容易に辿ることができる。	<input type="checkbox"/> 情報は論理的な順序で提示され、聴衆は内容を容易に辿ることができる。しかし、少し退屈である。	<input type="checkbox"/> プレゼンテーションには大きな飛躍があり、内容を辿るのは不可能ではないにせよ、困難である。	<input type="checkbox"/> 論理的な順序で組み立てられたプレゼンテーションではないので、聴衆はその内容を理解できない。
情報活用力	<input type="checkbox"/> プレゼンテーションやその後の質問に対する回答は十分な（必要とされる以上の）内容理解に基づいている。	<input type="checkbox"/> 材料をしっかりとまとめたプレゼンテーションで、すべての質問に的確に解答できるが、詳細にというわけではない。	<input type="checkbox"/> 情報を十分に理解しておらず、初歩段階のプレゼンテーションおよび質問への回答となった。	<input type="checkbox"/> 情報が理解できていない。なかには誤解もある。また、質問に正確に答えられない。
表現力	<input type="checkbox"/> 図表等は発表内容の説明に役立ち効果的である。 <input type="checkbox"/> 綴りや文法上の誤りがない。 <input type="checkbox"/> 明瞭で、正確かつ的確な話し方である。 <input type="checkbox"/> 声量は大きく、楽に聞き取れる。 <input type="checkbox"/> 容易に理解できる速さである。 <input type="checkbox"/> 常にアイコンタクトがある。 <input type="checkbox"/> 原稿を見ることは全くないか、最小限である。	<input type="checkbox"/> 図表等は発表内容と関連している。 <input type="checkbox"/> 綴りや文法上の誤りは2個以内である。 <input type="checkbox"/> はっきりと話し、ほとんどの語句の発音は正確である。 <input type="checkbox"/> 声量は大きく、楽に聞き取れる。 <input type="checkbox"/> 容易に理解できる速さである。 <input type="checkbox"/> アイコンタクトは持続的に行われている。 <input type="checkbox"/> 原稿を見ることが多い。	<input type="checkbox"/> 図表等は非常に少ない。あるいは発表内容との関連が薄い。 <input type="checkbox"/> 綴りや文法上の誤りが3個ある。 <input type="checkbox"/> 話し方が不明瞭である。 <input type="checkbox"/> 主要な語句の発音が間違っていることが多い。 <input type="checkbox"/> 声が小さい。 <input type="checkbox"/> 速すぎて容易に理解できない。 <input type="checkbox"/> ときにはアイコンタクトがある。 <input type="checkbox"/> たいていは原稿を読んでいる。	<input type="checkbox"/> 図表等は使われない。あるいは過剰である。 <input type="checkbox"/> 綴りや文法上の誤りが4個以上ある。 <input type="checkbox"/> 口ごもった話し方をする。 <input type="checkbox"/> 大半の主要な語句の発音を間違える。 <input type="checkbox"/> 声が小さすぎて聞き取れない。 <input type="checkbox"/> 速すぎるため全く理解できない。 <input type="checkbox"/> アイコンタクトが全くない。 <input type="checkbox"/> 常に原稿を読んでいる。

その他のサンプル

ルーブリックのサンプルは、右記URLもしくはQRコードより閲覧できます。サンプルのルーブリックは、各所で公開されているものを適宜アレンジしたものです（評価の観点を宇大スタンダードの6つの力に整理し直す等）。

なお、一部点数が付されたサンプルがありますが、ルーブリックの評価結果を最終的な成績評価に反映させるかどうかは、各授業ごとに判断してください。

<http://bit.ly/3Pe4mTV>



参考文献

参考文献

- Kuh, George D., Ikenberry, Stanley O., Jankowski, Natasha A., Cain, Timothy Reese, Ewell, Peter T., Hutchings, Pa, and Kinzie, Jillian, 2015, *Using evidence of student learning to improve higher education*, San Francisco, CA : Jossey-Bass.
- 中島英博編著, 2018, 『シリーズ大学の教授法4 学習評価』玉川大学出版部.
- 西岡加名恵・石井英真・田中耕治編, 2015, 『新しい教育評価入門 一人を育てる評価のために』有斐閣.
- Stevens, Dannelle D. and Levi, Antonia J., 2013, *Introduction to Rubrics (2nd ed.)*, Sterling, VA: Stylus Publishing. (佐藤浩章監訳, 2014, 『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部.)
- Suskie, Linda, 2009, *Assessing Student Learning: A Common Sense Guide (2nd ed.)*, San Francisco, CA: John Wiley and Sons. (齋藤聖子訳, 2015, 『学生の学びを測る - アセスメント・ガイドブック』玉川大学出版部.)

参考にした他大学の資料

- 関西大学教育推進部教育開発支援センター, 2016, 『ルーブリックの使い方ガイド』(2023年8月25日取得, https://www.kansai-u.ac.jp/ap/activity/images/rubric_guide_faculty.pdf).
- 三重大学地域人材教育開発機構, 2020, 『学習評価ガイドブック - 「4つの力」の評価のためのルーブリック』(2023年8月25日取得, https://www.hedp.mie-u.ac.jp/item/rubric_guidebook.pdf).
- 龍谷大学学修支援・教育開発センター, 2021, 『ルーブリック作成ガイドブック』(2023年8月25日取得, https://fd.ryukoku.ac.jp/biz_content2/project1/data/rubric.pdf).
- 琉球大学グローバル教育支援機構開発室, 2017, 『琉球大学URGCC FDガイド 第2巻 ルーブリック編』(2023年8月25日取得, <https://ged.skr.u-ryukyu.ac.jp/wp-content/uploads/2020/05/98c151c83b889ba69d83f54e28a11c3a.pdf>).
- 東洋大学教務部, 2021, 『シラバス作成のためのガイドライン』(2023年8月25日取得, <https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/academics/improve/quality-assurance/activities/syllabus-check/Syllabus-guidelines.ashx>).
- 早稲田大学, 2021, 『ルーブリック作成ガイド』(2023年8月25日取得, https://wnpspt.waseda.jp/teacher/wsdmoodle/wp-content/uploads/sites/12/2021/10/20211007_rubric.pdf).
- 横浜国立大学大学教育総合センターFD推進部, 2015, 『授業別ルーブリック作成マニュアル』(2023年8月25日取得, <https://www.yec.ynu.ac.jp/about/rubricj.pdf>).

ルーブリック評価ガイドブック

ルーブリックの作成と活用のガイド

2023年9月

編集・発行 宇都宮大学Plus-DX推進チーム

執筆者 石井和也
(Plus-DX推進チーム)

宇大で学ぶためのツールを知ろう。

宇大で学修を進めるためには、大学が提供する様々なツールを活用することが欠かせません。ここでは、中でも特に重要な「[教務ポータル](#)」と「[C-learning](#)」について紹介します。

大学からのお知らせ／履修登録／シラバス／アンケート／フォーラムなどは

教務ポータル

履修や学生生活に関することなど、大学からの重要なお知らせが日々掲載されています。毎日必ず1回はチェックし、情報を知らなかったことによる不利益を被らないようにしましょう。

- 大学からのお知らせを確認するとき
- 履修登録をするとき
- 授業のシラバスを確認するとき
- 休講情報を確認するとき
- アンケートに回答するとき
- フォーラムを利用するとき

こんなときには
[教務ポータル](#)を
チェック！ →



パソコンからアクセスする場合はこちらから▼
<https://kyomu.km.utsunomiya-u.ac.jp/campusweb/>

各授業担当教員からのお知らせは

各授業担当教員から、毎回の授業の指示や、課題提出の指示などが掲載されています。教員と学生との様々なコミュニケーションも、C-learningが活用されることが多いので、毎日必ず1回はチェックするようにしましょう。

C-learning

- 教員からの指示を確認するとき
- 授業の資料を確認するとき
- 課題の内容を確認するとき
- 課題の提出方法や期限を確認するとき
- 教員に質問や相談をするとき

こんなときには
[C-learning](#)を
チェック！ →



パソコンからアクセスする場合はこちらから▼
<https://udai.c-learning.jp/s/login/ssosaml>

教務ポータルに 学外ネットワークからアクセスするには

2段階認証が必要となりますので、パソコンから下記URLにアクセスし、画面の指示に従い、ワンタイムパスワードの初回設定を行って下さい。

<https://ent.utsunomiya-u.ac.jp/user/qsecret.php?st=ga>

宇大に在学中は無料で Microsoft 365を利用できます

レポート作成や表計算、プレゼンテーション資料の作成などに活用できるソフトウェアを無料で利用できます。詳しくは教務ポータル上の案内を参照して下さい。

悩みや心配事のご相談は

あなたが大学生活を送るうえで、悩みや心配事が起きてしまったときは、お気軽に窓口にご相談ください。相談ごとに応じてサポートします。もちろんプライバシーに配慮し、秘密厳守です。

困ったらまずはこちらに

学生なんでも相談窓口

- 峰地区〈学務棟2F〉TEL028-649-5276
- 陽東地区〈学生プラザ1F〉TEL028-689-6189

○WEBから

『学生なんでも相談窓口／相談フォーム』に
入力後、送信してください

入力は
こちらから



★どんなささいなことでも相談（相談例／日常生活・経済的なこと、対人関係、メンタルヘルス、アクシデント、ハラスメント、その他）



はっきりした相談は各担当へ

修学・履修は

- 指導教員
- 修学支援課 TEL028-649-5090
- 陽東学務課 TEL028-689-6014

進路・就職は

- 指導教員 ○就職担当教員
- 就職・キャリア支援センター TEL028-649-5089

留学、生活、サークルについて

- 指導教員 ○サークル顧問教員
- 留学生・国際交流センター
TEL028-649-8166
- 学生支援課 TEL028-649-5097

健康、メンタル面の悩み

- 保健管理センター TEL028-649-5123

性に関する事

- 男女共同参画推進室 TEL028-649-5151

ハラスメント等の人権侵害の悩み

- ハラスメント相談員

★ハラスメントについては
こちらを参照下さい →



学生による 支援活動

『宇大ラーニングサポーター による学びの支援』

先輩学生が新入生（編入生）の様々な疑問や相談にこたえます！履修登録や大学での学修の方法、レポートやプレゼンの方法、さらには授業以外の生活面のことなど、先輩たちの経験に基づいた話を聞くことができます。詳細は二次元コードをチェックして下さい。

こちらから
どうぞ→



←このカードはパンフレットから綺麗に剥がすことができます。常に携帯するか、スマホでブックマーク登録しておきましょう。



宇都宮大学の 学びのカタチ

2024 ▶ 2027

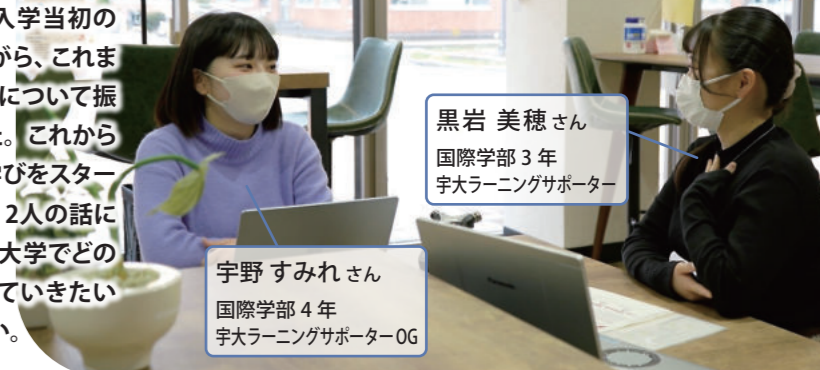
UUSTD

宇大スタンダード

すべての宇大生に身につけて欲しいか

宇大生が語る「学びのカタチ」

2人の宇大生に、入学当初のことを思い出しながら、これまで進めてきた学びについて振り返って頂きました。これから宇都宮大学での学びをスタートさせる皆さんは、2人の話に耳を傾け、宇都宮大学でどのような学びを進めていきたいか考えてみて下さい。



黒岩 美穂さん
国際学部 3年
宇大ラーニングサポーター

宇野 すみれさん
国際学部 4年
宇大ラーニングサポーターOG

大学では自分の学びを自分自身で 決める必要がある：学修力の向上が不可欠

宇野 1年生のときは授業の内容も形態もわからないことばかりだったので、友達と相談しながら履修する科目を考えていました。その後、基盤教育で開講されている様々な分野の授業を履修し学修を進めることで、自分自身の興味がどこにあるのか、どのような授業を取ると自分のためになるのか把握できるようになり、学修力の向上に繋がりましたね。

黒岩 私は入学当初は友達がいなかったので、最初から自分の興味に沿って履修する科目を選びました。宇野さんのように、学びながら徐々に自分の興味関心を具体化していくのも学修力だと思いますし、私のように人に頼らず情報を集め、どのような学びをしていけばいいか考えていくことも、学修力や情報活用力を高めることに繋がったと思います。

宇野 大学では自分でどの授業を取るかを決め、学修計画を立てなければならないというのが、高校までとは大きく異なる点ではないでしょうか。

黒岩 そうですね。大学の先生は学生の状況を逐一確認してくれるわけではないので、常に自分が何をすべきなのか考えながら学修するようになりました。

自ら行動し情報にアクセスすることで 選択肢が広がる：情報活用力の発揮

宇野 友達と相談しながらも、キャリアセンターなどの窓口に向き自ら情報収集してきたことで、授業以外でも積極的に行動する自信がついたと思います。

黒岩 大学には多くの選択肢がありますが、自分から情報にアクセスしないと、選択肢は狭まってしまうと思います。行動することで、選択肢や視野が広がるだけでなく、自立することもできたと思います。

新たな環境に身を置くことで 多様な考え方を知る：課外活動も重要

黒岩 高校の時から演劇をやっていて、宇大に進学してから、地元の演劇団体や宇大の演劇研究会に参加しました。団体ごとの演劇に関する多様な考え方を知り、必要な部分を吸収しつつ、偏らない考え方を身につけていこうと思えるようになりました。課外活動ではありますが、こうした姿勢は授業での学びにも活かされていると思います。

宇野 私は宇大ラーニングサポーターの活動に加わり、他のサポーターが率先して企画の準備などを進めている姿を見て、自分も頑張ろうと思えました。これまでとは異なる新たな環境に身を置くことが重要です。大学生だからこそ色々な活動に加わってみて欲しいですね。

黒岩 色々な場所に踏み込み、色々な年齢層の人たちと交流することで、自分とは違うタイプの人もコミュニケーションが取れるようになると思います。こういう力は社会に出てからも必要でしょうね。

さいごに：新入生へのメッセージ

黒岩 大学ではプレゼンをする機会やレポートを書く機会が非常に多いので、表現力や論理的思考力をしっかり身につける努力を重ねて下さい。とは言え、大学では言われたことだけをやってはいけません。宇大には、頑張ろうと思えばいくらでも頑張れる環境があるので、本当にやりたいことをいち早く見つけるといいと思います。

宇野 そうですね。宇大での4年間の学びを通じて、自分が何になりたいかということを実践的に考え、自分の「武器」と言えるものを身につけ、自分が誇れるものをつくっていくといいのではないのでしょうか。

宇大での 4年間の学び

DP × UUSTD

みなさんが大学を卒業した後に活躍することになる社会では、多種多様な力や知識・技能、さらには教養や知性が必要になります。宇都宮大学では、これらの中から特に重要と思われるものをしっかりと身につけてもらうために、学位授与の方針である「ディプロマ・ポリシー (DP)」のもと、汎用的能力である「宇大スタンダード」を定めています。

みなさんは、ここに記されている力を獲得することを常に意識しながら、宇大での4年間の学びをスタートさせましょう。その上で、授業以外にも様々な経験を積み、社会に力強く歩み出して欲しいと願っています。

宇都宮大学は、入学したすべての学生が、6つの力からなる宇大スタンダードと、専門分野に関する知識・技能を獲得した上で卒業できるように教育を行います。

基盤教育から始まる宇大での学び。 大学での学び方を確実に身につける。

大学での学びとはどのようなものでしょうか。基盤教育を通じて、高校までの学びと大学での学びの違いを理解し、自分の学びを自分自身でコントロールできるようにしましょう (学修力)。その際には、主体的に興味関心の幅を広げ、新たな知の世界へと踏み出すことで、自分の強みや足りないものを強く自覚することが重要です。何を学びたいのか、何を学ばなければならないのかを深く理解することが、自身の学びをコントロールすることへとつながっていくはず。このようにして身につけた学修力は、4年間の学びの強力な原動力になります。

1年次



〈学修力〉
一人称で物事を捉え自ら行動し、進んで新しい知識・能力を身に付けようとする力。変化に対応し、自らを変えようとする力。

専門分野の学びを本格的に始める。 社会を理解し、社会に発信する力を身につける。

学年が進むと、専門分野に関する深い学びがスタートします。1年次で培った学修力を発揮し、学問の世界や世の中で起こっていることについて主体的に情報を集め、知識を身につけていきましょう (情報活用力)。情報や知識をインプットするだけでなく、それをもとに粘り強く思考を巡らせ (論理的思考力)、自分の考えを発信していくことも重要です (表現力)。こうした姿勢は、社会に出た後にも強く求められます。

2年次



〈情報活用力〉
情報及び情報手段を主体的に選択し、活用する力。



〈論理的思考力〉
筋道を立てて論理的に物事を考える力。



〈表現力〉
感情や思考などを伝達可能な形式に表し、効果的・印象的なものとして伝える力。

DP

宇都宮大学の教育目標

- 1 基盤教育を出発点として、現代社会に必要な汎用的能力 (宇大スタンダード) を育成します。
- 2 専門教育を通じて、実践的で専門的な知識と技能を涵養します。
- 3 それらのふたつを有機的に結びつけた4年一貫教育により、幅広い教養と行動的知性を備え、未来の社会を拓き支える人材を育成します。

UUSTD

宇大スタンダードの6つの力

「宇大スタンダード」は、宇大での4年間の学びを通じて獲得すべき6つの汎用的能力を意味しています。これらの汎用的能力は、大学での学びに留まらず、職業や社会生活の中でも活用されることが期待されています。



4年間の学びの集大成としての卒業研究。 大学生活をふり返りその後のキャリアに活かす。

最終年次では卒業研究に取り組みます。その過程で、多くの仲間たちと支え合いながら学びを進めていくことの重要性に気づくでしょう (協働力)。さらには、卒業研究を通じて難問と悪戦苦闘した経験は、その後のキャリアで直面するであろう壁に立ち向かう際に大きな自信を与えてくれます (課題解決力)。就職や大学院進学など、どのような道に進んだとしても、宇大スタンダードの6つの力と専門分野の知識・技能がみなさんを支えてくれるはず。就職・大学院

4年次



〈協働力〉
チームの中で協力しながら自分の役割や責任を果たす力。多様な人々との繋がりや協働を生み出す力。



〈課題解決力〉
多面的な視点から現状を分析し、目的や課題を明らかにする力。課題解決に向けた計画を立案し、自律的に取組む力。

ルーブリックを活用することで 学修の目標を確認しながら自己評価を行おう。

ルーブリックとは、授業で求められる目標を確実に把握するとともに、それらの目標をどの程度達成できているかを確認することで、今後の学修で必要となる取組を自分自身で理解するためのツールです。皆さんは、まず「基盤教養科目」にてルーブリックを活用することになります。宇都宮大学のルーブリックは、宇大スタンダードの6つの力に関する達成度を4段階に分け、各段階の基準を文章で表現しています。このようなルーブリックを活用することにより、宇大スタンダードの6つの力をどの程度身につけたか、しっかりと把握することができるようになります。

ルーブリックの例 (一部省略) ※実際に授業で用いるルーブリックとは異なります。

宇大 STD	4段階の達成度			
	4	3	2	1
論理的思考力	資料や情報を効果的に選択することで、自分の考えを論理的に説明している。	資料や情報を示し、自分の考えを論理的に説明している。	自らの考えを矛盾や飛躍なく筋道立てて説明している。	
情報活用力	明確な目的のために十分な量の資料を収集している。	多くの資料を収集し、		
表現力	正確な言語表現を用いて…		…を用いて…	
学修力	自ら進んで知識や能力を身につけるために…	知識や能力を身につけるために…	必要などきのみ…	
協働力	他の学生と共に活動する際に、自分の役割を理解し…	他の学生と共に、積極的に声を…		
課題解決力	物事を複数の側面から見ることで…	自らの確かな問いを立て…	自らの問いを立て…	

ルーブリックの活用のコツ

- 第1回目の授業** 第1回目授業までに必ずルーブリックを閲覧して、授業の目標を把握し、具体的な学修計画を立てる。
- 授業の中盤** ルーブリックを用いて自己評価を行い、自分の改善点を多面的に把握し、学修計画を修正する。
- 授業の最終回** ルーブリックにより最終的な達成度を把握し、授業内外で今後実行すべき取組を具体化する。
- 卒業までに…** 卒業までに、宇大スタンダードを十分身につけたと自信を持って言えるようになる。

※本パンフレットでは、宇大スタンダードの6つの力をどの段階までに身につけて欲しいかというイメージを示しています。例えば、83学修力は1年次の段階で重点的に身につけて欲しいということを示していますが、2年次以降に「学修力」が不要であるということを示すものではありません。また、「協働力」は4年次の欄に記載されていますが、4年次になるまで「協働力」を身につけるための取組をしなくていいということを示すものではありません。宇大スタンダードの6つの力は、すべての学年においてしっかりと意識し、学びを進めるようにしましょう。

令和6年度第2回教養教育院FD

「新教養教育先行大学(宇都宮大学)に学ぶ教養改革 教養教育院FD2024 vol.2」参加状況

【当日参加者内訳】

教員	
役員	1
教養教育学系	18
都市デザイン学系	1
小計	20

職員	1
----	---

非常勤講師	0
-------	---

合計	21
----	----

【オンデマンド参加者内訳】

教員	
教育研究推進系	1
小計	1

職員	0
----	---

非常勤講師	0
-------	---

合計	1
----	---

総計	22
----	----

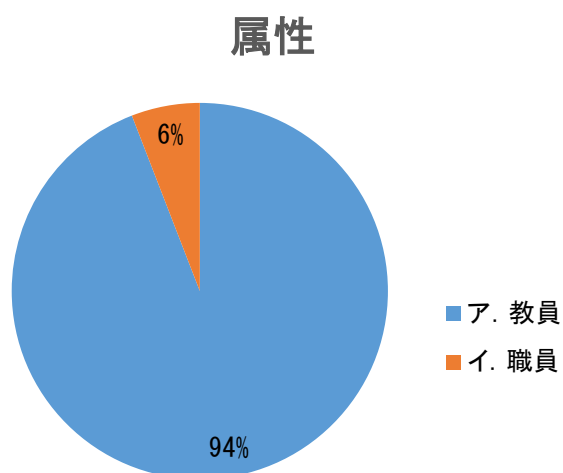
令和6年度第2回教養教育院FD参加者アンケート集計結果

FD参加者数：22名

(内訳：教員21名，職員1名)

アンケート回答者数：17

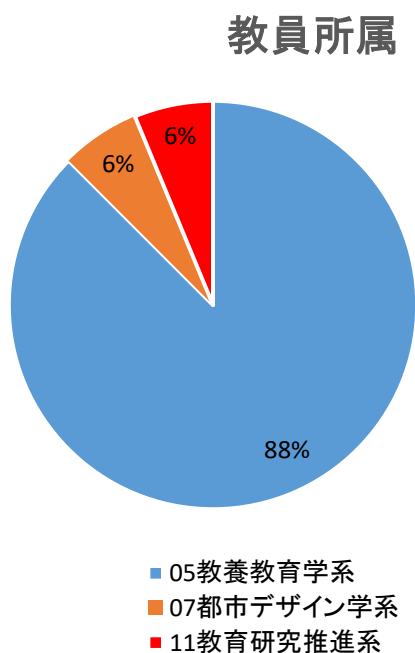
1. 属性を選んでください



属性

ア. 教員	16
イ. 職員	1
計	17

2. 所属を選んでください（教員のみ）

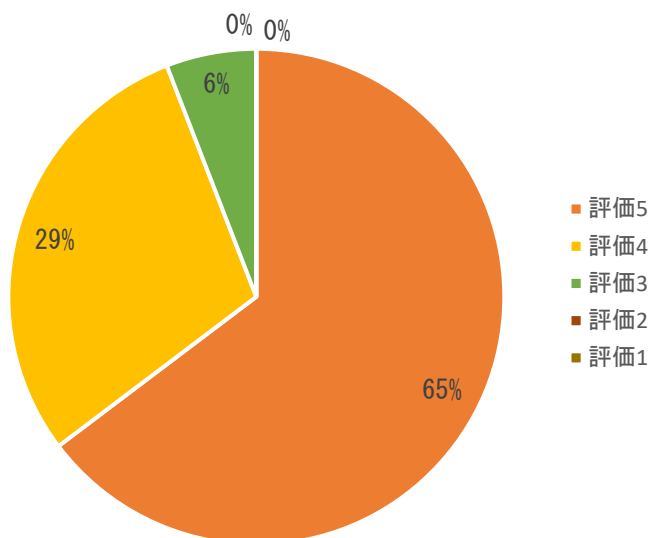


教員所属

05 教養教育学系	14
07 都市デザイン学系	1
11 教育研究推進系	1
計	16

3. 今回の教養教育院FDに参加しての評価を5段階評価で入力ください。

今回のFDに参加しての評価



今回のFDに参加しての評価

評価 5	11
評価 4	5
評価 3	1
評価 2	0
評価 1	0
計	17

4. 今回の教養教育院FDについての感想やご意見があれば、ご記入ください。

- ・内容的には不満はなかったのですが、質疑応答の時間が少ないのが残念でした。
- ・ルーブリックについてとても参考になりました。有難うございます。
- ・非常に高いレベルで完成されたルーブリック評価等についてのお話を伺えて、非常に勉強になりました。対面開催で直接お話をお伺いできて、とても良かったです。
- ・他大学の教養教育改革の状況や問題点等を知ることができ参考になりました。
- ・1クラスの学生数は、少ない方が良いと思います。英語の1クラスの学生数も、30～40人が限度だと思います。
- ・ルーブリックの使用について、宇都宮大学の教員や学生の意見を知ることができ良かったです。

5. 今後、教養教育院FDで取り上げて欲しいとお考えのテーマがあれば、ご記入ください。

- ・導入学修Aの現時点の案では「キャリアマップを作ること」が目標に一般的な大学教育に関するテーマでのグループワークが主となっていますが、この内容で具体的な教育効果が上がるような実感がわきません。確かどこかの大学では同様な内容の教養教育科目をうまく回しておられる事例があるというご説明であったと記憶しております。ぜひともその具体例をFDで取り上げていただければと思います。
- また、グループワークの進め方や評価の仕方について、日ごろから苦労しています。グループワークの進め方に工夫をこらしている実例、学生の相互評価をうまく回しておられる実例などがありましたら、取り上げていただければ幸いです。

第3回

「新教養教育先行大学(東北大学)に学ぶ教養改革
教養教育院 F D 2024 vol. 3」

『東北大学の全学必修導入科目「学問論」について』

(令和6年10月30日開催)

令和6年度第3回教養教育院FD 実施計画

テーマ「新教養教育先行大学(東北大学)に学ぶ教養改革 教養教育院FD2024 vol.3」

1. 開催趣旨

温暖化に代表される地球環境の劇的変化、コロナ禍、デジタル技術の急速な進展など世界中で様々なレベルでの人類を取り巻く環境は急激に変化しています。このような時代の変動を見据えて、これらに対応しうる人材を育成するため大学教育は大きく変わりつつあります。

全国の大学を見渡すと、新しい時代に対応した教養教育改革を進め、魅力的な教養教育を実施している先例が見受けられます。本学では、二年後の令和8年度を教養改革の転換点と位置づけて大きな改革の準備を進めており、このような先行例を学ぶことで、私たちの改革をさらに実りあるものへ進めることが可能になると思われま

す。今回のFDは、先行事例として東北大学の全学必修導入科目「学問論」についてお話しいただき、本学の教養教育改革に資する教訓を得ることを目的として実施します。

2. 開催日時

令和6年10月30日(水) 13:30~14:30

3. 開催会場

五福キャンパス共通教育棟D棟1階 D11教室

4. 対象

本学教職員、非常勤講師

5. 次第

(1) 開会挨拶・趣旨説明

片桐 達雄(教養教育院 教育改善推進委員長)

(2) 「東北大学の全学必修導入科目「学問論」について」

講師：滝澤 博胤 氏

(東北大学 理事・副学長、高度教養教育・学生支援機構長)

(3) 質疑応答

(4) 閉会挨拶

武山 良三(教養教育院長)

東北大学の全学必修導入科目「学問論」

- ◆ 東北大学ビジョン2030と全学教育改革
- ◆ 新カリキュラム移行（2022.4～）
- ◆ 学問論群

東北大学理事・副学長
（教育・学生支援担当）
滝澤 博胤



東北大学ビジョン2030の構想イメージ
最先端の創造、大変革への挑戦

主要施策数 計：66

2





学生の挑戦心に応え、創造力を伸ばす教育を展開することにより、大変革時代の社会を世界的視野で力強く先導するリーダーを育成する

社会の転換期を生きる学生の創造力を伸ばす教育の展開

- 未来社会に立ち向かうための基盤となる学士課程教育の新構築
- あらゆる境界を越え、創造的で活力ある研究者・高度専門人材を育成する大学院教育の展開
- パーソナライズドラーニングをはじめとする先進的ICT教育の推進
- エビデンスに裏付けられた新たなアドミッションの展開
- 豊かな経験を通じた、人格形成を促す課外活動・社会貢献活動の充実

社会とともにある大学としての教育の新展開

- 卓越した研究を基盤とした産学共創教育の展開
- 社会人の学び直しの機会を提供する新たなリカレント教育の展開

国際共修キャンパスの創造

- 世界から学生を惹きつける最先端の国際プログラムの開発・提供
- オープンでボーダレスなキャンパスにおける国際共修の展開
- 卓越した研究を基盤とした国際共同教育の深化

包括的学生支援の展開

- 様々な背景を持つ学生が安心して、ともに学ぶインクルーシブな環境の提供
- 学生へのキャリア支援・経済支援の充実



涵養する知識・技能

（知識力と人間力を涵養する重要な青年期教育と位置付け）

1. 現代人、国際人として社会生活を送る上で基盤となる知識と技能
2. 人間形成の根幹となる、現代社会にふさわしい基本的教養や技法
3. 専攻する専門分野の理解を助けるための幅広い学問分野に関する知識と技能
4. 専攻分野を学ぶ上で基礎となる知識と技能

科目構成

（主に1年次2年次配当だが高年次学生も履修可能）

基幹科目

人間論、社会論、自然論

（倫理、芸術、言語表現、ジェンダー、経済、社会、政治、歴史、生命、環境など）

展開科目

人文科学、社会科学、自然科学、総合科学

自然科学： 数学、物理学、化学、生物学、宇宙地球科学、理科実験

総合科学： 総合科目（ライフ・キャリアデザインなど）、カレントピックス科目（アントレプレナー入門など）、国際教育科目（海外研修など）

共通科目

転換・少人数科目（基礎ゼミ）、外国語、情報科目
保健体育、留学生対象科目

※「基礎ゼミ」： 知の継承と創造の現場に身を置いたことを実感する大切な機会



学生の挑戦心に応え、創造力を伸ばす教育を展開することにより、大変革時代の社会を世界的視野で力強く先導するリーダーを育成する

現行制度の課題

- 共通科目の分類の今日性
- 開講コマ数の増大
- 履修規則による硬直化
- 担当原則に関する諸課題
- 高年次教養教育の欠如

改革の基本理念

全学教育を「研究型総合大学」としての基盤と位置づけ、初年次から高年次、大学院学生に開かれた教育資源として共有する。

教育内容、教育方法、履修構造、教学マネジメントの観点からカリキュラムを整理

- 卓越した学術研究をもとに、未来社会に立ち向かうために必要な基盤となる学士課程教育を構築し、高年次教養教育と現代的なリベラルアーツを含めた分野横断型カリキュラムを実現
- 情報通信技術（ICT）の高度化、教育のDX化推進、グローバル化などの社会状況や教育環境の変化に対応し、キャンパスを越えた遠隔同時配信授業、並列開講科目の複数教室での同時配信、オンライン教材を利用した自学自習環境の整備を推進
- 学部高学年生・大学院生向けに、文理や分野を横断する授業を展開
- 開講コマ数の適正化（1870コマ：2019年度→約1400コマ：新カリキュラム）
- TA制度の改革：DC学生によるTF（ティーチング・フェロー）導入によるアクティブ・ラーニングの推進



東北大学ビジョン2030 VISION 1 教育

学生の挑戦心に応え、創造力を伸ばす教育を展開することにより、大変革時代の社会を世界的視野で力強く先導するリーダーを育成する

新しい全学教育の特性

教育内容、教育方法、履修構造、教学マネジメントの観点による教養教育改革

学生が未来社会に向けて備えるべき現代的リベラルアーツを体系化。初年次から高年次、大学院生に開かれた教育資源とした。

現行制度の課題

共通科目の分類の今日性

初年次から高年次までの教育の接続

学問分野ごとのカリキュラム

未来に接続するカリキュラム

- 中等教育と高等教育の接続**
大規模アクティブラーニング「学問論群」の新設
- 社会との接続**
キャリアデザイン教育、現代的スキル教育
- 教育プログラム間の接続**
教養教育⇔学部専門教育⇔大学院教育

知識の再構成の機会を拡張、高年次においても自分の専門を見つめ直し、自己成長を促す

分野横断型カリキュラム

- 普遍的教養と現代的リベラルアーツをバランスよく学修**
現代素養科目群を新設(文理問わないデータ科学)
- 持続可能性をはじめとする現代社会の課題に挑戦** 0.5単位MOOCコンテンツ

未来を構想してその実現に挑むフロントランナーとして、今必要な素養を修得、社会の課題に挑戦する

国際教育の充実

- 学術英語教育・複言語教育

国内最多の国際共修授業

新カリキュラムを支援

- 情報通信技術（ICT）の活用
Hyflex型国際共修授業 数学の大規模反転授業

新しいTA（ティーチングアシスタント）制度

全学教育新カリキュラム移行（2022.4）



東北大学 全学教育改革 2022年度～新カリ開講

涵養する知識・技能

1. 現代人、国際人として社会生活を送る上で基盤となる知識と技能
2. 人間形成の根幹となる、現代社会にふさわしい基本的教養や技法
3. 専攻する専門分野の理解を助けるために幅広い学問分野に関する知識と技能
4. 専攻分野を学ぶ上で基礎となる知識と技能

科目構成

★ 高年次教養科目 ★ 一部高年次科目を含む

基盤科目類	学問論群（学問論、学問論演習、展開学問論★）
	人文科学群
	社会科学群
	自然科学群
	学際科目群★（生命、環境、情報、社会、エネルギー等、融合型理科実験、保健体育など）
先進科目類	国際教育科目★情報科目★キャリア教育科目★ 現代素養科目群 地球規模課題科目★ カレントトピックス科目★
	先端学術科目群 フロンティア科目★（先端的話題をわかりやすく）
言語科目類	外国語（英語、初修語）★
	日本語（留学生向け科目）
学術基礎科目類	専門基礎接続科目（人文・社会系、理系基礎科目等）

総合大学ふさわしい全学総出動体制の下で運営⁹²（科目群ごとに企画担当責任部局を指定）



AI、数理・データリテラシー、SDGs等グローバル・イシュー、グローバル・マインドセット、地域社会の課題、アントレプレナー教育等を配置

情報科目

- ・情報とデータの基礎
- ・データ科学・AI概論
- ・機械学習アルゴリズム概論
- ・実践的機械学習I・II
- ・情報教育特別講義

文理を問わず全新入生必修
(2020年度より先行実施)

国際教育科目

国際共修環境で学ぶ

- ・国際事情
- ・国際教養PBL
- ・国際教養特定課題
- ・文化理解
- ・文化と社会の探究
- ・多文化コミュニケーション
- ・多文化PBL
- ・多文化特定課題
- ・グローバル学習
- ・キャリア関連学習
- ・グローバルPBL
- ・グローバル特定課題
- ・海外研修（長期・短期）

キャリア教育科目

- ・アントレプレナー入門塾
- ・社会起業家
- ・NPO入門ゼミ
- ・ライフ・キャリアデザインA～D
- ・インターンシップ事前研修
- ・インターンシップ実習
- ・汎用的技能ワークショップ
- ・キャリア教育特別講義

地球規模課題科目

3年次以降の高学年開講

- ・持続可能性と社会共創
- ・SDGsにみるグローバルガバナンスと持続可能な開発
- ・SDGs達成の現状と課題
- ・持続可能な発展と社会
- ・持続可能な社会実現に向けたシステム設計

2021秋学期～
カレントトピックス科目
で先行開講



目的

社会に旅立つ前に学問分野を越えた協働演習科目（チームワーキングの涵養）

- 異なる分野の学生同士が議論や発表を通し、分野を横断した社会の課題解決や実践知の往還を体験
- ICT活用により、異なるキャンパス間の双方向遠隔授業を導入
- 高等大学院機構では分野横断型の大学院共通教育を実施

高年次開講科目

- ・展開学問論
- ・持続可能性と社会共創
- ・SDGsにみるグローバルガバナンスと持続可能な開発
- ・持続可能な社会のレジリエントデザイン
- ・持続可能な発展と社会
- ・持続可能な社会実現に向けたシステム設計
- ・ジェンダー共創社会
- ・展開初修語III、IV
- ・東北アジア地域研究入門

大学院共通科目

- ・トランスファラブル・スキルズ
- ・大学教授法開発論

など





HyFlex型国際共修授業



- 国内最大規模の国際共修授業数(70科目開講)
- 海外キャンパスの学生と、本学キャンパスから「対面」参加の学生がHyFlex型で協働発表
- ICTの活用でオンライン・対面ミックス型グループの協働学修・協働発表をリアルタイムで実施
- 「対面」学修機会と、国境・キャンパスを越えた留学生の「オンライン」授業参加を両立

ICTを利活用した数学における大規模反転授業

授業前(30分)

授業動画視聴
(各単元の共通項目)
5クラス(約350名)共通

授業中(90分)

- ①対面+同時配信
- ②対面+録画配信
- ③対面+録画配信
- ④オンデマンド配信
- ⑤リアルタイム配信

授業後

- 収録動画公開
- 事後授業宿題
(WeBWork*利用)

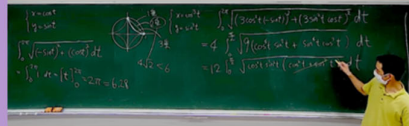
*WeBWork: Mathematical Association of America (米国数学協会)が提供するオンライン宿題システム

- BYODによるICTを利活用した複数クラス・同一授業における予習・復習重視型授業実践
- 学習到達度評価により効果を検証

定理
 $x = x(t), y = y(t)$ が滑らか (微分可能でしかも導関数が連続) ならば、 $C: (x(t), y(t))$ $a \leq t \leq b$ の長さは

$$\int_a^b \sqrt{\left(\frac{dx}{dt}\right)^2 + \left(\frac{dy}{dt}\right)^2} dt.$$

• 学生は授業のポイントを事前に視聴



期末テスト平均得点率が6ポイント上昇

通常授業

新しい形態

- 初年次学生向け「解析学A(350名)」の取り組み
- 2022年度は「線形代数学A」の受講者700名を対象に実施予定

学問論群と全学必修導入科目「学問論」



2002年から本学の初年次教育“基礎ゼミ”
(少人数型アクティブラーニング) 開始

主体的な学びの転換教育

主体的・対話的な深い学びに対応

学問論群に変革

大学院へ

卒業研究

展開学問論

学部高年次～大学院

学問論・学問論演習

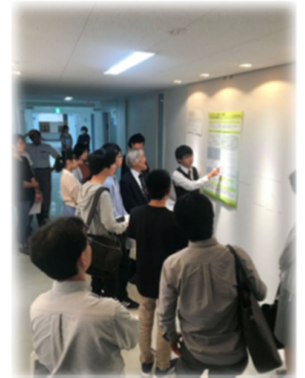
学部1年

幅広い教養、現代的リベラルアーツ (挑創カレッジ)

深化した専門教育

人文・社会・自然科学を融合し、「正解のない
問い」に自分で考え、アウトプットする教育を実現

分野横断、学際領域



学問論

学問論演習

展開学問論

大規模講義 座学で知識習得

レポート執筆, 相互評価

総長特命教授

→発想法・挑戦心

少人数対話

他者との対話を通して、
学際的チームワークの素養

BTA・TA・TF

ファシリテーション

アカデミックスキルズ



大規模講義



少人数グループワーク





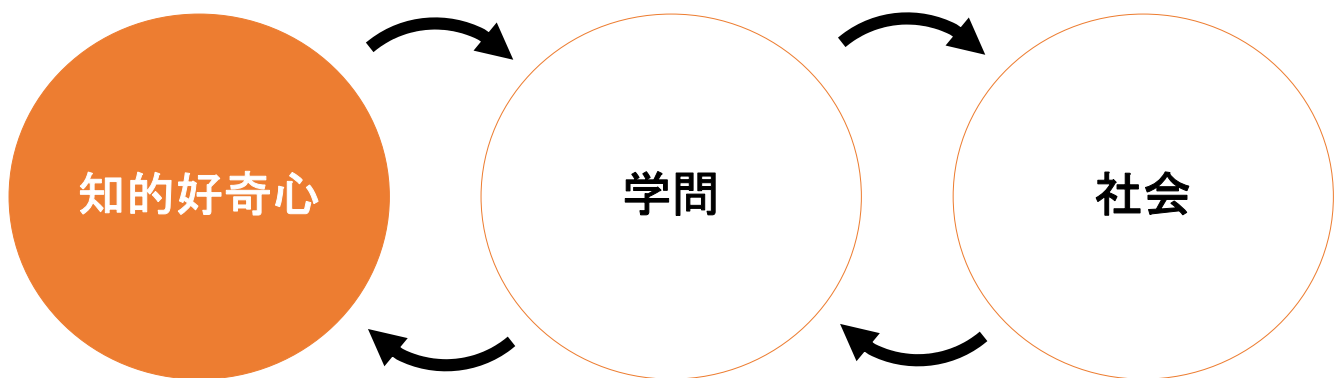
知的好奇心を主体的に追求し、社会とつなげる意識を涵養

東北大学の教育目標

専門分野に関する知識及び学問分野全体への興味関心と幅広い知識に基づく複眼的視野を有している

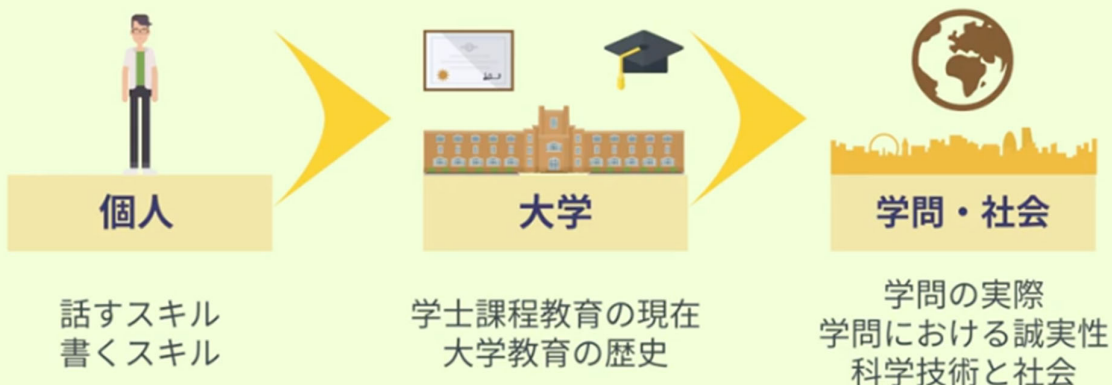
教養ある社会人としての素養を備え、専門分野特有の技能を活かして社会に貢献できる

グローバル社会において、指導的・中核的役割を果たす自覚と展望を持ち、基礎能力を備えている



好奇心を追求する

ミクロ視点からマクロ視点で学問を考える





知的好奇心に気づく・・・全学生共通日程

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 教養教育特別セミナー
- 第3回 春セミ (Spring Seminar)

知的好奇心を追求する・・・A/B別日程

- 第4回 アカデミック・スキル (OD:オンデマンド教材)
- 第5回 アカデミック・スキル (演習)
- 第6回 学問と大学 (OD) 学問をする場としての「大学」を理解し、大学の一員として
- 第7回 学問と大学 (演習) て知的好奇心を追求する展望を得る
- 第8回 学問と倫理 (OD) 学問を修める上で求められる倫理や誠実さを理解し、学術
- 第9回 学問と倫理 (演習) 共同体の一員として知的好奇心を追求する展望を得る
- 第10回 学問と社会 (OD) 学問と社会との関係を理解し、社会の一員として知的好奇
- 第11回 学問と社会 (演習) 心を追求する展望を得る
- 第12回 東北大学での学問 (OD) 挑創カレッジや留学等、大学の教育資源を紹介
- 第13回 あなたの学問 (演習) 学問論全体を総合し、東北大学での学問を展望する



学務審議会・教養教育院共催
東北大学教養教育特別セミナー

人間社会における 攻撃性と紛争

人間社会では、いじめやけんか、ストーカーや計画的な殺人から、部族や民族間、国家間の戦争や紛争など、さまざまな攻撃性や暴力、紛争が存在する。中世から現在にいたるまで、暴力や紛争による死亡率は減少してきていることが指摘されたり、現在の暴力による死亡数は自殺数よりも少ないことなどから、現代社会の習慣・制度や国際関係の暴力抑制の役割が指摘されている。一方で、暴力による死亡率の減少という統計やデータの信頼性については批判があり、紛争や暴力は実際には増加しているとする指摘もある。関連の資料によると、2016年には、暴力的紛争が発生した国の数が、ほぼ30年ぶりに増加

※全学教育科目「学問論」(第2週目)の一部として実施します。
※「学問論」受講者以外の学生・教職員も参加も歓迎します。

日程 2024 **4.15** 月
13:30 - 15:30 (メイン会場)

TOHOKU UNIVERSITY

当日プログラム

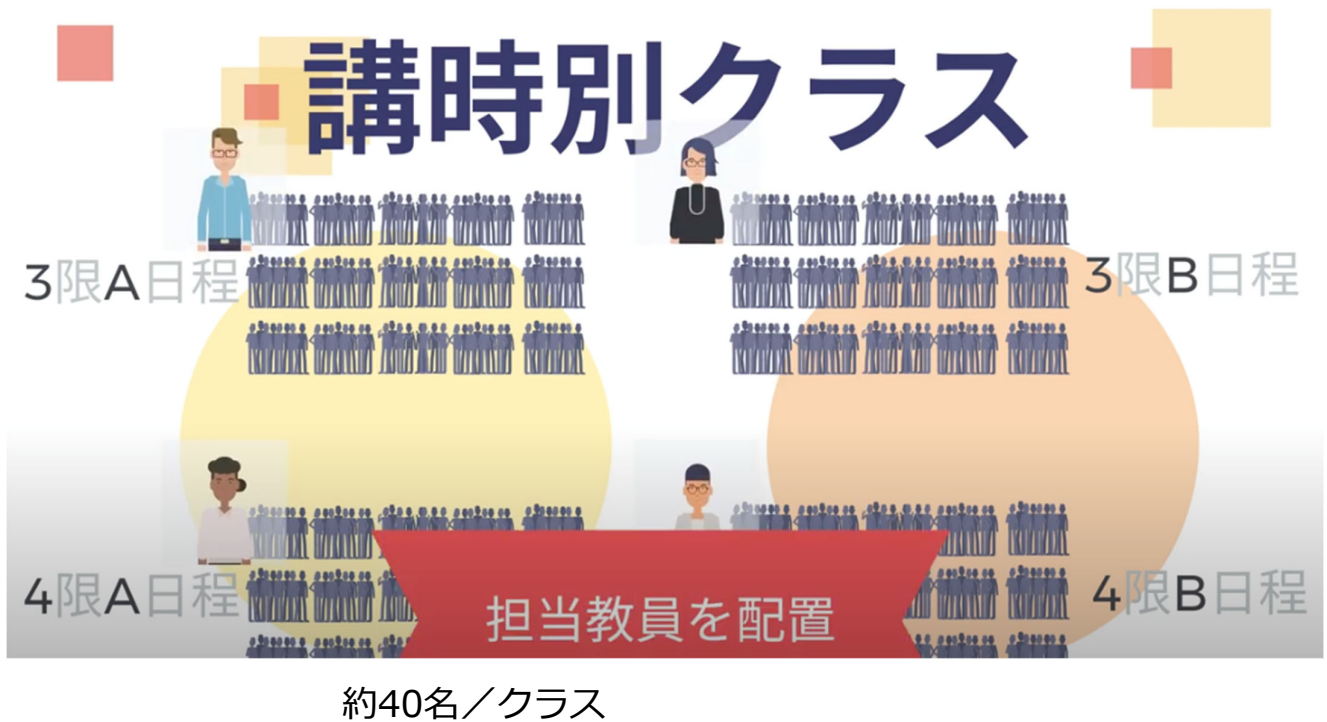
- 12:30 ● メイン会場入場開始
- 13:30 ● 開会
- 話題提供
 - 植木 俊哉 東北大学 理事・副学長／法学研究科教授 (国際法学)
国際社会における紛争の解決と東北大学の貢献
 - 田村 光平 東北アジア研究センター准教授 (人類学)
先史時代の人間社会からみる暴力や争い
 - 河田 雅圭 教養教育院副院長特命教授 (進化生物学)
人類の攻撃性の本性と進化
- 14:40 ● 質疑応答・全体討論
 - 討論パネリスト 教養教育院副院長特命教授
尾崎 彰宏 (西洋美術史)、静谷 啓樹 (理論計算機科学)
 - 田中 仁 (環境水工学)、日笠 健一 (素粒子物理学)
- 閉会・まとめ
- 15:30 ● 終了
- 司会 森本 浩一 教養教育院副院長特命教授 (言語思想)

- 2023年度：SDGsと東北大の挑戦～多様性をめぐって
- 2022年度：SDGsと東北大の挑戦～気候変動をめぐって
- 2021年度；パンデミックの時代を生きる
- 2019年度：「地球温暖化」-フェイクニュース？
- 2018年度：AI時代における教養の役割 98



教員・TA： 約40名 → 1セメスター月曜日3、4講時
 学生： 約2400名

講時別クラス



A日程、B日程に分け、オンデマンド・対面演習を交互実施

	A日程	B日程
1週	対面演習	オンデマンド
2週	オンデマンド	対面演習
3週	対面演習	オンデマンド
4週	オンデマンド	対面演習

A/B日程

評価項目

- ・各週の課題
- ・ミニットペーパー
- ・確認テスト
- ・小レポート
- ・平常点
- ・中間・期末レポート





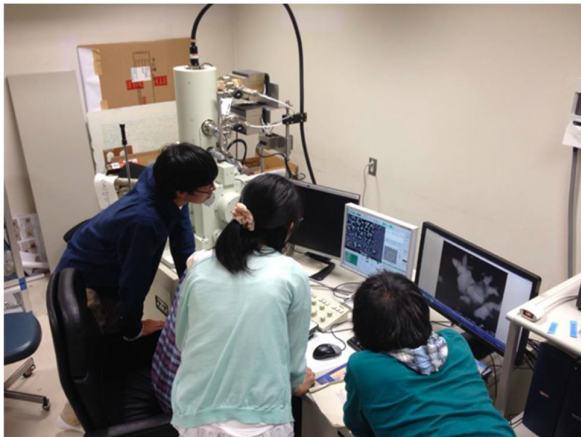
学問論

学問論演習

展開学問論

- ・ 探究型テーマによる少人数のアクティブラーニング (72クラス)
- ・ 文理融合した15~20名前後の少人数クラス

福島県教育委員会との連携(WWL) ふたば未来学園高校・福島高校の生徒大学生とともに、授業に参加した。
⇨デジタルオープンバッジを授与



学問論成果発表会：
ポスター発表会と口頭発表会で構成

- ・ **ポスター発表会** 73チームが参加 (高校生も5チームで参加、うち1チームが優秀ポスター賞を獲得)
- ・ **口頭発表会** ポスター発表68チーム (学期末に実施の集中講義以外が対象) の中から、投票で選ばれた16チームが進出 (高校生が参加の3チームも進出)

最優秀賞：「あなたも歯周病かも！？ ~20代の歯周病への意識を高めるPOD(イ)外創出」

今年度はWWL参画校受け入れクラスを10に拡大



学問論

学問論演習

展開学問論

- ・ 高年次 (3年生以上+大学院生) 学生が異分野でのチームワークとリーダーシップの涵養
- ・ 地球規模課題、SDGs、AIと倫理などの現代的課題に取り組む
- ・ ICTを活用し、時間と場所にとられない協働学習を提供

100名以上の新三年生が興味を持ち、クラスルームに登録した

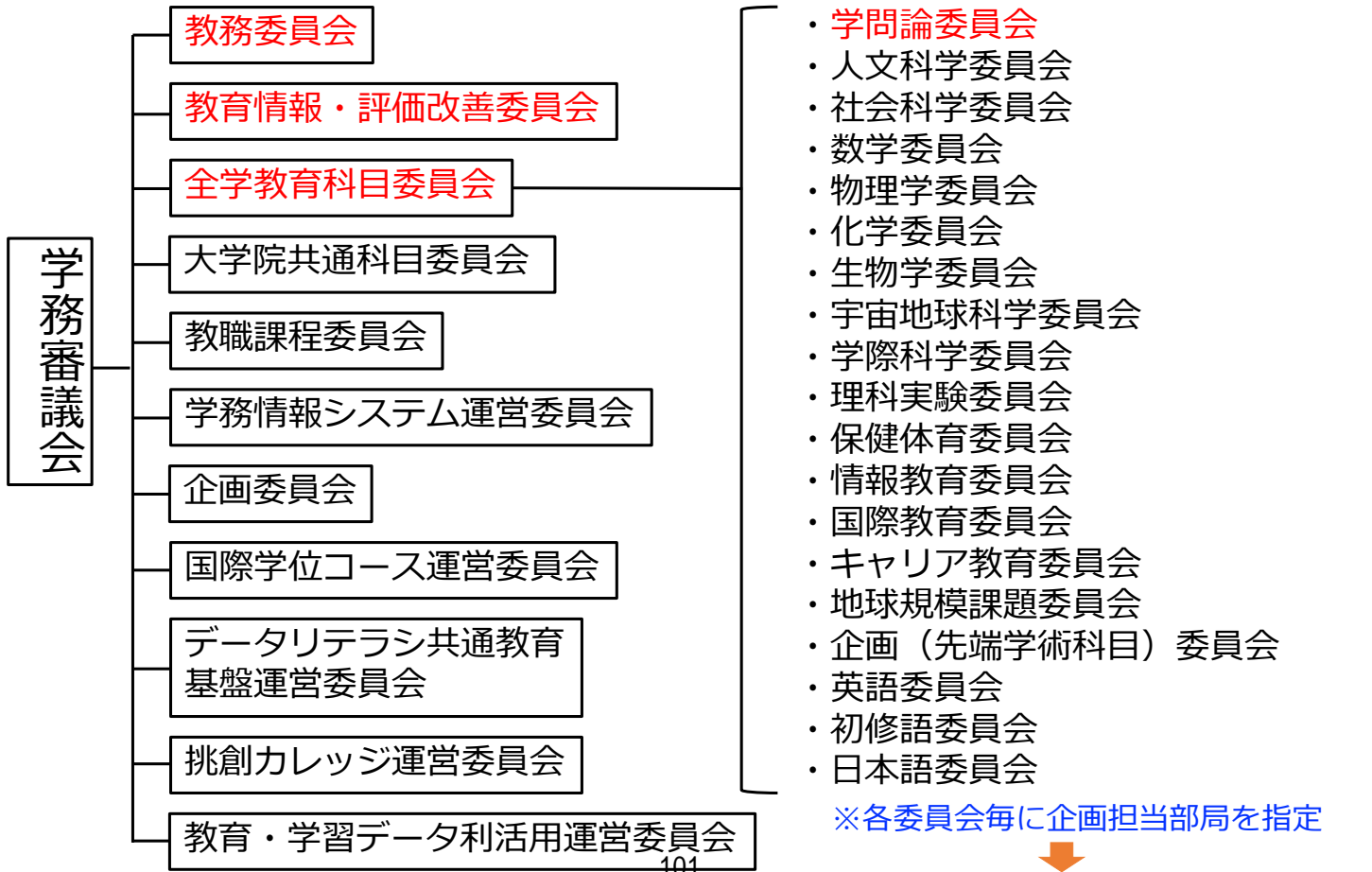


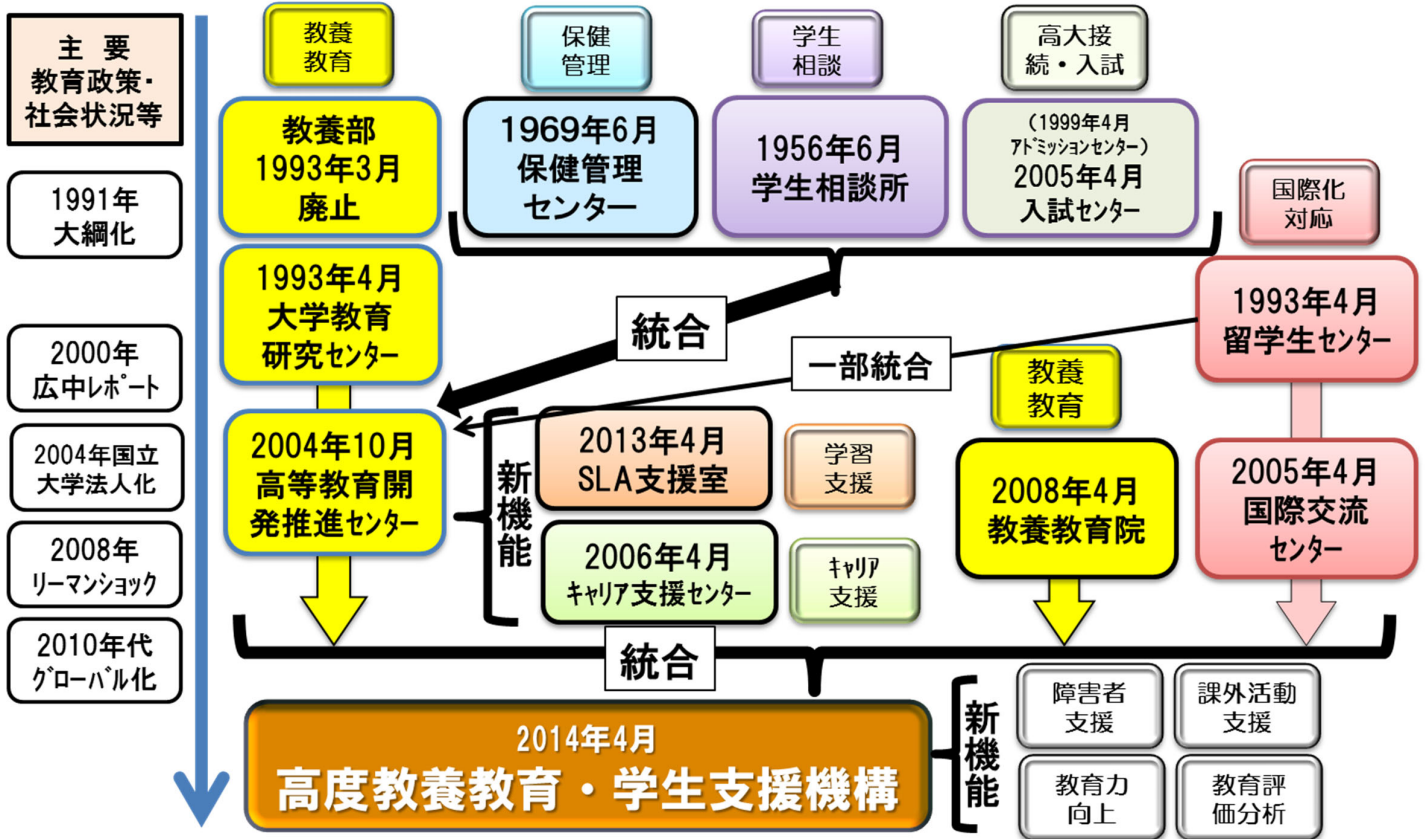
高年次教養教育の広報：経済学部・工学部の二年生6名が主体的に参画した

実施体制と評価・改善の仕組み



学務審議会







教育研究の豊かな経験を積んだ総長特命教授が、その経歴にふさわしい内容と質の教養教育を実施。全学教育科目にあつては、初年次教育だけでなく、高年次教養教育科目の担当を通じて、学部専門教育科目との両輪となるような貢献も目指す。また、高度教養教育として大学院共通科目を担当。

知的成熟と人間的成熟を目指す教養教育の重要性に気付きを与え、学部や大学院に在学の期間だけでなく、生涯を通じて自ら学び続ける人となるための強い動機を形成する活動を実践。

総長特命教授



尾崎彰宏
西洋美術史



河田雅圭
進化生物学



静谷啓樹
理論計算機科学



田中 仁
環境水工学



日笠健一
素粒子物理学



森本浩一
言語思想



- ・ 教養教育特別セミナー（全学部1年次学生対象：学問論の導入）
- ・ ILASコロキウム：総長特命教授合同講義
- ・ 「教養教育院叢書」出版
- ・ 「読書の年輪～研究と講義への案内」刊行

第1巻 教養と学問
 第2巻 震災からの問い
 第3巻 人文学の要諦
 第4巻 多様性と異文化理解
 第5巻 生死を考える
 第6巻 転換点を生きる
 第7巻 環境と人間
 第8巻 新しい途を拓く
 (近日刊行予定)

人間は環境の危機とどう向き合えるのか?
 教養教育院叢書
 「大学と教養」シリーズ



読書の年輪
2024年版は156篇収録

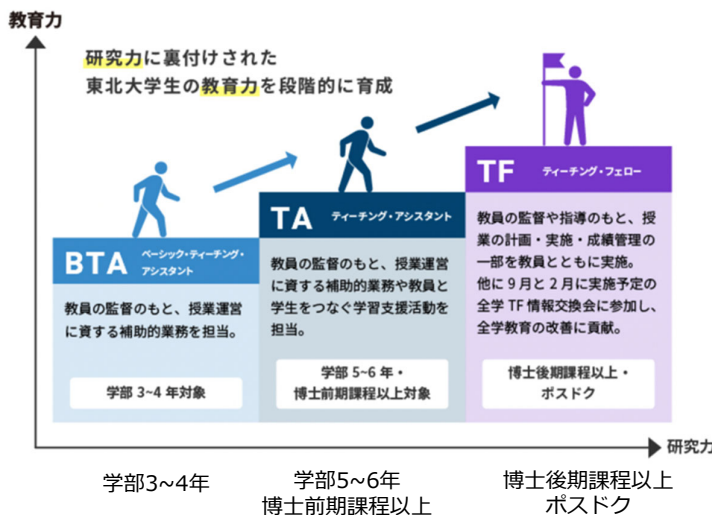


- 学務審議会委員長会議（年2回）
- 科目委員長と学部教務委員長との意見交換会
- 学生モニタリング制度による「全学教育に関する学生との懇談会」（年1回）
- 授業評価アンケート（年2回）
- 「東北大学における教育と学修成果に関する調査」（2年に1回）
- 「東北大学の教育に関する卒業・修了者調査」（4年に1回）
- 「東北大学の教育に関する雇用者調査」（毎年）



目的

- ・研究型総合大学の人材養成の一貫として、本学学生の教育力の段階的育成
- ・教員と学生との協働による全学教育実施体制の強化と質向上
- ・コロナ禍における学生への教育経験を通じた手厚い就学支援の実現



教育機能

- ・学生スタッフを加えた協調学習の導入
- ・上級生のサポートで深い学びを実現

研究機能

- ・他領域・分野横断型の教育の機会
- ・自身の研究を省察する力を育める

キャリア

- ・将来のキャリアの素地を醸成できる
- ・大学での授業実施を経験できる

人間形成

- ・後輩学生の成長を体感できる
- ・コミュニケーション能力を向上

経済的支援

- ・キャンパス内での勤務
- ・教育経験による就学支援の獲得



東北大学
学習支援センター（SLAサポート）
Center for Learning Support (SLA Support Office), TOHOKU UNIVERSITY

[リンク](#) | [サイトマップ](#)

SLAについて知りたい・利用したい

- 🔍 概要
- 📍 フロア案内
- 📖 利用方法



学部3年生～大学院生が
初年次学生の学習をサポート
（答えを教えず、問題解決まで
本人の思考に寄り添うサポート）

令和6年度第3回教養教育院FD

「新教養教育先行大学(東北大学)に学ぶ教養改革 教養教育院FD2024 vol.3」参加状況

【当日参加者内訳】

教員	
役員	1
教養教育学系	18
小計	19

職員	4
----	---

非常勤講師	0
-------	---

合計	23
----	----

【オンデマンド参加者内訳】

教員	
教養教育学系	1
教育研究推進系	1
小計	2

職員	0
----	---

非常勤講師	0
-------	---

合計	2
----	---

総計	25
----	----

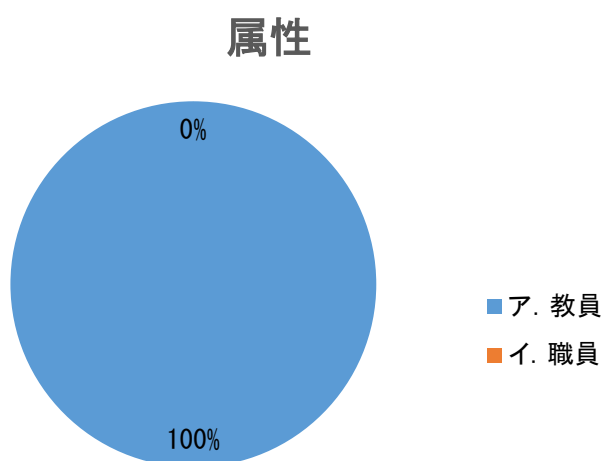
令和6年度第3回教養教育院FD参加者アンケート集計結果

FD参加者数：25名

(内訳：教員21名，職員4名)

アンケート回答者数：14

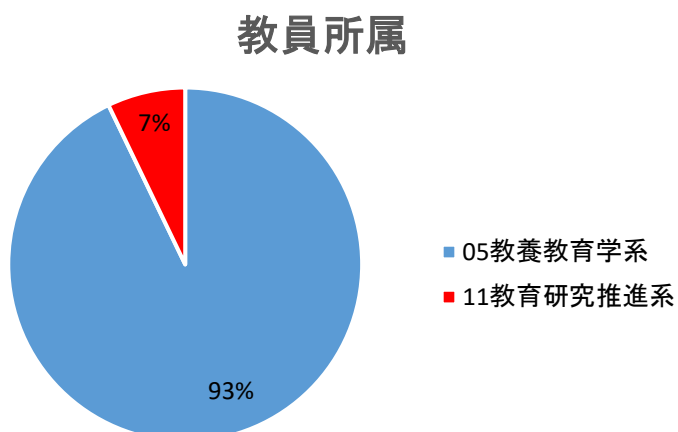
1. 属性を選んでください



属性

ア. 教員	14
イ. 職員	0
計	14

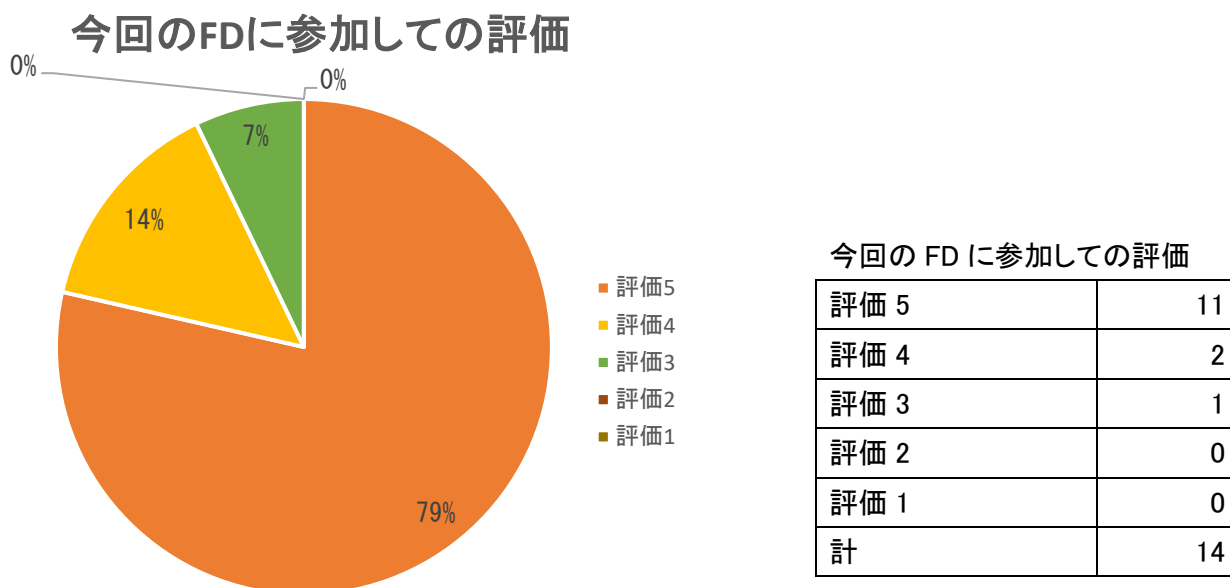
2. 所属を選んでください（教員のみ）



教員所属

05 教養教育学系	13
11 教育研究推進系	1
計	14

3. 今回の教養教育院FDに参加しての評価を5段階評価で入力ください。



4. 今回の教養教育院FDについての感想やご意見があれば、ご記入ください。

- ・人文学者はなかなか難しい立場です。
- ・ご講演内容がリッチ。あと10分、ご講演時間があればと思いました。
- ・可能ならば、もう少し講演の時間を増やしても良かったのではないのでしょうか。
- ・学生が高校でいかに学んでくるのかという点を踏まえ、カリキュラム構築や授業改善に生かしていく必要があるという点を改めて感じました。
- ・とても分かりやすい説明だったと思います。
- ・後援者の方は、「第一セメスター」とおっしゃっていたので、クォーター制ではなく、セメスター制なのかと思いました。また、東北大学のホームページを閲覧したところ、教養教育院の専任教員数が6～7人で少なく、写真から判断すると高齢の男性だけな事も、富山大学と異なると思いました。講演はスムーズでよかったですと思います。
- ・東北大学の先進的な取り組みについてのお話を伺うことができ、大変参考になりました。特に「学問論」の運営方法には多くの示唆をいただきました。また、学生が主体的に考え、学問への興味を深めるための工夫が随所に見られ、非常に勉強になりました。
- ・全体的には「大きな大学」ならではの理想に近い形態の実現を見せてもらった。導入科目を1週ごとに対面とオンデマンドを組み合わせる点や、高年次向け科目の実施形態など、我々にも参考になる工夫があった。
- ・英語について、「就職のTOEIC」、「留学のTOEFL」という表現がありますが、学生がどちらを受験希望か選択できる事も重要ではないかと思います。